

雲と草原

尾崎喜八著

朋文堂刊

Wolken und Wiesen

Schilderungen

雲と草原

尾崎喜八著

東京

朋文堂

此書を妻に

自序

「山の繪本」の出版後、ほゞ三年ばかりの間に都下の新聞・雜誌其他へ發表した紀行や隨筆の類を輯錄したのが此の本である。前著は、少くとも自分にとつては、意外なほど多くの讀者の支持を得ることが出來た。それに力づけられてゐた所へ朋文堂主人の勸誘があつたので、相變らず未熟なものではあるが此の機會に纒めて置かうといふ氣になつたのである。

「山の繪本」の出た當時と較べると、其後わづか三年の經過にも拘らず、社會の實狀も空氣も著しく變つて來てゐる。さういふところへ、要するに前著の續篇に過ぎないやうな物を提出して、それで果して前同樣の知遇を期待出來るかどうかは甚だ疑問と云はなければならない。たゞ此の本の內容を形作つてゐる文章の殆どすべてが、やはり同じ三年の間に諸方からの依賴によつて書かれたものだといふ事は事實である。してみれば社會の極く一部には、未だ私のやうな者に對しても要求するところが有つたのだらうと考へられもするし、又逆に、さういふ要

求に應ずる可能性のやうなものが私にも尙有つたかの如くに思ひ做すことも出來さうである。今日敢て此の本を出す氣になつたのも、畢竟自分に都合のよいこんな推定を恣にしたからに他ならない。

此の本の中には自然に對する私自身の愛や傾倒のやうなものが、勿論甚だ幼稚に且つ雜駁にではあるが、兎も角も隨處に出てゐる。それは私が自然との接觸・融合の中に、人間にとつて最も確かで又深遠な幸福の獲得の可能を信じてゐるからである。著者は、今後の社會にあつては、それぞれの人が銘々の禀質や境遇をとほして各自獨特の幸福を發見し、それを互に持寄つて、それ自身が社會生活の調和の歌であるところの新しい基準を打建てるほかに、眞に悅びをもつて生き得る道を見出す事はむづかしいのではないかと思つてゐる。そして若しも此の本もまた、さういふ考へ方をしてゐる一人の人間の、實り少くはあるが眞摯な試みの中間報告、未熟な草案の一種だと思つてもらへれば、こんな物でも編んで世に出す著者の目的は殆ど達せられた譯である。

昭和十三年六月

尾　崎　喜　八

雲と草原

目次

内容目次

青い遠方

休みの日

行人の歌

寫眞目次

裝幀　眞垣武勝氏

青い遠方

美ケ原

夜明け前に爽やかな村雨があつたらしく、松本平の空の中ほどには、雨雲の名殘りがいくつか、泉水をおよぐ鯉の群のやうに浮かんでゐる。其の背景をなす山々の關係的な高度から推して、亂雲といふものの高さの觀念がほゞ明瞭になる。驟雨のあとの五月の朝、彼等空の種族は、此の盆地の人生に一層親しく繫がつてゐるやうに見える。そしてそれを列車の窓から眺めてゐる私の方が、却つて偶然の他國者たる身分をはつきり意識させられる。

午前六時いくらといふ早い時間に、かくも多くの通學の女生徒を見るのは何の故だらう。項

の左右で振分けて結んだ短い髮、制服のジャンパア。妙齡といふには未だ間のある、むしろ青い桃の實のやうに固い、健康な少女の野性の香を臆面もなく車内にまきちらしながら、いづれも膝の上に教科書や筆記帳をひろげて、地理、博物、英語、數學などの學科を、賑かに暗誦したり默々と復習したりしてゐる。おもふに此の子達は今日試驗を持つてゐるのである。それで學校のはじまる前、尙一時間なにがしの試驗勉强をかせぎ出すために、申し合せたやうに早出をして來たのであらう。

右手の窓には朝日にけぶる雲の金髮をもやもやさせた美ケ原熔岩臺地、左の窓には夥しい殘雪を朝暾に染めた北アルプスの連峰とその前山、そして雨後の田園を疾走する車の中では、四拍子の轣轆を壓して此等制服の信濃乙女の朝の連禱(リタニー)……

午前七時、しつとりと濕めつた松本驛の前の廣場、私を乘せた入山邊行の始發バスの運轉手臺に、若い女車掌が今朝切りたてのヒヤシンスを挿した。一本は紫、もう一本は珊瑚いろ。此の山の都會の朝の空氣にふさはしく淸純で、陶器のやうな冷めたさを持つた美しい花である。同時にそれは、今日彼等の美ケ原をたつた一人で訪れる私への、もつとも優しい春の朝の挨

拶でもあつた。

バスは町なかを目まぐるしいくらゐ幾度も直角に曲つて、地圖と實景とを對照してゐる私をまごつかせながら、やがて市の東の郊外へ出た。薄川流域の田園を紅にいろどるレンゲサウ、遠近のみづみづしい新綠。もう營巢を始めたツバメやイハツバメが、頻りなしに道路の上を翻つたり人家の軒下へ流れ込んだりする。

市中の小學校へ通ふ田舍の子供の群に幾つも出會ふ。彼等のうちで詰襟の洋服を着てゐる者は、そのズボンが大人のやうに長い。これは寒氣の強い信州の田舍では常に見るところだが、其服がいつもひどく古びて垢じみてゐるので、何となく小さい工場勞働者のやうに見えるのも是非がない。曾てシュヴァルツヴァルト地方の風俗寫眞を見た事がある。其の中でハスラハという町の小學生達がやはり半ズボンならぬ長ズボンを穿いて、鍔の廣いフェルト帽をかぶり、カラアに蝶ネクタイ、蝙蝠傘を小脇にかゝへたいでたちが、まるで小さい田舍紳士であつた。それはいゝが足はおほむね跣で、むきだしの踝が哀れであつた。しかし此處では流石に跣という事はなく、東も角も一度は運動靴であつたと云ふ事の出來る一種の履物を履いてゐる。

山が左右から迫つて來る。打開けた田園がだんだん先ぼそりになる。川の右岸を行く道が次第に高くなる。袴越と出峰山との間、ちらほらと山櫻の白い薄川の谷奥に、王ケ鼻から茶臼へつゞく高原南端の雄大な懸崖が、星を鍛へる巨大な鐵砧(かなとこ)の縁かとばかり、大空を横一文字にかぎつてゐる。

大手橋で下車。松本から二十五分である。深い澤の落口にかゝつた橋の袂で身支度をとゝのへる。崖には一面にしだれ咲く山吹の花、路傍には白いヲドリコサウ。運轉手は私が與へた一本の金口を大切さうにポケットへ收めて、代りに常用のバットへ火をつけた。車掌は腰に兩手をあてゝ新綠の山に見入りながら、春や風景についていくらか詩的な事を彼に言ふ。そして運轉手は「うん、うん」とうなづきながら、長閑に煙草をふかしてゐる。

眼の前に立つ二三本のサハグルミ。若葉と一緒に伸びた其の薄黃いろの葇荑花を今日の山路の最初の合圖として喜びながら、やがて自動車の彼等と別れる。

バスは一聲高く笛を鳴らして元來た道を歸つて行く。私は橋をわたつて反對に坂道をのぼ

る。朝の歩き出しの靴の輕さ。そよ吹く風の無言歌のやうな深さ、柔かさ。心はおもむろに所有の歌に滿たされる。

麗らかな日光を斜めに浴びた三反田。部落の廣場に「中入堰趾」と書いた標柱が立つてゐる。道が二叉に岐れる。正面のものを入山邊・扉鑛泉への道と推測して、左へ敷石道をあがつて行く。

ふりかへれば松本平にたゞよふ霞の上に春まだ淺い雪の常念、蝶ケ岳。前景の農家の屋根で黄鶺鴒がチリチリ鳴いてゐる。其處に立つ一本の山櫻は山村の五月柱（メイポウル）と云つていい。あまりに美しい春を一人行く心よ！　私は行を共にして敢て悔いざる友の名を指折り思ふ……

村を出はづれると漸く山道らしくなつた。ホウムスパンの上着が如何にも暑い。脱いでルックザックへ押し込んで、シャツとチョッキで行く。片側を細い水がちよろちよろ流れてゐるが木立は無い。ひたすらに三城牧場の涼しい樹蔭が慕はれる。

山の畠へ仕事に行くのだらうか、飲水を詰めた一升壜を下げて鍬をかついだ女房が行く。門つ

か五つになる女の兒が、遲れ勝によちよちしながら附いて行く。何か知らぬが路端のいろいろな細かい物が彼女の注意を引くらしく、時々しやがみこんで指先でほじつたり調べたりして、道草を食つては先へ行く母親に呼ばれてゐる。

自分も食べてゐたので其子にネーヴルを一つ遣る。初めはびつくりして泣出しさうであつたが、別に害意も無いと分るや、小さく兩手の平をくぼませて其の果物をうけとつた。母親の知らぬ間の、二人だけの祕密の交涉である。

それにしても南北を山にふさがれた道の此の蒸れるやうな暑さ！　鶯が無數に鳴いてゐる。蟬の齊唱は炎熱の夏の凱歌だが、餘りに多い鶯の歌は晩春の溫氣をいやが上にも重たくする。

澤が二つに分れる。正面の澤の奧には、青ぞらを拔いて、大洋航海船の高い舳のやうな王ケ鼻の一角がそばだつてゐる。武石への山道がほそぼそと左の切畑へ消えて行く。五月の陽光は其處に溜まり、自然は森閑、せゝらぐ水に近く木を運びだす男が二三人、春の日永をのんびり働いてゐる。傍には老人が一人、横はつた材木に腰をかけて煙草を吸ひながら、仕事をする連中と何かぽつりぽつり話してゐる。

あれから半道あまり進んだ。落葉松の植林に沿つて行く蔭の多い道だつた。今や其のつぶつぶの新芽を綻ばせた落葉松は、淡褐色の枝に綠の霧を吹きつけたやうに見える。

林間疎開地をおもはせる打開けたところ、王ケ鼻と三城牧場への分岐路を示す標柱。石切場が近いか、あたりに散亂する石の破片、腰を下すと其の溫みの傳はつて來る日に曝された熱い岩。たへず眼の前を飛び廻りながら、時々じつと眩ゆい路上に翼をやすめる孔雀蝶。ステッキに捕虫網を取りつけて二羽を捕獲する。

松本の人らしい登山者が二人、早足に通り拔けて王ケ鼻への道を行つた。私はゆつくり遊んでから、右へ、三城牧場への道をとつた。道はすぐに登りになる。此の尾根ひとつで牧場へ入る事が出來るらしい。途中。右手に谷がひらけて、落葉松の梢の上に殘雪の北アルプスが美しかつた。カメラを出して其の眺めを撮影してゐると、また一人、今度は大きなルックザックを背負つた若い人が登つて來て、挨拶しながら通り過ぎた。

頬にたがれる汗を拭きふき登つて行く。やがて尾根通りへ出る。左へすこし登ると峠のやう

な草原の小平地、木立が涼しい蔭をつくつてゐる。其處へ行つて涼みながら一息入れようと思つたらもう先客が一人ゐた。今しがた遭つた大きいルックザックの人だつた。挨拶をして草の上へ腰をおろす。

こゝは南の眺望が晴れやかに開けて、自然が、莊大といふよりも、寧ろ其の愛らしい一面を見せてゐる。眼の前には熔岩丘のやうな觀峰の大きなかたまりが淺緑に萠えて風景の中心になり、その下には大門澤の水の流れる草原がのびのびと擴がつてゐる。そして觀峰のうしろを、鉢伏、宮入とつゞく美しい平頂の丘陵がぐるりとめぐつて、此の風景の牧歌的な性格にますます有力な寄與をなしてゐる。夜上りの今日の快晴がさかんな上昇氣流をつくつてゐるのか、諏訪盆地の方角の空には、ぽかりぽかりと氣球のやうな積雲の浮游。その雲の白さ、空の青さ、柔かな山々の線と地膚の色のあたゝかさ。ぼんやり眺めて時の移るのも忘れさうだ。

私と並んで此の風景に眼を憩はせ心を遊ばせてゐる青年は、松本の家具屋さんでM君といつた。今日はお天氣がいゝから穗刈三壽雄さんの組立カメラを借りて來て、これから牧場と美ケ原とを寫しに行くのだと云ふ。それでは丁度いゝから一緒に行きませうといふ事になつて腰を上げた。

佳いお天氣と、穗刈さんの組立カメラと、春の山。私にとつてはそれだけで充分詩だつた。
「これが其の寫眞機です」と云ひながら、M君は横ひろがりに嵩ばつたルックザックを撫でて見せた。

これまでに幾度か人の書いたもので讀みながら、さまざまに想像してゐた三城牧場。これがあれか？　成程と思へば思へもするし、違ふと云へば云へもする。讀む事がむづかしいやうに、書く事も亦むづかしいものだと私は思つた。

牧柵を越えて中へ入ると、大きな岩の散亂するあたりに一本の棠梨（ずみ）らしい老木がある。未だ花　咲いてゐないが、四方へ張つた大枝小枝が地面の上へ複雜な影を落としてゐる。先づ其處へ行つてルックザックを下ろして、何は兎もあれ撮影にとりかゝる。

M君はと見れば、彼もまた向ふで早速始めてゐる。三方へ踏んばつた木製の大三脚が機關銃のやうに見える。

最初放牧の牛が六七頭ゐたが、私達が入込んで來るのを見るや、のそのそ立上つて步き出し、今では二頭になつてしまつた。此の二頭にまで逃出されてはどうも牧場の繪にはなり憎か

らうと、それで直ぐに用意に掛つた譯だつた。

正面奥にはあの百曲りの急坂を見せた美ケ原南東の懸崖、つゞいて右に茶臼山西尾根の老大な一角、中景は丘陵性の臺地の起伏と落葉松林、前景には散亂する安山岩の自然の布置と二頭の牛。これが私の構圖だつた。

ともかくも斯うして撮影を濟ますと、パイプを啣へて私は此の牧場をもう一度見直した。

これは三方を馬蹄型に山でかこまれた谷合緩斜地の牧場である。其の中を薄川の一支流が二本の澤となつて貫流して、此の兩者の間を落葉松や躑躅の類の密生した氷河堆石のやうな丘陵狀の尾根が走つてゐる。それがため全景は長軸の方向に沿つて幾つかに分たれて、牧場そのものの印象は、一見ひどく奧まつた、細長い且つ狹いものに見える。

東信牧場や蓼科牧場はむしろ凸面の牧場の美に屬するが、此の三城牧場の良さは正に凹面の牧場のそれだと云へる。彼處で遠山の翠微が牛たちの圓らな瞳にうつるとすれば、此處では暮靄の底に彼等の夕べの聲が消え入るであらう！

むかうでは小屋が眞晝の薄青い煙を上げてゐる。時計を見ると十二時に近い。私は小さい流で手を洗ふと、今や瑞西の何處かのアルプへでも來た氣になつて、辨當をつかふために、其の

小屋の方へ大股に歩いて行つた。

私のやうに小屋へ入り込んでお茶などは貰はずに、美しい風景を眼の前に水で辨當をつかつたらしいM君が、向うの路のへりへ腰をかけてちやんと私を待つてゐる。たとひ偶然の道連れとはいへ、美ケ原まで一緒にと契つたものを、なぜ外で肩を並べて食はうとはしなかつたのであらう。どうして其處へ氣が付かなかつたのだらう。およそこんな心遣ひを、人間極めて當然な事として、常々幼い者などに言ひ聞かしてゐる自分なのに。

私は愧ぢた。同時に、其人に對して、今までよりも一層の關心を持つやうになつた。

私達は小屋の横手の一寸した高みを越え、澤を下りて水を渡り、向側の丘陵を横斷して百曲りの方へ進んで行つた。

山の牧場といふ物は離れて見た眼には歩くに樂しい草原として映るが、さて實際に其場に足を踏み入れてみると、案外歩きづらい物である。ふつくらした面、のびやかな線の流れのやうに見えたものが、思の外にでこぼこで、其上何か非常に大きな海綿でも踏んで行くやうに、足に確かな應へが無いために、長くつゞけば膝頭ががくがくして來る。

私達の橫斷した緩やかな丘陵がやはり其例に洩れなかつた。それはまるでかさかさに乾いた浮洲だつた。かてゝ加へて眞晝凹の太陽は苦しいまでにいきれを立たせ、灰のやうな輕い土は靴を覆つて、汗ばんだ手の甲にまで眞黑にこびりついた。

しかしもう後一週間たつた頃の美しさをどんなだらうと想はせる蓮華躑躅は此の牧場に一面だつた。また暑さと苦しさとに對する報償として、淸らかな聲で鳴く小鳥もゐつた。その上私にとつての最大の仕合せは、求めても容易には得難いやうな、實に一箇の「見つけ物（デ・ウヴェルト）」とも言ひ得るやうな、實意に滿ちた、感じばやい、優しい心の道連れを偶然にも持つた事だつた。もしも此人との遭遇が無かつたならば、私は此の暑さと、此の步行の苦しさとに辟易して、或は牧場小屋に泊る事の易きについたかも知れなかつたのである。

遂に苦しみが去つて樂しみが來た。

不安定なぽか土が終つて確乎とした岩の道が始まつた。

澤が現れ、水が潺湲と流れてゐる。岸の岩の間には到るところコキンバイの花が黃金いろに咲き、日光に照りかゞやき、跳ね躍る水のいきほひに顫へてゐる。



霧ケ峰

私達は當然の事のやうに靜かに其處へルックザックを下ろした。そしてお互に少しやつれの見える和やかな顏を見合せた。此の瞬間「友」といふ言葉が、此の若い道連れに對する實にはつきりした觀念となつて私を襲つた。私は其の言葉を咀嚼してみた。間違つてはゐなかつた。

饒舌するものは何ひとつ無かつた。その友は膝の上へ兩手の指を組合せて、練絹のやうに捩れて伸びる水の流れを身うごきもせず見つめてゐる。

私は黃金いろに花咲くコキンバイの二株三株を家苞として採集した。すると友は何時の間にか腰を上げて、私の採つたよりもずつと立派なのを採つて來て吳れた。彼は又一種の菫も探し出して吳れた。それは私の全く知らない種類だつた。

澤を過ぎれば今度は小さい草原だつた。一つの樂しみの後へ又別の樂しみが續くのだ。花の次には蝶だつた。

私は其處でギフテフの飛んでゐるのを見た。ギフテフは六年ばかり前に石老山でたつた二羽を採集したきりである。しかもそれは鱗粉もはげて哀れな姿のものだつた。ところが今見たギフテフは、飛んでゐてさへ黑と黃との色彩を鮮明に識別する事が出來るほどに新らしい。私の胸は躍つた。私はすぐさま捕蟲網を取り出した。そして散々追廻した末にとうとう捕へた。し

かも私の喜びを狂喜にまで押上げるかのやうに、手の内のそれは紛れもないヒメギフテフだつた。ヒメギフテフは私にとつては初めてゞある。

此の活劇を見てゐる内にM君もたまらなくなつたらしく、私から網を受けとると一羽のキベリタテハを追ひはじめた。しかし蝶の狩獵にも幾らかのこつはあると見えて、曾て八ケ嶽で私の義弟を散々なやましたキベリタテハは、私の此の新らしい友の初心の手ごつちには終へなかつた。M君はとうとう斷念した。

「どうもむづかしい物ですな」

さう云ひながら彼は私に網を渡した。

右は陣ケ坂．左は百曲りへの分岐點だつた。

こんな道草を食ひながら、一體今を何時だと思ふ。午後一時半を過ぎてゐる。そしてお前は美ケ原から抑も何處へ行かうと云ふのだ。上和田へ。

しかも私は百曲りの登りがどんなに苦しいか、又美ケ原から上和田への道がどれほど長いか、みんな本で讀んで知つてゐる。たゞ知らないのは自分の實地の體驗だ。

私は心中でこんな問答をした瞬間、冷水を浴びたやうに身ぶるひを感じた。

その百曲りが眼前に長い急坂を懸けてゐる。頂上の熔岩の崖は又其の上で砦のやうに聳えてゐる。しかも雲。北西の天から廣々と流れ出してゐるのは米の磨水のやうな巻層雲。あゝ、急がなくてはならない！　行かなくては！

その急な長い登りを若い友の後から私は行く。諦めた人のやうに。追上げられる者のやうに。

百曲りは、謂はゞ美ケ原の熔岩がその節理にしたがつて薄板のやうに剝落して作つた崖錐面に、幾曲折の電光形を描いて付けられた登路だと言へよう。したがつて其のガラガラの程度は上へ行くほど烈しく、樹木の生えてゐるのは下から中腹あたりまでか、或は上の方でも斜面が一部棚狀を呈して、比較的地盤の安定が保たれてゐる個所であるやうに見えた。

一曲り行つては息をつき、三曲り行つては振返る事に密かに極めてじりじり登つた。振返るたびに槍、穗高、乘鞍、御嶽などがせり上つた。乘鞍頂上に擴がつた雲の、氷河のやうに青白く光るのが妙に心を重くした。

時のたつにつれて巻層雲の領域はますます廣範圍になつて來た。太陽はその光が次第に水つ

ぽくなつて、痣のやうな色の傷ましい大きな暈をさした。
今朝牧場下の分れ道で見掛けた王ケ鼻口からの二人の登山者が、身を翻して飛ぶやうに下山して行つた。その身分が今はひどく羨しかつた。あゝ降りの嬉しさよ！　私は不圖今夜の和田の泊を空想したが、それまでの前途を思ふと忽ち心は暗くなつた。
しかし何事にも終りは有るやうに、此の辛い百曲りの登りもやがて終つて、とうとう美ケ原の上へ私は立つた。最後の曲りの處で一足先へ行つて貰つた松本のM君は、原の奥の方を見に行つたのか、もう何處にも姿が無かつた。
私は枯草の上へどつかと坐り込んで一時間ぶりにパイプをくゆらした。突然瘧が落ちたやうに、一時に重荷が下りたやうに、氣も輕々、身は萬遍なく自由自在になつて、何だかひとりでに微笑まれた。
「來てよかつたな！　來てよかつたな！」
そんな言葉を心は歌に歌つてゐた。
それから疲れが恢復すると慌てゝ寫眞機を取出して、先づ原の西端の斷崖を槍と穗高を入れて寫し、次に一人で記念撮影をした。それが濟むと今度は空身で歩き廻つた。三時に會つて別

れませうと、M君と約束した其の三時まで。

M君からの最近のたより――

「先日は御轉居の御通知を下さいまして誠に有難う御座いました。御無沙汰をいたして申しわけ御座いません。其後お變りもなくお暮しの事と存じます。下つて私も變りなく暮しております故他事ながら御安心下さい。

松本も大變に暖くなつてまいりました。憎い程の寒さからのがれて、又暖い春の日をむかへる今日此頃は、遠く忘れかけてゐた山々のことが想ひ浮べられます。古い寫眞機でも持出して行きたいやうな美しく晴れた日が毎日續きます。

アルプスの山の麓は雪がまばらですが、峯へ行くにつれて眞白です。今日は曇つて見えませんが、吹雪になつてをる事でせう。美ヶ原方面の山にも下の方にはもう雪がありませんが、峯には何處も雪があります。

こんな事を書いてをります間にも昨年の山中での思ひ出が浮んでまいります。其時に苦しかつた事も、月日が立つて思ひ出となつた時は、ほんたうに樂しく亦なつかしいものです。私共

はいつも山を見なれてをりますせいか、いつでも山へ行けるといふ考へでをりますものですから大して行きたいとも思つてをりませんが、それでも、たまには登つて見たいなあと思ふ時には、たまらなく山へのあこがれが體にみなぎつて參ります。

山でも一日か二日がゝりで行けるやうな緑の山が好きです。

皆樣へよろしくお願ひいたします。時節柄御身御大切になさるやう御願ひいたします」

M君への返しに書齋での寫眞に添へて――

「懷しいおたよりを嬉しく拜見しました。又めぐつて來た清明の季節に、松本の自然を生返らせる早春の光や色や、さては活氣づく人々の心のさま、さこそと遙かに推察されます。

自分の仕事そのものにさへ、或無形の威迫を受けてゐるやうに思はれたあの事件からの魂の惱み、心の動搖が漸く鎭まると、折柄の轉居を機會に、又新らしく盛返した信念にしたがつて、前よりも一層確乎として毎日の仕事にいそしんでゐます。

自然は僕にとつては自分の藝術の生みの母です。僕は母を尊敬し、愛し、此の母に依り頼み、それに聽き、そして永遠の赤兒のやうに彼女に縋つて、その豐かな胸から絶えず吞みま

す。僕を人間たらしめる「人間の汁液」は、彼女の乳房からマナのやうに降り、そゝぎ、流れます。これこそ創造の盡きる時無き泉です。

そしてやがて死ぬべき者僕が、仕事を終へて、此世の綠の夏草の中、白い石の下に朽ちる時、不死の者、母なる自然は、その大いなる見えざる指で、宇宙をわたる微風の中に僕の小さな名を書くでせう。さう信ずる事の出來た瞬間、僕は此の寫眞をとりました。あの美ケ原での無上の時間をあなたが思ひ出す其の時々、あなたの記憶の映寫幕（エクラン）に此の一人の友の俤が浮んで來るよすがにもなれと念じながら。今これを御手もとに屆けます」

約束の午後三時、私は美ケ原山上でM君と袖を別つた。別れの爲めの約束は却つて再會の約束を生み、更に寫眞の交換の、時々の消息の遣取りの約束を生んだ。又玆にほだしが出來た。然したまたま誰かと羈絆に結ばれる事が、なんと自分を人間らしくする事だらう！

私は高原の緣を陣ケ坂の方へ歩いて行つた。三城牧場の小屋番に、此方を近いと敎へられたからである。空は漠々と雲を增して、太陽の姿はもう見られなかつた。北アルプスもたゞ俤のやうに見えて、光のない雪が悲しく白い。風がばうばうと吹きわたる。寒さが身にしみて來

る。此の廣大な美ヶ原を今歩いてゐるのは自分一人だといふ自覺が、或る誇らしい氣持と同時に底知れぬ淋しさを私に抱かせた。

茶枯れた草と風との中に、何か眞白な物が横はつてゐる。その白さは寒水石に似てゐる。近づいて見たら馬の骸骨だつた。私は後をも見ずに足を早めた。

やがて茶臼山との鞍部の陣ヶ坂。雲が薄れて弱々しい日が洩れて來た。正面に堂々と聳える蓼科山から、其の麓にひろがる一帶の高原。其處へは赤々と夕日が流れて、今日の終末を飾つてゐる。「これだけはどうあつても」と、私は峠の下り口へ三脚を立てた。

陣ヶ坂の降りがこんなに惡いとは豫想だもしなかつた。

初め下り口では事態が極めて良好だつた。道幅も有るし、障害物も無く、足は降りを喜んで輕くすたすたと下りて行つた。ところが物の半町も行かない內に、そろそろコメツガやウラジロモミの倒木が現れて、下へ行くにつれて數も次第に增して來た。それは急な坂道を通せん棒して、潜るには枝が邪魔になり、跨ぐにしては太い上に高過ぎた。詮方なしに道の片側の小高い笹藪へもぐり込んで、其處で乘越えて又道へ戻るのだつた。しかしこんな事を幾十度と繰返

してゐるうちに、とうとう太い倒木が縱に何本か重なり合つて澤をふさいでゐる處へ出た。枝の無い丸太棒ならば其の上を歩いて行くといふ手段もある。人間の腕よりも太い枝を八方に伸ばした何丈といふツガやモミが、元末ごつちやに幾本も幾本も重なつてゐるのだから、猿でもなければ渡れはしない。あたりは暗くなる。空は搔曇つて時々パラパラと落として來る。せめて野々入まではどうあつても行かねばならないと、とうとう思ひ切つて靴を脱ぎ、幹を渡り、大枝を跨ぎ越しながら、應接に遑も無い程先へ先へと現れる倒木群を猿のやうに飛び移つて、七八町の間を一時間あまり費し、漸く此の難關を脱したのであつた。

私はへとへとに疲れた全身を道そのものの傾斜に任せて、落ちるやうに下りて行つた。やがてかなり廣い荒寥とした枯草の原へ出た。骨ばかりになつた大きな小屋が一二軒立腐れてゐた。又西の方で雲切れがして、夕暮近い金色がゝつた上空の雲が此の一帶の荒野原に不思議な光を落としてゐる。往手は物見石からの高い尾根でふさがつてゐるやうに見える。地圖によれば其の直下には野々入川が流れてゐるわけだから、其處まで行けば普通登山者の通るあの木材運搬の棧道に出逢ふだらう。さう思つて元氣を出して歩き出した。

其の草原が終つて、道が落葉松林の中へ消え込まうとする頃、私は往手に大きな炭俵を二俵背負つた一人の男の後姿を發見した。私は大聲で其男を呼び止めた。彼は返事の代りに手を上げて合圖をして・急ぎ足で行く私を待つてゐた。私は早速「ルックザックを添荷にしてくれないか」と交渉した。「二貫目位ならば」と云つて重味をひいて見て。「四貫はありますね」と一寸眞面目な難色を見せたが、やがて頷いて引受けた。私はほつとした。

「その俵はどの位あるの」と訊いたらば、

「一俵九貫です」と答へた。

「君の家は何處」と重ねて訊くと、和田の上の鍛冶足（かぢあし）だと云ふ事だつた。それでは上和田との分岐點の野々入までと約束して、二人並んで歩き出した。

もう六時に近く、山の日は暮れて空だけが青く明るい。私達は野々入川に沿つて歩いてゐた。白樺の林がみづみづと白く、若葉の色が夕暮はわけても冴える。ジフイチが二三羽絶入るやうに鳴いてゐる。山の斜面のところどころに山櫻がほのかに白く淋しくはあるが、何か胸迫るやうな悲しみを帶びた、美しい平和な春の夕べの山道である。

厭だと斷れば斷れるものを、私のために唯さへ重い荷の上へ此の荷をつけた男に對して、私

は感謝を交へた愛を感じる。あの寂寞たる草原で私のルックザックを引受けた時。それが決して儲けづくでは無かつた事を私は固く信じて疑はぬ者だ。彼の眼が、そして今は又私にも聽える彼の呼吸のせわしさが充分それを物語つてゐる。街道まで背負つて行きませうと云ふので、私達は野々入から鍛冶足への山道を越えたのである。

もう夜になつた鍛冶足、下の方に電燈を、ちら、ちら、ちらさせた鍛冶足。その火ノ見櫓の下に彼の家はあるのだと云つた。

其の坂道で、私は彼の手に無理に賃銀外の感謝の印を握らせると、受取つたルックザックを引擔いで街道をすたすたと、今宵上和田の宿、「翠川」を指して歩いて行つた。

秋山川上流の冬の旅

殘雪をカリカリ踏んで庭へ出て、午後九時の觀測に箱の中の寒暖計をのぞいてみると、こゝ狹窪は零下五度、寒さはひどく身に沁むがそよ吹く風もない清明な夜。空氣が極度に澄んでゐるせゐか、上弦の月は庭の西隅の松の梢にこほりつき、天心から南へかけて牡牛。大犬。馭者。オリオンと、冬の誇の大星座が、九天の祭の篝火のやうに遠く燃えてゐる夜だつた。

ラヂオの氣象通報も關東・瀬戸内。九州地方の晴天を知らせた。高氣壓は滿洲に、低氣壓は北海道網走沖と黃河の下流に。それならば、たとひ此の後の者が徐々に東へ進むとしても、こ

ゝ二三日の天氣はまだ大丈夫と心にきめて、僕は明日の早朝の出發を妻に告げた。

もつとも此の一寸した旅の事はすでに前から考へてゐた。中央線鳥澤の驛の南に桂川をへだてゝ聳える倉嶽山、その倉嶽山と朝日山（赤鞍ケ岳）との間に呱々の聲をあげて、道志山塊東部の斷層谷を東へながれる秋山川、そしてその流域に無生野（むしやうの）。遠所（ゑんじよ）。古福志（こふくし）。田野入（たのいり）などゝ、遠い山々の襞の中でひつそり暮してゐるやうな、古く雅びた名をもつて點在する彼等山村への知見の旅。この小さい旅を試みることは、かつて木暮理太郎さんの石老山からの見事な寫眞によつて喚び起された好奇心を滿足させるばかりでなく、此の眼で見る事によつて地圖の片隅に美しい思ひ出の實體を築き上げ、且は徒らに數を重ねながら又もやめぐつて來た自分の誕生日を、もつとも好もしい仕方でみづから祝ふ事でもあつた。

それで今度こそは其處へと極めてしまふと、僕は天氣と暇との旨く一緒になる折をねらつてゐた。天氣のはうは月の二十六日から晴つゞきだつた。暇は？　暇は無いといへば無いやうなものゝ、都合すれば出來ない事もない位には僕も「自由な時間」といふ富だけは持つてゐた。「人がヘンリーのやうな富み方をしてゐると、機會さへあれば何か小さな旅に金を使ひたいと思ふものだ」と、トロオの傳記作者バザルジェットは書いてゐる。さうだ！「コンコルドは常

に驚異の最大の珠玉だ。しかし其の廣がる先には世界がある。人は其の世界でどんなふうに太陽が輝いてゐるかを見たいと願ふだらう……西の方の地平線には山々がある。夕方になると、其の山々の高みのうしろにあんな火事の反映が見える。落日の國といふものは一つの強力なマグネットだ」!

おなじマグネットが僕を引く。水中の鮒のやうな良い目玉と、何事にも應じ得る柔軟な心、それに幾らかたつしやな此の兩脚。これだけが時間のほかには僕の富だつた。

明ければ二月一日午前八時三十分、鳥澤驛の南東數町、桂川左岸の段丘上で、雪の桑畠をわたつて來る漫々ときよらかな朝の風。太陽は大地峠のあたりと覺しい空にのぼつて、やがて立ちかへる生々の春への確信から、今は冬も露はな郡内の風景の、南面の雪をおもむろに暖めてゐる。心は、眼は、性急にも今年最初の菫を地にさがす。しかし其のゆかりの色はまだ大空の奥にある。

翡翠の羽根よりも碧い桂川は鳥澤の東でひとうねり大きく曲流(メアンダー)するが、それから又上手へ捲きもどして、今度は此の段丘と、其處に小篠や下畑の小部落が寒い朝のけむりを上げてゐる

對岸の段丘との間に。深い峽谷をうがつて流れてゐる。しかし其の峽谷の存在は、兩岸の段丘面がほとんど同一平面上にあるので、其處まで行つて見ないうちは遠くからでは分らない。そして其の對岸の段丘の盡きたところからは所謂秋山山脈北側の斜面が起つて、深く皺ばんだ山なみはうねうねと東西につらなり、思のほか圓味を持つた倉嶽山を正面にはびこらせ　一旦右へ穴路峠の鞍部をたるませて、ふたゝび楢山から西へつゞく冬枯の峯々をきさらぎの天風にさらしてゐる。

靴の下でキチキチ軋む雪をふんで坂を下りると、まるで突然の遭遇のやうに峽谷へかゝつた高い釣橋が現れた。ぞろぞろと人の出盛る奥多摩あたりの遊山地ならば知らぬこと、杖曳く人の姿もほとんど皆無なこんな場所で、それよりも遙かに純潔な風景の一部を形づくりながら、たゞ靜かに虹吹橋（にじふきはし）と名乘つてゐる橋の名と其の調和のとれた單純な樣式とは、旅の朝の、しかもたつた今人家を後にして來たばかりの僕の心を、咲く花の物言はぬ喜びのやうなものでふくらませた。

僕は橋のまんなかへ突立つて見下ろした。釣橋は僕の足のリヅムを傳へてしばらくは彈んでゐた。左右の崖は高さ六七丈もあらうか、眼下に眞青な桂川は所謂穿入曲流（インサイズド・メアンダー）の相を呈して、現

に流水の攻撃のはたらいてゐる側では瀞(とろ)をつくつて音もなく湛へ、反對の谷壁の脚下には狹い積雪の河原をのこして、蒼鷺いろの水際で、その純白な緣縫がさながらのレイス細工をなしてゐる。

川は二町ばかり上手で北へ折れ込んでゐるが、突當りの右岸には第二次の河岸段丘がこれも雪の畠か水田の雛壇をのせ、更に其上に第一次の段丘が棚のやうにひろがつてゐる。桂川は其の境界を流れ、中央線の鐵路は其の奥を走つてゐるらしい。しか　此の橋上からの眺めに一層の生彩をあたへるものは黑岳以南の大菩薩連嶺である。鉋でけづつたやうな無間平(むげんだひら)の嶺線に雪の笹緣とつた大藏高丸、天下石のある峯を肩のやうに怒らせた破魔射場つゞき、すぐに落ちて米背負(こめしょひ)の鞍部、それから瀧子山へつらなる大谷ケ丸の東の支脈、いづれも銀の筋彫くつきりと。朝日をうけた山膚は、燒太刀の匂のやうにこまやかである。大藏高丸を白屋ノ丸へと繋ぐ湯ノ澤峠のたるみは吹切の峯にかくれて見えないが、其處から北へはべつとりと雪を塗りこめた黑岳と雁ケ腹摺との二峯が、磨きあげた銅鐵の兜のやうな頭をならべて、此の一幅の美々しい繪畫に莊嚴の趣をあたへてゐる。

橋をわたつて右へ「く」の字なりの坂を登ると小篠(をしの)の部落だつた。ゆるい傾斜をもつて一種

のテラスを作つてゐる段丘の上で、北に面した小篠はかさ〳〵に乾いて寒い村だつた。古い農家は東西に列をなして、それが段々にならび、其間をほそい道がたてよこに通じてゐた。部落の中心らしいところを山の貯水池から引いた水が流れてゐる。その水を桶に汲んで、つる〳〵に凍つた道を運んでゆく女房の姿もわびしかつた。

村を南へ突切つて左手に澤を見おろす高みへ出れば、それから先は峠まで一本道だ。その高みへ立つて振返ると、ひろ〴〵した桂川の對岸には一ぱいの日が當り、胡麻粒をならべたやうな鳥澤の町の上に、雪が消えてほんのり赤い扇山が途方もなく大きい。鳥澤附近は郡內北都留郡の中でも寒い土地のやうに云はれてゐるが、うしろに大きな扇山を背負つた山麓の田園は、離れて見れば、いかにも長閑に春らしく、あの中腹の空あたり、もう雲雀でも揚つてはゐないかと思はれるやうな景色である。扇山の右には鶴川の谷が喰込んで、その上に三國・生藤・連行の峯々が暖かい栗いろにところ〴〵雪など光らせ、ずつと右には和田峠の切れ込みを見せて、陣場山がひとり優美な全容を見せてゐる。そのむかうには武州の空が薄みどりだ。

新らしく貯水池を造るとみえて、堰堤の盛土工事をやつてゐる處で澤を右岸へわたる。此處からは此澤について じり〳〵と三十町ばかり。穴路峠への登りがつゞくのだ。左手の山が大き

な影をよこたへてゐる寒々とした谷沿の細道を進むと、峠の方から男が二人、炭俵を背負ひ、長い竹の杖を突いて轉がるやうに下りて來る。此の二人の姿を見ると日蔭の寒さが一層冷えびえと感じられた。朝の挨拶を交したついでに何處の者だと訊くと、無生野の者だと云ふ。峠の雪の様子をたづねると、自分達や馬がかよつてゐるからもう相當には踏めてゐると云ふ。別れて少しばかり行つて振返ると、彼等はすでに堰堤の下のはうをとつとゝ小刻みに驅けてゐた。

かういふ炭運びの連中には峠までの間に三組ばかり遭つた。お爺さんが一俵、お婆さんが二俵といふ愛想のいゝ老人夫婦の組もあつた。若夫婦が仲よく二俵づゝ背負つて、賑やかに日當りの坂道を下りて來るのにも出會つた。最後には峠の五六町下で一人の女に遭つたが、後からやつぱり炭を背負つた子供が來るから、出會つたら早く來るやうに云つて下さいと賴まれた。

「口は利けない子供だけれど、先へ行つたおつかあがさう云つたと云つて吳れゝば分りやす」といふ事だつた。どんな氣の毒な啞の子が、どんな炭俵をかついで此の雪の山坂をとぼ〳〵やつて來るのだらうと、僕は未だ見ぬさきから其の子の可憐な姿を想像した。それから餘程登つて、やがてV字型に仕切られた風景の中に桂川が青いリボンをうねらせ、扇山の左の肩から麻生山があの虎挾みのやうな三つの岩峯を現はす頃、僕は炭俵を三俵づゝしり背負つた二十二三

の若者と行き違つた。擦違ひに顏を見ると、その顏色は惡く、眼の表情は空虚だつた。或る感じが僕の裏を走つた。そこで、いつもの早口に氣をつけて、小さい者に本を讀んで聽かせる時のやうに出來るだけゆつくりと、大きな聲で其の若者に云つた。

「先へ行つたおつかさんが、早く來いと云つてゐましたよ」

さう云ひながら、違つたかなと思つて樣子を見てゐると、男は無言で鷹揚にうなづいたが、やがてザック／＼と雪を踏んで下りて行つた。見下ろせば遙か下のはうの眩ゆい積雪の日當りを、前かゞみになつて、我精な其の「おつかあ」が小さく／＼行くではないか。親子の間の運命的な隔たりをぼんやり考へてゐる僕の眼の前で、黑々と枯れた山櫨の枝が、吹き上げて來る谷風にはげしく震へた。

小篠の貯水池を後にしてからの此の峠道の靜かなよさは、僕をして單獨行の樂しさを今更のやうに味はせるのだつた。なるほど二人三人と道連れがあれば、人は或る美の對象を、又幾つかの別樣の見地から讚嘆することが出來るに違ひない。これが合作の持つ德だ。しかし世界といふ此の廣大な森林の中に、君獨特の歌に合せて歌ふ鳥がそも／＼幾羽ゐるだらうか。君の咽喉を思ひきり膨ませて、かゞやく空間を君の歌で滿たしたい時には、だから君も、他人の歌の

まじりに來ない隔絶した獨りの梢を選ぶだらう、

最後のジグザグを登りつめて、馬蹄型にかこまれた谷の頭を半分廻ると峠へ出た。あゝ穴路峠！ 長いあひだ地圖の上ばかりで空想してゐた其峠に、今僕は立つてゐるのだ。それがどんなに低い、顧みられない峠にせよ、とにかく自分の力でたどりついて、其處の風化土の上に風に捲かれて立つといふ事は、又新らしく僕に加はつた何物かである。その場所と、其處からの眺めとは、今日以後確實に僕の物なのだ。寶なのだ。その寶を點檢しよう。

此峠は別に小篠峠と呼ばれてゐて、倉嶽山から楢山への瘦せた尾根筋を淺くえぐつた、幅一間半、長さ約三間ほどの平である。標高わづかに八五〇米内外。地質の事はよく知らないが、左右に露れてゐる岩の樣子では、化石を含んだ石灰岩の分布地域ではないかと思はれた。東と西とは直ぐに尾根だが。南北に開けた眺望もあまり大きい方ではなく、今登つて來た北側は左右から近景の枝尾根が折れ込んでゐるので、僅かに扇形にひらけた空間に、遠く葛野川（かつのがは）下流のあかるい田園と、その上に悠然と踏み跨がる雁ケ腹摺を中心に、左は黑岳。右は丸岳から大峰への、がつちりしたブロックを見るだけである。南側はもつと開けて、しかし景色がぐつと迫つて、冬の午前の逆光で見る稜角だらけの道志山脈は寧ろ凄慘と云つてもいゝ。朝日山はタン

ノイリを前衛にして風景の右手をかぎつてゐる。尾根は其處から高々と左へ伸びて、途中にワラビタ、キを初めとした一〇〇〇米を拔く突起を三つもたげてゐる。其の嶺線は日光を反射して白い炎をはなつ山頂の雪で引かれてゐるが、藤紫にけぶる尾根どほりの雜木の藪は、朝日山から一里半の縱走には相當手ごはい物のある事を思はせる。タンノイリの峯からは別に左手前へ支脈が伸びて、九七一米の山頂を持つ尨大なひとかたまりをどつかと据えてゐる。其の脚下を未だ幼い秋山川が廻るやうにして流れてゐるわけだが、無論此處からは見えず、僅かに無生野の部落の一角が山と山との暗い裾合に、あんなに小さく且つ貧しく、たつた一つの人生的點景として眺められる。要するに此の南側の風景の特色は、劃然と黑と白とに染め分けられた大小無數の三稜形が、山脈構成上の或る嚴しい法則の支配をまざ〳〵と見せながら、何れも一方の鋭い稜角をこちらへ向けて壓倒的に集中してゐる其の凄まじい氣魄にあると思はれた。

こんなふうに、たとへば峠から北を眺めた小さくはあるが花のやうなボナアルの繪と、南に臨んだ暗澹として深淵のやうなルオーの繪とが、しかし一度倉嶽山の頂上へ立つと、全く天空海濶な大地の起伏のパノラマと一變した。

僕は峠から直ぐに倉嶽山の南西の尾根へとりついた。冬の快晴の山では風も例によつて中々

つよい。踝を沒して時には脛まですつぽりもぐる積雪は、低い灌木叢や棘のある蔓などを隱してゐて歩きづらいが、それも僅か一〇〇米ほどの登りと思へば大して苦にもならない。寧ろきら〳〵と日照りかゞやく新鮮な尾根の雪に、自分一人の靜かな旅の足痕を、一縷の糸のやうにつけて行くのが樂しかつた。そればかりか、倒れた赤松を乘り越えたり、黑い枝先をばら〳〵と雪から出した山躑躅の株を飛石づたひのやうに渡つたりする間、一歩は高く一歩は低くなりゆく視野の中に、あゝ權現山が、三頭山が、秩父の大洞山が、さては武州の大岳まで、一つを見てゐるうちに又一つと、後から後から湧き上つて來るではないか。さうして遂に半面は雪もまばらた明るい茅戸、半面は赤松と雜木の倉嶽山頂へ僕は着いた。

碧落悠々、春光煦々、まづ仰向けに身をたふして、僕は山と空間とをからだ全體で味はうとした。その海のやうな青い空間を傳はつて、どこか遠くの町のサイレンの音がする。腕を上げて時計を見るとちやうど正午。さては北風が上野原か猿橋の人生を運んで來たのだ。僕は眼をつぶる。松籟をかなでる風はおとがひを吹いて冷やひやするが、額や眼瞼にあたる日光は春のやうだ。

茅戸の斜面が南へ向いた山のいたゞき、片肱立てゝ眼をあげると、つい鼻の先の椨山をかす

めて、御座石・御正體と泡立ち寄せかへす山波の眞上に、夢のやうな大きな富士。六合目附近から雲煙を噴きあげ、ところ〴〵眩ゆく燃ええる太陽の反射を投げ、ほのかに青空の蔭をまとつた玲瓏たる大結晶の富士山は、その裾野の線の流れる果てを見れば見るほど、限りなく偉大なものに思はれた。

立ち上つて其處らを歩きながら山を見る。此の倉嶽山の頂上は先にも云つた通り、半分刈り殘した頭のやうに北側が山林になつてゐるので、カメラを用ひるには憾みが多い。しかし君にしても若しも見るだけでも滿足が出來るならば、藪を押分けたり腦(ひよみ)を痛くして爪立つたり、時には幹を攀ぢたりして辛くも自分の物にした幾つかの斷片的な印象から、案内書には絶望のやうに書いてある山々の展望を、立派につなぎ合せて一枚の繪とする事も出來るだらう。それは事實僅かばかりの勞ではあるが、たとひ勞として相當なものであつたにせよ、後になれば又それだけ滋味の多い貴重な思ひ出となるのである。それに、人の言葉をそのまゝ信じて晏如たる事が出來るならば、何を苦んで山へ登る必要があるだらうか。案内書の作者は時には見ないでも案内記を書く。君は君の書かれざる自敍傳のために見るがいゝ。

百藏山、扇山・權現山が形作るリラ色の、暖かさうな大斜面は、桂川の流に對する樋の片側

のやうになつてゐる。その權現と扇とが山頂をならべた僅かの隙間から、三頭山の黒ずんだ峯頭が見える。扇山の左に出てゐるひときは鮮かな青黛の色が大洞から笠取への山稜だとすれば、あの圓頂（ドウム）は雲取山以外のものではない。大菩薩嶺は雁ケ腹摺から東へのびた大峯とすれすれに望まれるが、その大峯をかすめて薄青い空の奥に白金の光をはなつてゐるのは、今日の暖氣に丹波川の谷から湧いた積雲の頭だらうか、それとも破風・甲武信の片鱗だらうか。

南側は富士をはじめ一面の逆光につかつて雪面の反射が殊に烈しく、あらゆる峯々がまるで水びたしの風景。その中でやはり胸を打つのは加入道・大群山のぎら／＼光る鐵壁の奥に、檜洞丸・蛭ケ嶽などの峯頭を峙てゝわだかまる丹澤の斷層ブロックである。そして其の強弩の末の燒山のひだり、龜の甲のやうな石老山を最後として、早春の顏に引かれた眉かと見える多摩丘陵にふちどられながら、遠くとほく相模野と其の水とが。陽炎のもや／＼の底にねむつてゐた。

さあ、これで倉嶽山は僕のものになつた。今日以後、どこの山頂から、又どんな山路のはづれから、ゆくりなくお前の横顏を見ることがあつても、決して見損なつたり、他人のやうな氣がしたりする事は無いだらう。僕は心でお前を呼ぶよ。お前を見るよ。人からは窺ひ知られな

い特別な氣持と眼つきとで。

さうしてもう一度ぐるりと周圍を見まはすと、雪の中へふか／＼と踏み込んだ自分の足痕に從がつて、一旦峠へ戻りつき　今度は無生野さして南側へ下りて行つた。

あゝその南側が又なんとよかつたらう。雪解けのぬかるみが初まつたのはずつと後の事、むしろ翌日の田野人（たのいり）あたりでの事だつた。程よく濕めつた澤沿ひの固い小徑を、晝過ぎの穩やかな日ざしを浴びながら、格別急ぐといふのでも無いのに、ひとりでにどん／＼下りて行く面白さ。松の枯葉の散りこぼれた石の下から、つめたく泌み出して靴を濡らす青い水。それが秋山川の抑もの姿だつた。斑々と雪をのこして一杯に日をうけた薄い雜木山の斜面には、峠の北側ではとんと見られなかつた小鳥がおびたゞしく散つてゐた。中でも頬白がいちばん多く、白い縞のちら／＼する赤栗いろの尾羽を振つて飛び廻つたり、低い灌木の枝にとまつてもう何かぐぜつたりしてゐた。時々赤腹がツーッと鳴いた。その澄んだ一聲は、此の二月の山中の靜けさが一體どのくらゐ深いかを測つてゐるやうで、僕も思はず足をとめて耳を澄ますのだつた。體はぽかぽかして頬は氣持よく汗ばんだ。煙草を吸はうと手袋を脫いだが、そのまゝポケットへしまひこんだ。片側が暗い檜の植林、片側がなぞへに高くなつた明るい櫟の林といふ、日のこ

ぼれの美しい木下路へかゝつた時、僕は自分の二三間前にジュルリ・ジュルリといふ一種韻のある小鳥の聲を聽いた、歩みをとめてじつと其方をうかゞふと、櫟の木に餌をあさつてゐる三四羽の柄長だつた。から類獨特のあの氣ぜはしない動作で逆さに枝へぶら下つたり、幹を螺旋形に攀ぢのぼつてコツ〳〵嘴で叩いたりしてゐる彼等の姿は、圓い大きな火皿を持つた素燒のパイプか、長い編針を挿した白と薄墨いろの毛糸の玉のやうだつた。その薄墨いろが太陽の光線にあたると葡萄いろに光る。そして時々、すこし濁つたやうな重味のあるジュルリ・ジュルリ。近所に人間のゐる事は知つてゐるだらうに怖れる樣子はすこしもなく、まるで鶲にでもつくやうに枝から枝へと渡り移つて遊んでゐる。あゝ此の境地。小徑のむかうには豊かな光と陰とを交叉した道志山脈の一部と、其の上に見える二月の靑空。それを一層奥行の深い景色にするやうに中景に疊みこまれた暗緑色の杉や檜の幾層の書割、そしてすべての枝々に日光の金泥をなすつた櫟林の花やかな靜寂の中で、白と葡萄いろとの活潑な柄長の一隊！　それは此の鳥を見る條件の最善を具備した境地であつた。

　かうして途中人つ子一人見なかつた山道で、僕は冬の自然が提供する最も美しい物の幾つかを見ることに悦ばされながら、秋山川最奥の部落無生野へ下り立つた。

無生野、それを一目見た瞬間、僕は卒然として武州恩方村案下のことを思ひ出した。部落の三方が山に圍まれてゐる點も同じなら、道路に沿つて峠から水が流れてゐる樣子も同じであり、しかも其の水際に、中途から幹を切られて針のやうな枝を無數に出した欅の老木が立ち並んでゐるところまで同じだつた。たゞ、その案下が八王子奧の木材の產地であり、村の入口までは道路も立派に改修されてトラックや乘合自動車が通じ、何と云つても都會の風が吹き渡つてゐるのに引替へて、此處は甲州郡內でも山と山との襞の奧、上野原へ五里、谷村へ四里、どつちへ出るにしても飽き／＼するやうな道中と峠越えだ。いちばん近い鳥澤へは一里半と云ふが、これとて穴路峠の山坂を一千尺あまりも上下しなければならない。それだけ土地は見るからに醇朴だつた。

時刻は午後の二時。暮れるに早い山里とはいへ、太陽はさすがに未だうづ高い道路の雪を照らしてゐる。雛鶴峠まで脚をのばして、出來たら其處の尾根筋から谷村盆地を覗いて來ようか。そして今夜は此村のどこかの農家へ泊めて貰はうか。それとも此のまゝぶら／＼歩いて、旅人宿のあるといふ栗谷まで、路々ゆつくり撮影でもしながら風と夕日とに送られようか。どうやら後の方がよささうだ。名も床しい雛鶴峠へ立つたならば、また今度は朝日の谷に誘惑さ

れて、雪を染める眞赤な落日の後を追ひ〳〵、谷村の泊りとなつてしまふかも分らない。それでは折角の秋山川訪問の素志が空しくなる。そこで太陽にそむいて東へ、水の流にしたがつた。雛鶴峠はあの殺風景な高壓線の鐵柱に任せて置いて。

村のまんなかで流に架かつた橋を渡る。川と路とが斜めに交叉して、曲つて來る水の瀬と、それを跨ぐ低い木橋と、うらぼしの生へた岸の石垣と、小高いところに幾棟か並んで破風に日をうけた農家との。狹くはあるが複雜な構圖が面白かつた。しかし三脚を立てたりカメラを出したりしてゐると、其處らぢうの家から女や子供が飛び出して來て餘り多勢畫中の人物となつてしまふので、撮影は斷念した。

無生野を後にしてまんなかだけビチャ〳〵に溶けた雪道を行く。往手には谷の狹間にきまつて相模の空が扇形に望まれるが、左右は山で、流域の幅がいつまでたつても同じなのが何かしら地溝のやうな物を思はせる。道は未だ淺い秋山川を右に見たり左に見たりしながら悠長に走つてゐる。勿論部落も此の道に沿つてゐる。しかし彼等の猫額大の畠は概して右岸の道志山脈側に作られてゐる。これは此の帶狀の地域をはさむ道志・秋山の兩山脈の脊稜部が同じ一方にかたよつて、何れも北側に緩やかに、南側に急な斜面を持つてゐるせいだらうと思はれた。

此事は一括して所謂道志山塊と其の聚落景觀との關係に、ほゞ共通した性質のやうに考へられる。

部落や谷のことはこれ位として、さて無生野から五六町下がると濱澤だつた。次に通つた原や尾崎の部落なども同じやうに人家も僅か數へる程の小部落だつたが、此處でもう一度鳥を見た。そして今度はそれがもつと素晴らしかつた。野禽觀察の一年生に、どうかもう一遍だけ鳥の事を話させて吳れたまへ。

僕は地圖を見ながら濱澤の領分へ入つたばかりだつた。左は山、右は川へむかつて低くなつた幾らかの畑地で、雪の上には桑の影が漸くほの〴〵と長かつた。圖に出てゐる郵便局といふのが少し高みにある獨立した農家なのにほゝえまされ、こんな所に靜かに住んで、山村の人達のために郵便事務をやるのもいゝななどゝ考へこみながら、やがて左から小さい澤の落ちて來るところで、其處へ架かつた小橋を渡つた。渡つた橋の右の袂に、柿の木か何かに纏ひついた一株の古い蔓正木（つるまさき）があつたが、今まで雪や針葉樹ばかり見馴れた眼に、その葉の冬をしのぐ鮮やかな綠と、その實のすばらしい茜色とが際立つて見えた。すると其の蔓正木の中で何か「ヒイ・ヒイ」とかすかに鳴く鳥の聲がするではないか。僕は息を殺して眼をみはつた。瑠璃鶲（るりびたき）だ

！　しかもよく見れば三羽が、つい鼻の先に！

頭から脊へかけて、春の霖雨をばらまく雲間の空の暗い靑、下面一帶はほんのりと黄ばんだ白い羽毛に柔かくけぶり、それが兩脇へ移るにつれて香ばしく焦げて、終に夕燒雲の柑子いろとなつてゐる。短かい白い眉をゑがいた顏は靑いといふよりは黑に近いが、上尾筒や雨覆のつや／＼した空靑色と兩脇に燃える柑子いろとは、彼を小鳥の中の寶石のやうにしてゐる。

僕は身動きもせずに立ちすくんで、その動作をじつと見てゐた。蔓正木の實を食つてゐるのかと思へば、さうでもないらしい。しかし其の實の茜いろと、其の葉の淡い綠とが、彼等の羽色と紛れるやうな効果を呈するので、どうやら保護色とでも云つて見たい氣もするが、それよりも何よりも、やつぱり透過光線的に淸麗な冬の色彩の貴い破片と云つた方が正しさうだ。ひどく遠くからのやうな「ヒイ・ヒイ」を洩らしながらお辭儀をするやうな格好を見せるところや、餘り人を恐れないところは近緣の上鶲（じやうびたき）を思はせる。しかし少數ながら群になつて、きびきびと熱心に、枝から枝へ食物を漁つて渡り移つて行くところは、寧ろ今の季節のから類に似てゐる。あまり人間に平氣なので、此處で一つ珍らしい瑠璃鶲の生態寫眞をとつてやらうと、靜かにルックザックを下ろしてカメラを出してゐると、身の危險と感じたか一羽がサッと飛び

立つた。續いて一羽、また一羽。大して遠くは行かないが後をつけてゐる内にだん／＼距離が離れてしまつた。撮影はとう／＼駄目だつたが、それにしても同じやうに雪のある二月と三月に、武州梅園村黑山の三瀧附近と、五日市の西の星竹で見かけて以來、瑠璃鶲を見たのは久しぶりだが、こんなに近くから觀察した事は今まで無かつた。僕はすつかり悦ばされて、カメラを出した序でに此の濱澤の風景を一枚寫した。

濱澤から原、尾崎、寺下と、いくらか開けた風景の中をぶら／＼行く。尾崎といふ名は地圖の上では見られないが、どの部落にも必ず備へてある公德箱といふ芥箱に、原班や寺下班と同樣「尾崎班」と書いてあつたところから分つたのである。此頃出た柳田國男さんの「地名研究」といふ本を讀んでみたいと思つたのが、川に沿つて道が北へ低くなり、鹽瀬への山越えの便道が橋の向うを登つてゐるあたり、水と竹藪と漸く氷つて來た日陰の部落、高みに一軒の寺を持つ寺下であつたのは、或は自然であるかも知れない。

その寺下も後になると、今までどこと無く小河內奧の小菅附近を思はせてゐた周圍の感じが少し變つて、坂崎から栗谷へかけては、地形にも相當に變化が出て來た。これは朝日山から北東へ向けて穿たれた侵蝕谷が、秋山川との合流點附近に小規模ながら一つの山麓面を形成して

ゐる爲めのやうに考へられた。それに太陽も山の端に沈めば、谷あひの風景の表情も寒くなつた。坂崎では、高く渡つた橋の袂に、右へ遠所への雪の山道が登つてゐた。後に栗谷を過ぎてもう一つ橋を渡つてから振返ると、なるほど遠所といふ部落は本道からは掛離れて、西の方の一際高い山の平に、何か由緒ありげな一群として仰がれた。飛驒の白川大鄕は未だ見ないが、僕は其處への憧れに類するものを、今、雪に隱れ棲んでゐるあの遠所へ通はせた。

栗谷に旅人宿のある事は、今朝の明るい峠道で炭俵を背負つたあの爺さん婆さんにも聽いた。又ついさつきは寺下のはづれで、篠竹を山のやうに背負つて山から歸つて來る若者にも、其の在る場所を細々と敎へられた。ところが、栗谷をもう少しは人家のある部落ぐらゐに一人極めしてゐた僕は、坂道を登つて左に古い廐のやうな小學校を見、それにつゞく小さな雜貨屋などを物色しながら其れでもないと思つて歩いてゐるうちに、もう人家の無くなつてゐるのに氣がついた。變だなとは思つたが橋を渡つて坂の上の平へ出た。すると向うから二人づれの男が來る。挨拶を交しながら早速宿屋の事を訊いてみると、それは今渡つて來た橋の向う手前にある一軒の農家のやうな家だつた。なるほどさう言はれゝば不注意だつた。そこで後戻りをして一緒に歩きながら、序でに「遠所」といふ字の讀方を訊いてみた。訊かれた男は「わしは文



高妙の秋

盲で」と頬を赤くした。由ない事をしたと氣の毒に思つてゐると、もう一人のが「それはエンジョと讀むんですよ」と引取つてくれた。僕は今までこれをトホドコロと讀んでゐたのである。「やつぱり土地の名は訊くものですね」と述懷したら、「此邊の小名は一風變つてゐますから」と云つた。

「大松」といふ目印の出てゐる橋場旅館では、しかし「今ねゝうみだから」と云つて簡單に宿泊を斷られた。秋山では此家をみんな「橋場」と呼んでゐるのである。ところで「ねゝうみ」の意味が咄嗟には解らなかつたので髪ばうばうの大女と押問答してゐるうちに、どうやらそれが「お産」を意味してゐるといふ事が分つて來た。多分出産で取込んでゐるからと云ふのだらう。それで「どこか近所に泊める家は無いか」とたづねると、此の先の中野に農家と兼業の宿屋があるから其處へ行つて泊めて貰ひなさいと云ふ。こゝの家ならば位置もいゝし、宿屋らしい設備もあるし、それに明朝出がけに遠所を見て來るにしても便利なので惜しい氣がしたが、斷られてみれば仕方が無いから障子をしめて外へ出た。折柄、川へ水汲みに行つた女中らしいのが摺違ひにすごすご歸る僕を見ると、二つの桶を地へ下ろして、霜燒にふくれた手で冠り手拭を外して、氣の毒らしくお辭儀をした。あゝ、今の、いくらか簡潔に過ぎた斷られ樣で少し

は平らかでなかつた僕の氣持が、その小娘の顏で和げられたのは考へても嬉しい事だ。雪のたそがれの栗谷の子よ！　又いつか此の土地を通る時、僕はきつとお前の事を思ひ出すだらう！むかうの谷間に中野の人家を見るあたり、暮れなずむ空の色と雪の匂とがまじるところ、サラサラと風のさゝやく丘の上で、もうすつかり旅人の心になりきつた僕は、强ひて賴めば何處かしらで泊めて呉れるだらうと、何か歌でも歌ひたい氣になつて、マッチの火をかばひながら煙草をつけた。

　秋山村中野、以前は日向海戸（ひなたかいど）と云つてゐたが、土地の有力者の發案で平凡にも今のやうに改稱されたといふ其の中野の部落に、戸數はおよそ十ばかり、昔の名がよく言ひ現してゐるやうに南へ向いた日溜りで、栗谷の方から曲り込んで來た秋山川の谷を前に、朝日山から巖道峠（がんだう）へつゞく道志の連嶺を一目に見わたす景勝の地を占めてゐる。敎へられたとほりに僕の訪れた宿屋といふのも此の部落の中程にあつて、煙草の赤い看板は出してゐるものの、純然たる山村の一農家であつた。主人は井上福太郎と云つた。

　潛戸をあけて入ると中は薄暗い臺所の土間。老人夫婦と嫁さんらしいのが板の間の圍爐裏をかこんでゐ、座敷の方にも三四人の若い人達が炬燵へ入つてゐた。皆が一齊に僕を見た。何だ

か宿屋へ來たといふ感じはなく、一家が冬籠りの團欒をしてゐる其の眞中へひよつこり飛込んだといふ格好であつた。

　こんな時に世馴れた老人といふものが何といいか。彼等は決して旅の者を氣まづく思はせたり、他國者（よそもの）扱ひしたりはしない。そして斯ういふ人々は屡々どんな山家にでも居るものだ。

「まあ大變だつたでせうね。雪道で」と。先づお婆さんが立上る。「今すゝぎを持つて來ますからよ」

「いや、靴下は濡れてゐないから此儘でよござんす」

と、僕はもう土間へ下りかけたお嫁さんをとめる。お嫁さんは仕方なしに脫ぎ散らした下駄や草履などを片よせる。若い人達も默つて見てゐるわけにはいかないと見えて、何といふ事なしにのそのそ立つたり歩いたり、座布團を持つて來たりする。

「さあ、圍爐裏へおあたんなさい」とお爺さんが云ふ、そして「もつと足を出したら」と獨り言のやうに云ひながら、傍へ積上げた薪木を折つては圍爐裏へくべる。それから煮えたぎつてゐる鐵瓶を下ろして、自分で茶をついですゝめる。

　僕は胡床（あぐら）をかいたお爺さんと對ひ合ひ、云はれたとほり圍爐裏の兩側へ足を出して熱い茶を

すゝる。さうして、餘りじろじろ見てゐるやうには見えないやうに、何氣ない態で此家の様子を見る。

一目でみんな分つてしまふやうな家である。祕密も奥も無い、明けつぱなし四間の家の內部である。圍爐裏を中心に其の燻りが家中へひろがつて、壁も、天井も、柱も、襖も、障子も、すべて眞黑でない物はみんな鳶色に焦げてゐる、土間の天井からはどういふものか二十ばかりの鹽鮭が歳暮の紙を結んだまゝぶらさがつてゐる。お爺さんの坐つてゐるうしろの壁で時々コツコツ音がする。厩と背中合せになつてゐるらしい。格別家柄といふのでもないらしい普通の農家で、唯一の贅澤のやうに二個の電燈がともつてゐる。其の下の圍爐裏で色々の煮炊がされるのだから、電燈其物も今や茫漠とした橙黃色の光を落してゐる。

だが老人夫婦を頭に八人の家族だつた。そこへ東京から歸省中だといふ息子二人が加はつて、僕の泊つた夜の食事は頗る盛況であつた。

圍爐裏といふものは、こんな家でこそわけても家族生活の中心である。鐵器の上へは四六版の書物ぐらゐの大きな切餅が並べられる。人は之を千切つて其儘食ふか、黃粉をつけて食ふのであつた。熱い灰の中からはほかほかした馬鈴薯が挾み出された。玉蜀黍を碾いて粉にして團

子にして、それをこんがり燒いて食つてもゐた。僕といふ客の泊り合せたからのエキストラ・メニューだつたらうか、ぐらぐらたぎる大鍋の湯の中へお嫁さんが鷄の肉を狙から入れた。肉の片は見てゐる内に白くなつた。そこへお婆さんが一升壜の生醬油を注ぎ込んだ。そして杓文字でぐるぐる掻廻しては、手の平へ汁を垂らして味加減をみた。やがて澤山の葱が刻み込まれた。それが煮えて來るにつれて、若い人達や子供等の食慾をそゝり立てるやうな匂が家ぢうに漲つた。最後に大笊に一杯の饂飩が加へられた。饂飩の茹り加減はお婆さんの指につまんでためされた。其間にも濛々と立昇る湯氣は電燈をつゝんで、其のまはりに搖らめく大きな光の輪が、此の山村農家の冬の夜の情景を一層劇的なものにした。

かういふ素朴な料理の過程を僕とお爺さんとはすべて眼前に目撃してゐた。女達がうまく事柄を處理してゐる事、息子や子供等がおとなしく、しかも滿ち足りるまで食べてゐる事、又それを見てゐる相當な年輩の今夜の客が、自分達の仕方に無言の同感を與へ、好意を抱き、時には珍らしさうに好奇の眼をみはり、氣輕に、自由に振舞ひながら。その存在で家内の空氣を少しも窮屈にしない事、すべてかういふ事が、此の老人を滿足させてゐるやうに見えた。

「お部屋よりは此處の方がいいよ。やつぱり冬は圍爐裏ばただ」とお爺さんは云つた。僕にし

ても其方が願つたり叶つたりだつたから、僕の膳はその圍爐裏ばたへ運ばれた。
「ちよつと飲めますよ」と云ふので「古澤の酒といふのを一本つけて貰つた。お爺さんが燗をし、お婆さんが酌をしてくれた。一猪口飲んで金平牛蒡をつまんで、
「お爺さん、どうです、一杯つき合つては」とすゝめたら、
「このお爺さんは若い時から一口もいけないでね」とお婆さんが引取つた。
「どうもわたしにや酒がやれない」さう云ひながら老人は煙管を取上げた。若い人達が笑つた。和やかな、めでたい情景であつた。
「此の雪に倉嶽山へ登つて來たのは豪氣だ」と云ふところから、話は山や山村の生活の事へ移つて行つた。赤鞍ケ岳（朝日山）から巖道峠までの尾根は十年ばかり前に自分達の手で切りあけたが、今ではもう藪がひどくなつてゐるだらうといふ事、以前は銃獵家達がかなり此谷へ入つて來たものだが、稅が高くなつたせゐか此頃は稀にしか來ないので雉子や山鳥がうんと增えてゐる事、春になつて山女釣の面白い事、女達のにぎやかな蕨狩の事、山獨活やたらの芽のうまい事、今の季節だと子供達が川へ澤蟹を捕りに行つて、それを煎つて食ふ事、それからこんな山の中ではする仕事も無いので、若い者達はみんな東京へ働きに出る事、僕の出逢つたとい

ふ炭運びの連中も、多くは人に頼まれての駄賃稼ぎである事、交通が不便なので人氣も大して惡くなく、東京へ行く事があつても、やつぱり直きに此處の山家が戀しくなる事などが、老人夫婦を中心に、息子やお嫁さん達の口から次々と語られるのだつた。そして最後に、「春の新芽の時分には山には櫻も咲くし躑躅も咲くから、こんな家でもよかつたら、おかみさんと子供を連れて又來ておくんなさい。伜に上野原まで馬で迎ひにやるから」とお爺さんは云つた。

「ようござんすよう、春になると本當に」とお婆さんも口を添へた。

「四月末から五月かね」とお嫁さんが浮々云ふと、

「うん。一番いゝのは五月の初めだ」と長男が正確を欲するやうに云つた。

僕は遠近（をちこち）に山櫻の咲き、小鳥の囀る晩春の峠道を、かはるがはる馬の荷鞍に跨りながら、此谷の若葉の奥へやつて來る自分達の姿を想像した。その馬が今、羽目の向うでコツコツ音をさせてゐるではないか。たとひ其事が實現してもしなくても、お爺さんの今の言葉は、それぞれの人の心に、それぞれの瞬間の詩を、夢を描かしめる力を持つてゐたのだ。

かうして山間ではもう夜更けの九時過ぎまで、圍爐裏をかこんだ皆の間で、澤山の、實に澤山の話題が取上げられた。やがてお爺さんは自分で瀬戸物の湯たんぽへ湯を注ぎ込んで、それ

を暫くごとごと搖すつて栓をし、ゆつくり掛つて古い風呂敷にきちんと包んだ。そして、

「今じや海鼠板(なまこいた)みたいな物で出來たのがあるけれど、どうも此の方が具合がいいので」と云ひながら、其の湯たんぽをかゝへて一足先に寢に行つた。僕の部屋へ火を入れるやうに若い嫁御に指圖するほど、細かい心遣ひを忘れない一家の老いたる主人として。

晝間寫した乾板を入れかへて置かなければならないので、話の興は盡きないが僕もあてがはれた部屋へ引取つた。後から子供が二人で火と炭を運んで來た。一人は此家の子守で、一人は隣りの家の子だといふ事だつた。其の二人が火鉢の傍へかしこまつて僕のする事に目を瞠つてゐる。三脚を立てれば三脚に、そこへ交換袋を吊れば交換袋に、其の叉袋へ兩手を入れて手品使のやうに乾板を入れかへてゐれば其の動作に、彼等は一々「あれ！　あれ！」と云ふ驚異の聲を上げるのだつた。何もかも不思議な珍らしい物ばかりらしかつた。それに子供ならば子供だけに。此の知らぬ小父さんから聽かせて貰ひたい話も多いらしかつた。それで僕もルックザックの整理をしたり、洋服を脱いだり、寢しなの一服を吸つたりしてゐる間ぢう、此の幼い二人の相手をしてやつた。遂に、

「お客樣が寢られないぞ。もうあつちへ行きな」さういふお爺さんの靜かな聲が唐紙の向うで

した。子供達は殘り惜しさうに出て行つた。僕は夜具の襟へ風呂敷を掛けて床へ入つた。お爺さんの咳が二三度聽えた。風も鳴らず、水も歌はず、山々の雪、谷々の雪に八日の月ばかりが寒い秋山の夜を、かうして僕は安らかに寢た。

充分に眠り足りた翌る朝、服を着更へて出て行くともう家ぢうが起きてゐる。お爺さんも圍爐裏に向つて昨夜の場所に陣取つてゐる。僕はお嫁さんが取つて吳れた湯で顏を洗ふと、早速靴を突掛けて外へ出てみた。

昨日に劣らぬ佳い天氣だつた。朝日の光は道志山脈の雪の峯々を横ざまに照らして秋山の谷へなだれ込み、そこに薔薇色の炎となつて燃上つてゐる。あゝ豊麗な空よ！ きらめく雪を被衣（かつぎ）にした純潔な斜面と、その裾に點々する山村の家々よ！ どんな善事を爲したればこそ、かくも聖なる美しい朝を持ち得たのか、此の私が！

僕はシュー・シューと三脚を引拔いてカメラを据えた。一段低い前の家の、砂糖を掛けたやうな屋根を思ひ切り大きく取入れて、その上へ朝日山からワラビタ、キヘの峯續きを覗かせた。寫す心は祈に似てゐた。この祈こそは聽かれるだらう！

それが濟むと、今度は一晩を厄介になつた家の人達の記念撮影だつた。普段のまゝがいいではないかと云ふのに、みんな着物を着更へたり、髪を解いて油をつけたりした。お爺さんだけは僕と同意見で、

「このまゝの方が、後になつて爺さんを思ひ出すにもいいだらうに」と云つてゐたが、お婆さんや嫁や、見物に出て來た近所の女達が承知しなかつた。仕方なしにお爺さんも布子を脱いで銘仙か何かの通常禮服に着更へた。一同が緣側へ並んで、いよいよ此方を向くまでには手間が掛つた。うしろに殆ど餘地が無いので、プロクサール・リンゼを添用して少し斜からパンクロで寫した。

さて一人遲れて食事を濟ませば、もう出發しなければならない時間だつた。それで勘定を頼んだ。ところがどうしても要らないと云ふ。さんざ押問答を重ねた揚句に、又してもお爺さんの援兵をかりて難關を切り拔けた。さうしたら今度はバットを十ばかり持ち出したので、潔く一つだけ貰つて靴を穿いた。

「さよなら。五月には一人ででも屹度來ますよ」

「屹度おいでなさいよ。葉書一本呉れゝば上野原まで迎ひに行くから、一人と云はずに家の者

もみんな連れて……」

僕は家族の人達に見送られて飛び出した。足は輕いが心はいくらか重かつた。道を川下にとつて一町ばかり坂を登つてから初めて 返ると、中野の部落はもう雪花石膏の鉢の中であつた。

これからは小さな登り降りを繰返しながら、漸くぬかるんで來る道を、なるべく兩側に殘つてゐる雪を踏むやうにして行くのだつた。地圖を見ると險岸圖式で表はされた箇所が多くなつただけに、秋山の谷も見おろすやうに深くなつた。これに反して道から上の斜面は今までよりも緩やかになり、殊に南東に面した中腹にはかなり高いところまで桑畠が作られ、部落も河身からよほど離れた高みに營まれてゐた。川は中野から十町ばかりの地點、ちやうど巖道峠からの道が橋を渡つて登つて來るあたりで北東へ向きを變へて、今云つた險岸の間をぐるぐるとうねつて流れてゐる。神野（かんの）、小和田、古福志（こふくし）などといふ部落は、すべて此等の曲流點の近くに位置してゐるのである。そして古福志を過ぎると川は再びほゞ東へ向ふが、其處には櫻井、富岡、一古澤（いつこざは）、奥牧野などの部落がかたまつてゐて、山間小盆地のやうな地形の中で秋山川流域中の最も大きな聚落群を形成つてゐる。

泥濘と、雪の山と、眼に痛い日光の反射ばかりの風景の中で、一番心をひかれるのは小鳥の姿だつた。積雪に食物を奪はれた小鳥達はすべて里近くへ集まつて來てゐると見えて、昨日も今日も夥しい數である。中でも頬白が最も多く、次いではあをじ、上鶲、黄鶺鴒、鶸、雉鳩などが主なものだつた。同じ部落附近でも、すこし靜かな林の縁などを通ると、突然「ツン・ツン・ツン・ピン・ツー！」と叫ぶ日雀の群の警戒の聲に、却つてこつちが驚かされるのであつた。小和田を過ぎて古福志へ越える小さい山道へかゝらうとした時、杉林の中で絲のやうに細いきくいたゞきの聲を聽いた。澤の落口へ懸けられた橋を渡つて向ふの高みを登つて行くと、今度は其の杉林が眼の下になつた。それで僕は、あの暗綠色の着物に鮮かな金盞花いろの帽子をかぶつた可憐なきくいたゞきを二羽、息をころして、じつと五分間も見てゐる事が出來た。

すこしは賑かな所だらうと思つてゐた古福志も、來て見ればやはり谷の上の小さい部落に過ぎなかつた。喉が渴いたから蜜柑でもと物色したが、そんな物を賣つてゐさうな家は眼に入らなかつた。一體街道筋などゝは違つたこんな山の中を歩いてゐて、贅澤にも間食物を買はうといふ了見の方がすでに間違つてゐたのかも知れない。しかも時は冬の最中である。日の當つた障子もあかるく長閑に住んでゐる石垣上の農家はあつても、道に沿つた店屋らしい物は、たゞ

屋根から落ちる雪解けの雨だれを避けて、建付けの悪い雨戸を閉ぢてゐるばかりである。そのぬかるみの古福志をぴちやぴちや云はせて通りぬけると、僕はいよいよ秋山の谷に別れを告げて、櫻井を右下に、田野入（たのいり）への山道をとるのだつた。

道はちよつと高みへ登る、と直ぐに擂鉢を半分にしたやうな桑島の斜面へ出る。此處は南にひろびろと日をうけてぽかぽかの土があらはれ、廣大な日溜りが春のやうに暖い。桑の木の株から株へ、灰いろと黒と茶との三色（トリコロール）に白い斑紋つけた土鶸が、棲まるたびにお辞儀をしながら「ヒー・ヒー」と鳴いて飛んで行く。武州顔振（かうぶり）峠に近いあの風影（ふかげ）の里をおもはせる此の斜面を、一羽の鳥のあとをつけながら行く僕の心は又無く麗らかなものだつた。來し方にはこれを見納めの道志の山々や大群山、東へのびる谷あひの空には、數年前の岐阜蝶發見で思ひ出も深い石老山。その山麓に八重櫻が咲き春の水が奏でゝゐた牧馬（まきめ）や篠原。たとひ身は富ますとも、自然こそは我がまことの富と思つたのは正に此處での事である。

此の斜面を横ぎつて登りつめれば、田野入へ向つて下りて行く小さい峠だつた。右手の小高い草山へ上つて最後の南方の眺望をたのしんだ。それから雪を蹴立てゝ北側へ下りて行つた。

道は恐らくタカクラ山と呼ばれてゐる七三三米の山の東の裾を廻つて行く。金山からの便道

と澤とを左に迎へると勾配も緩やかになつた。谷は狹いが森閑とした美しい自然であつた。時々靜寂を破つて伐木丁々の音がひゞく。かけすが鳴く。それから又一つ左から澤が入つて來るところに、名は知らないが落着いた小さい部落。此の附近一帶に武州御嶽の裏山、越澤あたりの感じが深い。晩春ともなればひかげつゝじの黃いろい花も見られよう。のごまの聲も聽かれよう。峠から田野入まで、正午近い太陽にどんどん溶ける雪道をなやみながらも、僕は山を歩く事の幸福を、見る事の喜びを、又してもつくづくと味ふのだつた。

田野入は輪廓も柔かな山々にかこまれた平和な狹い一廓だつた。麥の綠が春風にそよぐ頃ならば、此處を山中の草原だつたと云つてもいゝかも知れない。さうすれば此村が何となく、シャレエの點在する瑞西の部落に似た感じを持つてゐる事が解つて貰へるだらうと思ふのだ。馬のいなゝき、鷄の歌、豚の鼻聲、さては遊んでゐる子供達の幼い叫。さういふものが皆反響するかと思はれるやうな圍みの中、空飛ぶ雲が覗きに來る小天地に、人々は田畑をいとなみ、梅を植え、桃を植え、竹林をそだて、用水の流を走らせてゐた。しかも村の一方に山を穿つた天神嶺の隧道をひとたび拔ければ、あゝ皓々たる桂川流域の展望は往手にひらけて、一層廣大な自然と生活との交響樂が嚠喨とひゞいて來る。

その天神隧道をくゞつて山側を降り、鶴島の段丘上から再び歸つて來た桂川の眺めをひろびろと見渡した時、わづか一日半の旅ながら、深い感慨の胸に滿ちるのを僕は禁じ得なかつた。

上野原の驛で汽車を待つ間、僕は珍らしい物のやうに麥酒を飲み。土産として一羽の大きな山鳥を買つた。

戸隠と妙高

上信國境碓氷の谷や峠路に、秋のもみぢは未だいくらか淺かつたが、風にきらめく千曲川の川ぞひを、北へ北へと進んで信濃・越後の國ざかひ、日本海の水の色が寥廓たる天にうつる妙高・黑姫・飯綱の高原まで來て見れば、十月の錦繡今や莊麗のかぎりを盡して、遙かに北アルプスの雪の連峰と呼びかはしてゐた。

その高原に眠りゆく秋と目ざめる冬の姿を求めてさまよふ今度の旅の第一歩として、私は長野放送局をおとづれた。それはしかし何かを放送するためでは無かつた。折もあらばと、心に

かけてゐた人に會ひたい願からであつた。

毎年六月の朝早く、東京の私達をよろこばせる遠い新緑の戸隠山からの小鳥の歌、その放送の說明にあんな優しい事どもを云ふ長野放送局のアナウンサー。その未知の人をたづね當て、ただ一言でも感謝の念を傳へようとは、單なるわたくしの志のみでは無かつたであらう。

二基の鐵塔が長野平の朝霧にぼんやりかすむ午前八時、尋ねる人は其處にゐた。善光寺の東。市中を見おろす城山公園の丘の一角、うつくしい庭や花壇をめぐらしたJONK、近代式平家造りの瀟洒な白堊の洋館、その建物の、森閑とした一室で會ふことの出來た目的の人は、名を荒木壽考君と云つた。詩人のはしくれである私が、わづか二十分に滿たぬ短い會見からの印象によつてさへ、人間の心や自然の美に敏感な人と見てとつて決して過たないやうな人柄であつた。おたがひに勤務の時間、旅の途中、さうした慌ただしい中で私達は眼を見合はせ、相手を識り合ひ、實意のこもつた心持を手短な言葉で傳へ合つた。それはちやうど、廣い海のまんなかで擦違つて、大いそぎで合圖をかはす二艘の船のやうなものであつた。さうして吾々は袂を別つた。人生が今ともしたばかりの小さい清らかな感激の火を、俗の風に取られまいと大切に護りかばひながら。

次第に晴れて來る青空の下を、ふりかへりがちに丘を下れば、朝の新鮮な日を浴びて、カテージ風の白い建物と桃いろのコスモスとがさながら一幅の繪であつた。

それから二時間後、私をのせた車はもう廣大な飯繩ノ原を走つてゐた。昨日の日曜はかなりの人出だつたと聽くにひきかへて、今日はきらびやかな秋晴れの高原を、往手をさへぎるものも無く飛ばすにふさはしい閑散なバスだつた。

長野市の北西に迫つた眞白な斷層崖を、あの七曲りの急坂で一氣に四百米あまりも登りつくすと團子に名高い荒安の立場茶屋。ここで旅客は窓越しにお茶をもらひ、切符の檢札をうけ、また運轉手は一服吸つたり窓の雨よけを外したりする。茶色にくすぶつたセルロイドが無くなつて、景色も風も自由に飛びこむ事になつた。運轉手はシャツの兩腕をまくり上げて、新らしい意氣でハンドルを握る。初動が掛かる。車體がぐいぐいと出る。荒安はたちまち爆音と煙のうしろ。進むにつれて往手の風景は天のはうが多くなり、いかにも火山の裾野を登つてゐる事が感じられる。その裾野の色とりどりの秋の樹の上、ひときは青い北方の空の穹窿を燒きぬいて、飯繩山がその燦たる圓頂を現すのだつた。

飯繩山が南西に展開した裾野の原を、鳥居廻り・縣道廻りの二つの線に分けて、長野市と戸

隱中社との間を乘合バスは往復してゐる。前に書いた七曲りの坂を登つて荒安に出、大座法師池・論電ケ谷地などといふ池沼群の散在するあたりから所謂飯繩ノ原にかかつて、その枠の中に戸隱山をまるごと收める豪壯な一ノ鳥居をくゞり、それから約一里して寳光社から中社へ達するのが鳥居廻りの線である。

縣道廻りは大體鳥居廻りと並行しながらもつと下を行く。善光寺の大門から西へ約二十町ばかり行つて茂菅といふ處で裾花川と分れ、急に北へ登り、裾花峽の上に雛壇のやうに並んだ山村の間を縫つてぐるぐる登りながら入山から飯繩ノ原、そして緩斜地の上野を過ぎて寳光社の下で鳥居廻りと一緒になるのである。

バスの速度が大きいので、兎もすれば擴げて持つた地圖も吹き攫はれさうだつた。荒安を出て勢久保、「紅葉狩」の鬼女で名高い荒倉山の、折納のもみぢで赤と黄の練物のやうになつた尨大な山塊を左に見ながら、突然の出現に驚いたのは、其の右手の空のなかほどにもう新雪をべつとり塗つてぎらぎら光る白馬、杓子の雄姿だつた。いやそればかりか、裾野の路が方向を變へるたびに、鹿島鎗も出れば針の木も出、その間からちら〳〵と、劍・立山のプラチナの群峰さへ望まれた。

車内には私のほかに東京者らしい中年の夫婦がゐた。その妻君の方が、この廣大な風景にすつかり心醉してしまつて、

「こんな處に住んでゐる人達は、さぞ長生が出來るでせうね」と私に云つた。その夫婦は、さつきから、多磨墓地へ建てた彼等の墓の話をしてゐたのだが。

疾走するバスがくぐり抜ける一ノ鳥居は、その雄渾な形がまるで高原の虹だつた。戸隱街道が飯繩ノ原を横ぎる最高點、ここに此の大鳥居をそゝり立てた昔の人のひろびろした叡智と趣味は、もう今の時世では望むべくも無い。私は此の大鳥居の寫眞を一枚寫したかつたが、さう思つた瞬間に公共の車は遠慮も無しに砂塵を捲いて走りぬけた。時間に餘裕さへあるならば、大座法師ノ池あたりで乘物を捨てゝ、此處はどうしても歩いて通るべき道だと思ふ。

乘ること一時間あまりで終點戸隱中社へ着いた。飯繩の裾が戸隱の裾と交はる南西の一端、海拔一二三三米の地に鎭座する中社は、天八意思兼命を祀つた社だといふ。老杉にかこまれた聖らかな神域にブナの落葉がはらはら。山中の靜寂な空氣をけたゝましく震はせる鳥の聲は何かと見上げれば、巨木の高い枯枝を上へ上へと攀ぢてゆくアカゲラであつた。中社の別當職久山淑人氏方へ立寄つて中食をとゝのへ、ルックザックを殘して寫眞機だけの身輕ないでたちで奥

社へ向つた。黄から朱、紅から紫にまで移るあらゆる紅葉は、奥社への道三十町の間、山腹と云はず谷間と云はず見得るかぎりの風景を埋めつくして、秋の豪華は此處に凝つたかと思はれた。しかも豪壯な戸隠山は、本岳も西岳も灰白んだ岩骨に紅葉を纏して、白雲散らした越後の青空を瓶してゐた。

私は長野放送局の荒木氏が描いて呉れた略圖をたよりに、小鳥放送のマイクを据ゑ付ける場所を見に行つた。それは中社から二町ばかり奥社寄りの路傍の林で、高い笹を下生えに、落葉松、白樺其他の混生した處だつた。私はその中を歩き廻つた。感慨はそぞろに深かつた。ほの暗いひやりとする笹の中では、折柄三四羽の藪鶯が早くも今宵のねぐらを求めて「チャッチャッ・チャッチャッ」と鳴いてゐた。

戸隠中社から奥社まで、三十町と云はれてゐるが、實際ではどうも一里はたつぷり有るらしく思はれた。しかしどうせ今夜は中社泊りだから格別いそぐ必要もなく、氣の濟むまで小鳥の森をさまよつたり、燃える城壁のやうな戸隠西岳を撮影したりしながら、人つ子一人通らない坦々たる大道をのんびり歩いた。

その大道がだらだら下りになつて、左へ直角に奥社への參道が切れてゐるところから、正面

に悠然と黒姫山が現れた景色は實に美しかつた。灰黒色の怪異な姿に一面の紅葉が血しぶきを吹きつけた戸隠山にひきかへて、おつとりした圓錐形を狐色に枯れた草と眞黒な針葉樹とで包んだ黒姫山は、青空を背にして一杯に日をうけた其の淸楚な形と爽かな色彩とで、すでに紅葉にも飽いて來た眼を涼しく洗つた。たゞ殘念だつたのは其處に長野縣の通行止の制札が立つてゐて、明日は此の道をまつすぐに黒姫・飯繩の裾合を歩いて、信越線柏原から妙高へ出ようといふ折角の豫定が覆された事である。

しかし奥社への參道は秋の靜けさ限りもないものだつた。道の兩側に亭々と立つ老杉や落葉樹の、その狹まる果ては日も傾いて紫くらく、折々の風に梢をはなれる七葉樹の葉の婆娑たる響きは、もう何處となく霜を感じる北國の空氣をふるはせた。

さうした道を殆どまつすぐに十八町、奥社はすでに日も暮れぐれの戸隠の中腹、冷凉な泉の音と、氷つた炎かと思はれるやうな紅葉の中にあつた。神殿に張つた幔幕の、菊花の御紋章も神さびて、イタヤメイゲツやハウチハカヘデの落葉が靜かだ。禮拜をすませて拜殿前の腰掛に休みながら僅かに開けた東の方を眺めると、夕暮の靄につゝまれて、野尻湖畔の斑尾山が南へ引いた尾根のむかうに、苗場らしい山の形が薔薇いろに匂つて浮き出してゐた。

往路を戻つてもう一度小島の森を見てまはり、やがて今夜の宿の久山方へ歸つた時には日はすでに沒してゐた。廣大な母家には百人餘りの川中島小學校の遠足の一行が泊るとかで、私の部屋は主人の父君の隱居所の方に取つてあつた。そこは西から南西への眺望がひらけてゐて、窓をあけると、夕映の空を背景にして、鹿島鎗、爺父、針ノ木あたりの北アルプス連嶺がくつきりと現れ、南の空の最も奥に、美ケ原や蓼科山が夢のやうに淡いながらも、其の特徵のある山容で確にそれと望まれた。夕飯の膳に一本をかたむけて、山々の姿の消えた眞暗な空に花と咲き出る星の光りを見てゐれば、さすがに旅愁の新たなるを覺えるのだつた。

翌朝は九時に宿を立つてバスへ乘つた。昨日にひきかへて雲の多い空であつた。今日は縣道を廻つた。鳥居廻りよりも下を行くので、遠山の眺望は少いかはりに到るところに美しい山村風景が展開した。

長野は參詣の地方人で雜踏してゐた。汽車の出發まで買物などをしながら時間をつぶして午前十一時七分、新潟行の空いた列車へ乘込んだ。豊野までの間は右手の窓に四阿、白根、岩菅などの山々の眺望が立派だが、豊野を過ぎて飯繩の裾をぐるりと北へ廻ると、俳人一茶の生地柏原までは殆ど狹い山間の風景だつた。それから昨日の黑姬山が今度はその東面を現した。つ

どいて妙高。風景はがらりと變つて落葉松と白樺、波うつ薄の穗、北國の高原が眼の前へ高まる海のやうにひろがつて來た。

　私は田口で汽車を降りた。降りは降りたが一つ手前の柏原の落着きのある町並と、古い越後の宿らしい姿を見て來た眼には、冬のスキー客を搾れるだけ搾つて食つてゐるらしい此の田口驛前の町の樣子が、いかにも薄つぺらで氣品も風格も無いものに見えた。それもいゝとして、さて改札口に出て赤倉行のぼろぼろのバスに乘らうとすると、赤倉ホテルの半纏を着た感じの惡い若僧が何處からともなく現れて、「旦那、お宿はどちらです」と訊く。香嶽樓だと答へたら、「ホテルになさい、設備も待遇も段違ひです」と云つた。私はむつとして、其男の顏をちらりと見たまゝさつさとバスへ乘り込んだ。乘つて見ると女の先客が二人ゐる。聞けば赤倉の奧の燕溫泉の者だが、今日は野尻湖まで遠足して今その歸りだと云ふ。格別自分達の方を勸誘するでもなく、野尻の景色の佳かつた事などをきさくに話して吳れるのが氣に入つた。それで豫定を一日早めて、そのまゝ眞直ぐ燕へ行く事にきめてしまつた。

　バスが北國街道を橫ぎつて、爽やかに秋を色づいた妙高の高原を赤倉さして爪先上りに走るあたり、もう私の氣持はすつかり平靜にかへつて、身も心も妙高山の美しい姿を前にした此の

廣大な自然にとらへられてしまつた。十五分ばかりで降りた處は終點赤倉溫泉だが、新開地の成上りの標木みたいな赤倉ホテルも用が無ければ格別氣にもならず、女達と一緒にすたすた町を通りぬけて、一段高みに見える久邇宮家別邸の横手の坂を登つて行つた。

此處から丸山といふのを右に搦んで安山岩を穿つたトンネルを拔けて、燕溫泉まで約三十町の山道は、其後妙高の東の麓を歩きまはつた私が、最も樹々の紅葉の美しい、いかにも人氣を離れた趣深い路として、敢て推賞して憚らない處である。宮家の別邸の手前を右へもう關溫泉への自動車道が出來かけてゐたが、心ある人のためには保存して置きたい路である。山腹を左に搦む此の小徑の上、眞紅のツタウルシを樹幹に卷いて亭々と立ちならぶブナの巨木を前景に神奈山の大岩壁にかゝる惣瀧を遙かにながめる壯觀は、實に此の路を措いてほかには無い。そして其のどんづまりに、一塊りの鳥の巢のやうな燕溫泉はあつた。

連れになつた女達の家即ち私の宿は、岩戸屋といつた。猫の額ほどの平地に溫泉宿の數は八つばかり有るが、內湯は此處が最も綺麗らしく、駒澤大學を一茶の論文で出たといふ若い主人も氣の置けない話好きで、一種の風格を持つた親しむべき人物だつた。季節をはづれて他に客も無いまゝに、帳場の圍爐裏をかこんで山葡萄の酒を飲みながら話してゐれば、しいい、しんしんと更

けて行く山中の夜を話題はつきず、身の越後に在るのも忘れてしまつた。
風呂へ浸かつてゐると頭の上は神奈山、新館の二階座敷の緣側の、西向は軒につかへる妙高の頂上、東は大田切川上流の開けた谷を縱に見て、遠く岩菅から苗場までの大觀。その山々の果てしの空に雄大なオリオン星座のせり上がる夜更けも美しかつたが、幾重にも朝霧の帶をよこたへて、遠方ほど次第に霞む上・信・越の翠微の奥から、爛々と朝日の昇る光景は今も深い印象として殘つてゐる。
更にもう一つ忘られないのは、夕食の膳に出た澤山の馳走の中で直江津の海で取れるといふ霜鯵といふ魚の味だつた。
季節の頂上から崩れるばかりの盛りの秋に、妙高の東の裾を心ゆくまで味はつた私は、此の高原の雪消の春には、その南の裾である杉野澤の部落や笹ケ峰の牧場をたづねて見たいと思つてゐる。

須走

大磯を過ぎる頃から本降りになつて國府津の乗換で一行の心を暗くした可也の强雨は、やはり其朝、北海道の東の海上にゐた低氣壓から、日本島弧に沿つて南西へ延びて、遙かに沖繩・臺灣附近まで達してゐると云はれた、あの不連續線の仕業であつたらしい。

二つ三つ雷なんか鳴らして前途を不安がらせた暗澹たる空模様も、しかし國府津での土砂降りが峠だつたとみえ、それからは次第に亂雲の薄靑い切間をのぞかせるやうになつた。それにつれて一行の氣分も明るくなつて來たか、新らしく陣取つた車室の方々から賑やかな笑聲など

も聽えはじめた。

汽車の窓には未だ名殘りの雨滴がパラパラ當るのに、遠くの山や村里には蜜のやうな日ざしの流れてゐる下曾我あたり、線路の描くカーヴにつれて廣々と展開して來た酒匂川流域の田園風景には、なかなか捨て難い詩があつた。

その下曾我で、國府津から乘合せた女學校歸りの生徒が大分下りた。鄕土の驛のプラットフォームを吹拔ける六月の雨後の風が、彼等のスカートを波打たせる。みんな日本一優良兒童の候補者のやうな娘ばかりである。斯うした逞ましい田舍の女學生たちの姿にも、何かしら現代の日本らしい別種の詩があつた。

古い松田惣領には何處か沈滯した空氣が感じられたが、酒匂川下流の廣い氾濫平原の一隅に横はる下曾我は、いかにも新らしい發展過程の途上にある町らしい形態を色々の點で示してゐた。

足柄山塊が深い横谷で斷ち切られて其處を酒匂の上流が流れるところに所謂箱根のトンネルがある。氣をつけてゐると、かなり高い谷壁の出つぱりを横薙ぎにして大小とりどりのテラスが見える、此のテラス群を想像の連結符（トレイ・デユニオン）でつないでみたら、此の山塊を削つた太古の河底の

鉋の面が分りさうである。

毎年一度や二度は必ず碓氷トンネルを往復する癖に、此の箱根のトンネルには近年とんと縁が無くなつてゐる。それだけ久しぶりに通つて見直す此處の山谷の眺めからは、其後いくらか成熟した自分の眼と過去の思ひ出とを綯ひまぜて、一層良く其の獨特な美と意義とを感じる事が出來たやうである。

以前は汽車が箱根へかゝつて此の有名なトンネルを出たり入つたりする頃になると、きまつて車内の方々で窓があけたてされたものである。トンネルを出るのを待兼ねて窓をあける。首を出して見ると前後に機關車がついてゐて、それがポッポ・ポッポと規則正しく煙を吐きながら、いかにも營々孜々として天下の嶮を登つてゐる。見下ろせば溪流はあんな下の方を淙々と流れて、岩に激した水が眞白な飛沫を上げたり渦を卷いたりしてゐる。向うの崖ぶちで山百合の花が涼しく搖れてゐる。其處の岩角で赤いのは剪秋羅(せんのう)だらうか……と、忽ち前後の汽笛が相呼應して次のトンネル入りを知らせる。それを聽くと皆あわてゝ窓をしめる。

妙なもので、其後今のやうな電燈に改良されたのは勿論なのに、思ひ出の車内にともつてゐるのは何時もあの舊式のランプである。此のランプは慥か山北で入れられたやうにおぼへてゐ

るが、其點ははつきりしない。兎に角トンネルの轟々いふ反響に包まれてゐる間ぢう、其の明りが變になつかしく和やかな物として自分の眼に映つた事を今でも明瞭に思ひ出す。

今日ではあんな窓のあけたてなどは餘り人がしなくなつたやうである。人々が旅行といふ事に馴れつ子になつて昔ほど物を珍らしがらなくなつたせゐかも知れない。尤も皆が皆さうでもあるまいが、一般には、かうした自然への無感動(アパシイ)は近頃の顯著な風潮で、自分などには色々な意味で淋しくもあれば物足りなくも思はれる。

シャルル・ヴィルドラックの小品に「トンネル」といふのがある。子供と其の母親とが汽車の旅をしてゐる。子供は窓硝子に額を押付けてさつきから一心不亂に外を見てゐる。柳と水車と、三人の男の子が釣をしてゐる石橋とを持つた早瀨。此の無上の出現を子供は決して忘れないであらう。そして今や汽車はトンネルへ入る。

子供はデッキにゐるのである。母親はおびえて幾度も云ふ、「もうお坐りなさい。もう何も見る物はありません」。子供は坐らない。見る物が無いつて? 子供は何時でも何か見る物のある事をよく知つてゐる。眼と心とをちやんと見開いてゐる彼にとつては、悉くの物、悉くの瞬間が差出された贈物のやうだといふ事を知つてゐる。

彼が見なければ、誰が此の盲ひた穹窿を見てやるだらう。誰が此の穴倉の中に撒かれた煙の渦を、その黒い死を見守つてやるだらう。彼が見なければ、彼が見るすべを知らなければ、そも〳〵どんな心が、また現れる最初の微光の哀れさを悟るであらうか。

トンネルの出口に枝をすりつけてゐる一本のアカシア。陰氣な土手の上へ最初に現れた病身なアカシア。「このさゝやかな木は、使ひみちのない眼をよごれた羽目板につけて、ぢつと運ばれてゆく五百の旅客のためにとて、そこにゐるのではない。また現れてくる木の葉をしかと見るために、闇の中でつぶらすにゐた此の鮮かな忠實な眼を幸福にするとて、そこにゐるのである」

私はこんな聯想や窓の外を移つてゆく風景のなかに自分の心をさまよはせながら、何年ぶりかで通る箱根、今では丹那に席をゆづつた寂しい箱根から、今度の旅が提供するであらう幸福の中での最もディスクレエなものを受けとつたのであつた。

★

右手の山々が先づしりぞく。やがて左の窓に見えてゐた金時山がうしろになる。汽車はラスト・スパートをかけて、往手にひろがる限空線をめがけて押上がつて行く。青空にならぶ雲のだんだらが美しい。富士山の東の裾野が箱根火山と裾合ひした御殿場の臺地。雨後の高原は氣溫もぐつと下つて、一望の風景にはどことなく野分の後の感じがあつた。

子供の頃、關西への旅の歸りに、此の停車場へ停まつた汽車の窓から御殿場の夏の富士といふものを初めて見てあれが一體本當の富士山かしらと疑つた事がある。まるでふわりと置いた駱駝の毛布か、地震でつぶれた大伽藍の屋根のやうだつた。玲瓏とか端嚴とかいふ形容詞がちつとも當嵌らないほど、それは締まりのない、だらりとした、グロウテスクな物に見えた。

今、涼しすぎる程の風がざわついてゐる御殿場驛の廣場に立つと、其の富士山は未だ厚い雲に包まれてゐる。土地が高いせゐか、天があんまり廣いせゐか、季節外れで淋しいせゐか、人間の姿がみんな小さく、孤獨にさへ見える。かなりの人數の一行を二臺のバスに分乘させるといふので色々斡旋してゐる會の人達の聲なども、本來の振幅ほどには聽こえない。一行にまじつた小さい娘さんや婦人達が、ひと夏の避暑地を引上げる滯在客のやうに見えるのも不思議である。これなども矢張り秋の感じだと云へば云へる。

兎も角も、膝頭の出るクレイヴァネットの半ズボンを、用意のための毛のニッカーに穿き換へて置いてよかつたと思ふほどの冷氣であつた。

バスの眞中の通路へ補助椅子を出して、それでも未だ立つてゐる人のある超滿員だつた。舊鎌倉往還はほとんど自動車の專用路みたいになつてゐるせゐか、かなり凹凸があつて、遠くから眺めれば輕快に走つてゐるやうに見えるバスも、乘つてゐる身には相當腹にこたへるのである。まして身じろぎも出來ないやうな壽司詰めの車内では、乘物に弱い婦人などは氣分を惡くしたかも知れない。

私のすぐ後ろの席で、誰だか「氣持が惡いの」と云つてゐる。一行の中の二人連れの若い女の人の一人である。膝の上でルックザックを抑へてゐる手がハンカチを握つてゐる。

バスは容赦なく走つたり曲つたりする。其度に後ろの人の一生懸命にこらへてゐる氣持が背中をとほしてビリビリと感じられるやうな氣がする。

「もう直き須走ですよ」と私は聲をかける。「氣持が惡いやうでしたら、なるべく遠くの雲のやうな物を見てゐると幾らか違ひますよ」

「はあ」といふ微かな聲が聽こえる。その內に同じ聲が、「聽かれてしまつたの」と囁く。連れの相手が、何を私が云つたのか訊いたらしかつた。其聲が案外元氣なので私は幾らか安心した。

人の頭と梓との狹い空間から覗くと、空はどんどん晴れ上つて行くらしく、半透明に鳶色がかつた初夏の富士が、中腹以上に白雪をいたゞいてちら〳〵見える。

是からと明日一日とを鳥に捧げた時間だとは思ひ乍ら、ともすれば詩人の眼が、心が、勝手な方角を彷徨ひ步く。

一行の中にI氏の一家族が見えてゐる。その末の令孃のA子さんとは、前にも一度霞網の見學で一緒になつた事がある。其時は縫ひぐるみの犬を大事さうに脇の下にかゝへてゐた。だが今ではもう成人して立派なマドモワゼルである。だから小さい時のやうに玩具の犬は連れて來ない。そのA子さんを久しぶりに見て、私は自分をも亦運んだ「時」の流を思ふのだつた。未來に待たれる春はいゝ。どうか私の夏も豐かな秋によつて祝されるやうに！

米山館の二階と下とに分れて三十幾人の一行がほつとして寬ぐ。私はお茶を啜ると立上つて

外へ出る。空はもう綺麗に晴れて、空氣は極度に澄んでゐる。西へ廻つた日の光が此の須走村を平和に染めて、火山砂の道のしめりも氣持がいゝ。

往來の向側へ立つて村の上手を眺めると、淺間神社の森を中景にして、雄大な富士を取り入れた景色がそのまゝ繪になつてゐる。風が凪いで高原の夕日に醉つてゐるやうな須走村。今日は鳥の見學に行かないで、かうして落着いてゐてもいゝなと思ふ。一本の煙草がひどく旨い。

その美しい青空と夕日とに華やかにされた路の上を、最近不幸に遭はれた若いK伯爵がやつて來る。二日ほど前に先着して、私達の來るのを待つて居られたのである。カッターシャツの兩袖をまくり上げ、寫眞機を胸へ吊るし、宿の貸下駄つつかけてぶら〳〵來る。こちらから手を上げて合圖する。

もしも普段とちがふ環境で、友の眞面目の他の一面にゆくりなくも觸れて、そこに不圖「人生」を味ふ事があるとすれば、これも亦それであつた。

夕食前に散歩がてら鳥の聲を聽いて來ようといふので、一行が身輕になつて宿を出る。名ば

かり久しく聽かされてゐて見るのはこれが初めての、例の鳥寄せの名人、此の須走に住む高田兵太郎と其弟の昂とが附添つて來る。一行の中には、私にとつて親しい顏や知つた顏も見出されるが、多くは未知の人々である。皆が互にさうであつたかも知れない。しかし「野鳥」の會につながる緣があつて、全體の雰圍氣には異質も混らなければ鋒もないやうに思はれた。

富士の須走口登山道を躑躅園の上あたりまで往復したこの夕暮の散歩は、今度の會で一番靜かな纒つた印象を留めたもののやうに、少くとも私には感じられた。それは落日の少し前から宵闇の漂ふ迄の微妙な時間で、甘美な空の光が新綠の裾野一帶に流れてゐた。

道の兩側は林のふちが小高くなつて、灌木叢の下には柔かな蘚苔にまじるコケモモが房々と白い花をつゞつてゐた。そんな處には又ビンヅイの巢も見出されるのだつた。淺く切りひらいた登山道の、ちよつと眼につかない草の蔭などの土くれを、小さい盃形に掻きのけて、其處へ產座をしつらへて四つほど可憐な卵を產みおとしてある。みんなが代るがはる身をかゞめてそれを見る。抑もどんな小さい體が、どんな小さい魂が、一心になつて此處の土くれを掻きのけたのか！

アヂジヤホホアカの、涼しく甘い夕暮の歌に聽き入つたのも其處だつた。晴れたまゝ暮れて



萬場と叶山

ゆく空の光に、富士はほのぼのと醉つてゐるがやう。その靜謐な深遠な空氣の中で、あゝ、どんな內心のうながしが、あれらの小鳥を歌はせるのか。どんな優しい夢のやうな思想が、あの內氣なメロディーを長引かせるのか！

私は眼から双眼鏡をはなして、それを小さいA子さんに渡す。可憐にもとどろく胸を鎭めながら、指さゝれた梢の一點へ向ける眼鏡の焦點に、あのホホアカの夕暮の影繪が、果して熱く鮮かに燒付いたらうか。

コルリは道々餘り澤山聽いたので、却つて印象が漠然としてゐる。しかしジフイチのあの悲痛な囀りは、私の幾多 山の思ひ出を呼び出した。次第に切迫して來るあの鳴き方には、山を降り、人氣もない澤を傳つて、今宵の宿を求めて急ぐ登山者の感傷に深く喰入る力がある。それは何時も「早く歸れ、家へ歸れ」との促しのやうに私には聽こえた。そしてしかも家へ歸つてあの聲を思ひ出せば、それはまた幽邃な山谷へのいざなひとなつた。

そのジフイチが鳴いてゐた。私は路傍の淺い林を拔けて、裾野の灌木原を廣々と見わたす處へ出た。鳥の聲は近いやうにも遠いやうにも聽かれた。もうたそがれてゐた。眼鏡の視野をぐるりと廻せば、其處へ入つた薄墨色の山の影繪は、原の南に頭を出してゐる愛鷹の連山であつ

た。

米山館を總動員して天手古舞を演じさせた夕飯が濟むと、三間續きの二階座敷の襖を拂つて參加者が一堂に集まつた。多くの顏の中には關西や四國から遙々來られた熱心な人々も見えた。其中の京都のSさんを見出して私はひどく喜んだ。去年の夏霧ケ峯で催された「山の會」で初めて知合ひになつて以來、折々の文通を交してゐる間柄である。

今年の鳥のそれぞれの渡來日と、明日見學すべき巢の種類とに就ての高田昂の報告が終ると、其兄の兵太郎の鳥の鳴眞似が演ぜられた。渡來の報告の方は私などには別に言分も無く、去年よりも幾日早いと云はれゝばさうかと思ひ、遲いと云はれても矢張りさうかと思ふ外には仕方がなかつた。

口笛による例の有名な兵太郎の鳴眞似は、うまいと云へば云はれなくも無いが、正直の處、私には殆ど何等特別な感銘が無かつた。永年此の須走に小鳥と一緒に暮してゐて、あれだけの模倣だとすると、期待の方が少し大き過ぎたやうな氣がした。「齒がぬけろばぬけるほど、樂に吹けますでさ」と本人が云つたと中西悟堂君は書いてゐるが、樂は樂かも知れないが、どう

も矢張り齒が有つた時の方がもう少し上手だつたのではないかといふ氣がした。寧ろロダンの「鼻つぶれの男」の首から精力と油氣とを拔いて、それを引伸したやうな此の老人の不思議な骨相と特異な風貌から、或種の美を見出す方が私には好ましかつた。唯、彼が試みたトラツグミの鳴眞似には、不思議な妖氣と力とがこもつてゐたやうに思ふ。

小鳥の地鳴きや囀りの聽きなしを表現する點では、寧ろ中西君や、其夜と翌日、折々片鱗を見せた中村幸雄さんあたりが其道の人ではないかといふ氣がする。たゞ、鳥の觀察に當つては、(實は鳥だけには限らないのだが)、出來るだけ批判的で正確である事、自己の先入見によつて事實を歪ませない事、斯うで在らせたいが爲に斯うであるとするやうな無意識の間の作爲を飽くまでも警戒する事などが缺くべからざる條件のやうに思はれる。こんな事は云ふだけ野暮のやうな氣もするが、若しもさうでないと、學問にとつては元より、本人にとつても眞の利益にはならないだらうと思ふのである。

★

一夜を吹通した強風が幾らかをさまつて、明くる六月七日は一天晴れた須走の朝。「こんなによく晴れた日は年に二日か三日しか有りません」と、宿の人の云つたほどの快晴だつた。

ずらりと並べられた朝飯の膳に向つた人々の中で、誰よりも先に立つた私は急いでアカゲラの撮影に出かけた。昨日K伯爵に教はつて、寫すように勸められたアカゲラである。

淺間神社前の右手の畠の隅に、一本の栗の大木がある。其の太い幹の中段に夫婦の鳥が今や雛を育てゝゐる。

私は出來るだけ三脚を近附けて、中から可愛い雛の聲のする其の穴に焦點を合せた。焦點距離一五〇ミリのレンズで、焦點板に映る穴の直徑は僅かに二ミリ。それでも眼に流れこむ額の汗を拭きもやらずに、蟲を運んで近づく親鳥を待つてゐた。待つこと三十分餘り。やがて此の怪物を警戒して容易には接近しない親鳥のうちの雄が、羽の黑白だんだらと、後頭や下尾筒の花のやうな紅、しびれを切らしてパッと幹にかじりつき、どこか器械人形じみた動作で穴の口に近付いた其の瞬間、矢頃はよしと、生れて初めての鳥體撮影のシャッターは切られた。歸宅してから此の一枚だけを特別貴重品扱ひで現像して見ると、哀れやたつた五ミリのアカゲラが、蚤取眼で探すルウペをとほして、わづかに俤をとゞめてゐた。

朝食前と午前中とは、昨日の登山道と其の南方と、日野屋林の一部とを見て歩いた。躑躅園で晝辨當をつかつてからの午後は、日野屋林の殘りの部分と淺間神社附近とを眞夏のやうな陽光に照らされながら、四時頃まで巣を求めて歩きまはつた。

十五種廿三箇の巣を見た事にはなつてゐるが、今ではもう記憶が大分薄れてしまつた。だから比較的鮮明に殘つてゐる印象だけを擧げる事にしたい。

登山道と籠坂道との分岐點、早朝の冷めたく澄んだ空氣をふるはせて、一方ではキビタキが歌ひ、他方ではマミジロが鳴く。間を置いて遠く響き、倏忽の間に消える其のマミジロの絶妙な聲を、まるで釣り出すやうに右手の人差指を突立てゝ、山梨縣の鳥の大家中村幸雄さんが「一聲!」と云ふ。さう云はれると其の一聲が、實際貴重といふか有難いといふか、何れにもせよ、今は亡びて久しい山祇(やまずみ)や森の妖精(アマドリヤード)の呼聲のやうに聽こえるから不思議である。キビタキは朝まだ暗い杉の森林にゐて、折々金色の矢のやうな胸をひらめかせながら、あの得も云へぬクラリネットの清明(クレイル)な歌聲を投げてゐる。

ハイタカの巣は陰氣な森林の、樅だか赤松だかの梢に近い高みにあつた。中西君が幹をよぢ登つて、上の方から卵の數や其の色合を大きな聲で報告する。夫婦の鷹は威嚇するやうに森の上を飛び廻りながら、鋭い聲を上げてゐる。私は鳥の姿を見て置きたいと思つたが、それは遂に私の双眼鏡へは入らなかつた。しかし其の森林にはコアツモリサウが夥しく生えてゐて、ちやうど花の盛りだつた。私はハイタカの姿を追ふかはりに此の小さい蘭科の草を採集した。

森を出ようとする時に、並んで歩いてゐる兵太郎が何かを拾つた。そして傍にゐたNさんに其の眞白な小さな拾物を見せながら云つた、

「これは藥になりまさあ」

Nさんは暫らく此物と兵太郎の顏とをかたみ替りに見てゐたが、やがて

「これは何か鳥の頭だよ、兵さん」と氣の毒さうに云つた。彼はキツツキのらしい頭骨を拾つて、それを菌類のツチガキと錯覺したらしいのである。

「あゝ、さうか。どうも變だと思つた」と兵太郎はにや／＼笑ひながら云つた。

「科學知識」のF君が

「此道を少し行つたところに、コルリの巣の有る事を昨日見て置きました。行つて御覽なさいませんか」と私にすゝめる。それでトラツグミやクロツグミの巣を見に行く一行を後から追ふ事にして、私はF君と一緒に日野屋林の中の小徑を左へ入つた。

巣はぢき見つかつた。F君は一行に追付きに行つた。私は卵と雛との撮影にかゝつた。寫しながらどうも雛が苦しさうに身をもがくので變だと思つてよく見ると、未だ孵つたばかりの體に山蟻の群が食ひついたり、這ひ廻つたりしてゐる。未だ開かない眼瞼の上などを歩いてゐるところは、ゾッとするやうな厭らしい光景だつた。そこで丹念に蟻を潰しにかゝつた。近くでは親鳥が盛に警戒の聲を放つてゐた。私は道の反對側にカメラを据ゑて、あはよくばもう一枚鳥の生態寫眞を儲けようと骨を折つたが、今度は自分の方が根負けして徒勞に終つた。そのため遂にクロツグミもトラツグミも見るに到らなかつたが、小鳥の雛の敵に山蟻のある事を知つたのは飛んだ見つけ物だつたと、今でも思つてゐる。

「そら、見えるでせう、白い眉が。雄ですよ、あれは」とK伯爵が聲をひそめて云ふ。日野屋林もかなり奥まつた林内の、マミジロの巣と抱卵中の親鳥である。

目測で十五センチもあるかと思はれる巣を、一本の木の枝の分れ目と、其處へぶら下つてゐる朽木の先とに巧に懸けて、前後にはみ出した頭と尾、マミジロの雄はじつと卵を抱いてゐる。ほのぼのと明るい新綠の林の中、水底のやうな柔かな光の中で、冗談を知らぬ鳥といふものゝ此のまじめな、此の眞劍な樣子は、深く人間の心を動かさずにはゐなかつた。

若しも自分一人ならば、私は此處にじつと身をひそめて、まる一日此鳥夫婦の生活を見てゐるだらう。又若しも誰かゞカメラを餘り近寄せなかつたならば、あんなに早く飛立つてしまひはしなかつたらう。慰み(パスタン)といふ事を知らない常に眞摯なあの鳥が。

「あなたは今日に生きる若い婦人として職業を持つて居られる。その勤め先で、あなたの植物や鳥へのまじめな愛が揶揄される。そしてあなたは此會で初めて逢つた私にそれを訴へる。あなたは眞摯です。そしてあなたが眞摯ならば、それを冷やかす男達は當然不まじめだと云へるでせう。

若しもあなたが其の揶揄を笑つて濟ます事が出來るならば、私は最もそれを採ります。しかし若しもさう出來ないならば、あなたは今後同僚の男達の前で、あなたの愛する物についてはは

口をつぐむべきです。

あなたに萬一未來を約した男性が有るとして、それをあなたが正直に同僚達へ打明けたとしたら、あなたが善良にも期待してゐた祝福を受けるどころか、暗默の不滿をこめた彼等の眼つきなり態度なりは、揶揄以上にあなたに辛いものでせう。

吾々の日常の言葉で云へば、それは嫉妬です。熱情を傾ける事の出來る對象を持つてゐる者に對する、持たない者の或る隱微な感情です。

人間には我人共に嫉妬を超す可能性の有る事を知らなければなりません。これは多分惡德ではありますが、だからと云つて、此世から嫉妬が影を消す時はないでせう。

あなたの訴はもつともであり、あなたの態度は眞摯です。それで若しも倘私にして云ふところが有るとすれば、其の態度の上に出よといふ事です。あなた自身の優しい喜びと可憐な惱みとの上に、君臨の爲の賢い一歩を進めよといふ事です。」

歸りの汽車の中で、私は同行の一人の可憐な娘さんにこんな意味の事を云つた。

灰のクリスマス

（霧ヶ峰と其のヒユツテとを愛した人々に）

庭の冬木立の枝を透いて、十二月の日光が明るく射しこむ朝の部屋。その室内の清潔なひつそりした空間や、白堊の壁の隅々で、むかし馬槽（うまぶね）に生まれた人の誕生日をことほぐにふさはしい素朴な飾りが、さつきからちら／＼と火花のやうに光つてゐる。

金や銀の紙貼りつけた小さい星、小さい鐘、さては十字架。子供の幼い手によつて一年の間丹念に造り溜められ、今日、ほそい絲をもつて五彩の花綵（はなづな）に吊るされた、さうした數々の古い表象（サンボール）が、煖爐の熱氣からおこる對流のための室内の空氣のわづかな動搖にも感じて、無心に、

やさしく煌いてゐる。

ゆかりある日の、朝のひとゝきの此の平和よ。今蓄音器から鳴り止んだバッハのオラトリオの詠唱が、未だ耳の底にその餘韻をのこしてゐる。私は靜に珈琲の碗をとりあげる。だが心は重い。霧ケ峰のヒュッテが燒けたのだ。つい一日前のきのふの朝、高原の雪さへこほる夜のひきあけに火を發して、救ひも無しにあのヒュッテが燃上り、燒け落ちた。

ゆふべ、クリスマスの前夜、その悲報に初めて接した瞬間には、たゞ啞然とするより外はなかつた。百度の「何故？」に對しても百度ながら答は無く、たゞ「何といふ事をしたんだらう！」が空しく幾度も繰返された。それが今朝の目覺めには、或る宥めやうも無い遺憾、何ものへといふあてても無く、それでゐて無限に深い怨みに似た感情と變り、そして今では、もう跡方もなくなつたであらう思ひ出の建物に對する愛惜と、其處を生活の根據、樂しい山の家庭として暮らして來た友人と其の家族、わけてもあの小さい子供達と、彼等の若い母親との絕望的な落膽に對する限りない同情が、靜に後から後からと流れ出して、悲しく私を浸してゐる。

すでに幾たびの夜每の夢に、あの可憐な靴たちが、霧ケ峰の雪の山坂を越えたことか！ 兄の休暇の日を待ちわびて、すでに幾たび小さい指が折り數へられたことか！ 兄、それも尋常

一年生。その幼い兄を頭としたいとけない弟妹たちが、楽しい、賑やかなクリスマスやお正月を、父母と共に、雪に粧はれた彼等の「山のお家」で暮らすといふいたいけな望み、喜び、かつは願に満たされながら、下の町で……

私は机の上のノートを引寄せて、綴るともなく綴り、韻を合せる、

C'est aujourd'hui
le vingt cinq décembre,
et pour eux, et pour lui
C'est Noël des cendres……

あゝ、灰のクリスマス！　抑もどんなドゥビュッシーが彼等のために、また別の「もう家の無い子供等のクリスマス」を書くのだらう？

★

ほろにがい杜松の香、山中に湧く甘美な鑛泉、あの中部佛蘭西の古い美しい火山地方カンタ

ルにも、捜せば道は幾すぢも通ふがやうに、山々に雲の群れ立つ信濃の國で、まだ見ぬ土地に憧れて行くお前のために、夏草の霧ヶ峰とそのヒュッテへの道は幾つかある、七月の晴れやかな晝下り、睡氣をさそふ武藏野の樫の樹蔭に洗濯ざぶざぶ、「オーヴェルニュの歌」を口ずさむ妻よ！

中山道和田峠からお前は行くか。それならば道は鷲ヶ峰の中腹を捲いて、遠く西から南へかけ、炎と燃える夏空の下で鬱々と瞑想してゐる日本アルプスの大觀こそはお前のものだ。

それとも古い男女倉越をお前はとるか。長い長い落葉松林をつらぬく道が、その樹脂のテレビンの香ですつかりお前を浸してしまふだらう。

いづれにもせよ、綿菅の白い穗波が涼しく搖れる八島ヶ池や鎌ヶ池、ところどころ樹蔭をつくるやまはんのきの茂みから、甲蟲の微吟が洩れるその濕原のふちをお前は通る。やがて赤や黃や紫に花咲きみだれる夏草の中で野鶲の鳴いてゐる緩やかな起伏。そして目ざす霧ヶ峰は、暗い御料林の澤を越えたつい向うの高みなのだ。お前の腕は途々手折つて來た花の束でもう一杯。お前の耳には高原の靜寂を測り知れないものとする鳥達の歌が詰まつてゐる。

瀧ノ湯溫泉鄕・湯川・大門街道と道をとつて、霧ヶ峰をその東から試みようとお前はいふ

か。何といふ野望だ！　その暑い、長い、苦しい登りは、先づお前の腿脛（ふくらはぎ）を引釣らせ、襯帶をゆるませ、呼吸を奪ひ、ついには心臓を麻痺させてしまふかも知れない。だが若しもお前がその車山の登りに成功すれば、比例を縮めた日本のオーヴェルニュ、信濃中央高臺の中でも、最も眺望に惠まれた山頂の一つに立つ事になる。未だ幾らかは殘つてゐる青春の思ひ出に、一度は遣つてみるがいゝ。もんぺに結ひつけ草履、經木眞田の鍔廣帽子に白木の杖。ほつれ毛を碧落の風に吹かせて東を見れば、あゝ眞晝の夢のやうに薄青くかゞやく大氣を湛つて横はるのは、私の愛の蓼科山と其の歌だ……

だがもつと當り前な人はもつと道理に叶つた道を選ぶ。言はずと知れた、上諏訪から角間澤に沿つて登る道だ。お前は池のくるみから、或は霧ノ河原から、あの高原の一角へ顔を出して、其處に突如として現れる青草原の廣袤に魂を奪はれてしまふだらう。

★

本當に霧ケ峰の野山のあの出現を何と云はう！　それは見るたびに新しく胸を打たれる光景

のひとつだ。地形上強ひて比較を求めれば美ケ原が最もこれに近い。海ノ口から登りついて見遙かす野邊山ノ原にも或類似の點が無くもない。然し霧ケ峰といふ此の高い廣がりには、一つの全く獨特な性格がある。それは悠久の天の下によこたはる大地の、女性的な、豊麗な、甘美な胸だ。あらゆる起伏が優美で、打解けて、その晴やかな高さと廣袤とで吾々をいきいきさせながら、いつもおつとりと包容的で、人間のどんな夢をも抱きとつたり育んだりする程にも母らしい。周圍からぬきんでた高原上の、丘と濕原との單純な大きなプロポーション。咲く花か膨滿する雲かのやうに盛り上つた、大地そのものゝ量と量との結びつき。霧ケ峰は山といふ自然の彫刻の中で、かのアリスティード・マイヨールの滾々として盡きぬ滋味のある女人像を想はせる。

雲は其處でのもつとも美しい看物だ。誰かあすこでそれを描いたり撮影したりする衝動を感じなかつた者があるだらうか。いや、たとひそんな事はしないまでも、あの高原のほんのり熱い草の中か岩の上へ寢轉んで、遠い凝視と深い瞑想とに吾々を引き込む彼等夏雲の流轉の姿を、君も私も幾たびか樂しんだことは確かだ。

或時それは西のはう、遙か安曇野の空から流れ出した火箭雲だつた。私達はヒュッテで開か

れた夏季講習會に列なつて、其日藤原博士の山の氣象に關する講義を聽いてゐた。窓の外で頰赤の歌ふ高原の午前、或る洗練された、智的な、靜謐な空氣が此の山の家の一室を支配して、講義の進むにつれ、壁へ貼られた大きな白紙の上へ、氣溫や濕度の變化をあらはすグラフが、爽かな綠や赤の色チョークで次々と象徴的に描かれていつた。

　やがて講演が終つて人々が席を立つた時、その部屋の西の窓いつぱいに漲つた八月の空の紺碧のなかに、美しい模樣をすらすらと描いて擴がつてゐる一種の雲がみんなの眼を惹いた。二時間近い講演に注意力を集中した爲め幾らか疲勞を覺えた一同の神經や筋肉は、今やひろびろした戸外での恢復を求めてゐた。それで雲をきつかけに皆ヒュッテの前の草原へ出て、實際に其の雲を眺めた。空氣の混濁した都會地では到底見ることの出來ないやうな、清らかな、氷のやうな白さを持つた、見事な卷雲の火焔雲だつた。それは鹽尻峠の少し北寄りの方角から噴き出して、途中幾度か放膽な搖曳を繰返して火焔の模樣をゑがきながら、其の巨大な舌の先を吾々の頭上まで屆かせてゐた。一碧の大空に描き出された自由自在な雲の流線と、氣も遠くなるやうな其の純潔な濃淡の白。折柄そよ〳〵吹いて來る初秋のやうな風。强淸水(こわしみづ)の濕原で忍びやかに歌つてゐる小鳥の聲。身にしみじみと暖い太陽。さうした靜寂な夏の眞晝の高原でみんな

と一緒に雲を讃美しながら、何時の間にか子供心に歸つてゐるといふ事。其等すべてを忘れる事の出來ない樂しい記憶として今もなほ心の片隅に大事に持つてゐる人も、幾人かは有る事と私は思ふ。

心よ、思ひ出せ！　さうした樂しい記憶をもう少し。此の夕べ私は詩に渴いてゐる……

★

或年の八月に雜誌「山」が主催した五日間の講習會。私はそれに二日遲れて、第三日目に單身鷲ケ峰へ登つた。それが爲に私の聽く事の出來たのは、氣象學と、植物學と、本邦登山史の三科目だつた。

毎日、賑やかな朝の食事が濟むと、十時頃から靜かな別室での講義が始まる。講義は二時間ぐらゐ續く。それが終ると晝餐になつて、午後は參會者一同が揃つて野外見學をするか、自由行動を取るかする事になつてゐた。然し遲れて一人着いた其日、私は未ださうした規定を知らなかつた。それで午後みんなが鎌ケ池方面へ行く事になつてゐたのに、私一人は晝飯を濟ます

と直ぐにカメラを提げて、蛙原からカボッチョの方へさまよひ出た。

その蛙原の高みから私は見たのだ。向うの丘の中腹を覗き石の方へ、巡禮のやうな長い列を作つて進んで行く一群の人々のあるのを。私は望遠鏡を取上げた。それはまさしくあの濕原の池を訪れに行く講習會の一行だつた。私は聲を上げたり手を振つたりした。仲間に加はりたかつたのだ。然し私達を隔てゝゐる空間は餘りに大きく、糸のやうな隊伍は次第に遠く草原の中へ霞んで行つた。私は諦めて、高原の風に吹かれながら「タンホイザー」の巡禮の合唱を歌つた。

其話を後になつて聽いて私の爲に氣の毒に思つたのが、當時は未だ近づき後間もない黑田米子さんだつた。其人が主催者石原巖君の他に男女三人の同行者を勸誘して、會も終るといふ五日目の午後、彼等にとつては二度目の鎌ケ池へわざわざ私を案內して呉れた。

覗き石から先のあの一層廣大な風景を初めて見て事々に嘆稱の足を停める私に對して、あんなにも辛抱强くつき合つて呉れたり、優しい心遣ひを示して呉れたりした其人達の親切を、どうして忘れる事が出來るだらうか。中でも黑田さんは、――後で知つたのだが、――明日からは又忙しい仕事の始まる東京へ其日の夜行列車で歸らなければならないのだつた。私の爲にか

なり時間をとつた池からの歸途、夫人は澤渡(さわたり)の上のあの急坂を一足先へ全速力で登つて行つた。そして私達がヒユッテへ着いた時には、もう大きなルックザックを背負ひ、土産の植物の包を小脇にかゝへて、令孃をせきたてながら、別れの合圖にピッケルを振り〳〵、夕陽にまみれた高原の草の中を遠ざかつて行つた。

それは完全に自發的な友情(アミチエ)と、その犧牲の行爲だつた!

★

至佛や淺間の伊吹麝香草とならんで、武藏野の私の庭に東山の同じ草がある。それが五月も末となれば、鉢からこぼれた長い枝の先に薄紫の密穗花をつゞる。さうすると此の高原の植物の異國的な芳香を嗅ぎつけて、近所のひめじよをんの草叢から、平野の蝶達が黄や水色の翅を翻して庭の中へ舞下りて來る。

この伊吹麝香草の鉢の前に佇むと、私はぢきにあの東山や蝶々深山の晴やかな頂へ立つた氣持になるのである。眼の前を線にそよく一筋のよい山稜が走り、右には梓科、左には美ケ原の

連峰が、眞夏眞晝のきらめく面紗を懸けて橫はつてゐる。私の踏んでゐるのは最早や平地の柔い土壤ではなくて、がつちりと硬い岩石であり、額を吹くのは二千メートルの高所の風の流である。向うではやまははこや薄雪草の群落が深い銀いろに波立つてゐる。梅鉢草の黄ばんだ白い點々も搖れてゐる。此處では伊吹麝香草が紅紫色のこまかな花でびつしりと熔岩や礫土を埋めながら、爽かな匂を揮發させてゐる。

幾年を育てゝ來た一鉢の紀念の山の植物、古い手帳に挾まれたまゝで今では色も褪せた一輪の花。それは吾々にとつて「心の山」の懷しい追憶のよすがとなると同時に、又却つて返らぬ盛福の日を苦しく思ひ起させる機緣ともなるであらう。愛のかたみと、斷ち難い過去の羈絆。さうした物を持つ事が果して幸福であるか否かは、人それぞれ異るものであるに相違ない。

しゝうどの原で野鶲（のびたき）が鳴いてゐる。
乾草がよく乾いていゝ香を立てる。
小屋の日かげで一羽の蝶が
破れた翼を疊んだりひろげたりしてゐる。
もうぢき人々も思ひ〳〵に山を降るだらう。
やがて突然、
秋が最初の嵐を連れてやつて來るだらう。

★

ヒユツテ入口の屋根を支へる太い柱、その柱の土臺になつてゐる幾つかの大きな卓狀熔岩。私は好んでそれへ腰を掛けに行つたものだ。煙草を吸ひに、本を讀みに。だが大抵はぼんやりと、高原の美しい雲の姿や、のびのびした草原の起伏に眼をさまよはせるために。

朝は日向ぼつこ、晝間は蔭と無量のそよかぜ。日の暮には、あらゆる草をいき〳〵した綠に

濡らす夕日の流れと、ほのぼのと匂ふがやうに赤らみながら、やがて黄昏の奧に沈んで行く槍や穗高や乘鞍ヶ岳。

人はそこを訪れては又去つた。靜寂に明けては暮れる夏の每日、落葉松林のふちを辿り、白いしゝうどや、赤いしもつけさうの原を横ぎつて。私はいくらか人を宿する者の心になつた。餘り度々人を迎へてはまた見送るその入口で。

そして長い滯在の間の、最も輝かしい或白晝に、石の上に甲羅干していつまでも動かなかつた一匹の蜥蜴から、「無爲」の何たるかを學んだのも其處だつた。

★

空氣ランプに照らし出された夜の茶房。そのランプの單調な、しゆう〳〵いふ音の中で、蓄音機から流れ出るベートーヴェンの「ロマンス」や、ベルリオーズの「聖家族の詠唱」。窓硝子を外から叩いてゐる高原の夜の火取蛾。滯在客は卓の周圍に集まつて、思ひ〳〵に煙草を吸つたり、飲物をとつたり、賑やかな遊びの仲間に加はつたりしてゐる。

その遊びで、或晩最も夢中なのは小さい「弓」だつた。弓とは友の長男弓郎君のことで、私の大の仲善しで、その父親をその儘そつくり小さくしたやうな、律義な、質朴な、可愛い壁を出してむきになつて物を言ふ、小學の一年坊主である。

だが、今や挾み將棋がすつかり此の子を興奮させてゐる。大人を相手の勝ちたい一心から、彼はいくらか無理をする。うつ向きながら爪を嚙み、顏を眞赤にし、幼い眉根を寄せて盤面を睨んでゐる。彼の駒は盤の上を、もはや必ずしも眞直ぐには、つまりこの遊びが要求する規則の通りには動かない。それは任意の場所で轉向する。それは空間を飛行して、好都合な地點へ着陸しては敵の駒を挾みとる。

「ずるいよ、ずるいよ！」と誰かゞ叫ぶ。そして遂に、片隅の補助椅子に腕組をしながら見てゐたその父親の、

「弓、又孫悟空を始めてはいけないよ！」

といふ、笑を嚙殺した一喝に遭つて逼塞するまで、その奇抜な戰術、弓にあつて餘りにも著名なゲリラ戰術は續くのだつた。

私は思ひ出す、或時、彼の挾み將棋の相手は立派な官吏だつた。子供に向つても、飽くまで

合法行爲を期待する紳士だつた。その相手に小さい「弓」が例の飛行戰術を以て對抗した。紳士はとうとう遺憾の念を面に現はして駒を投げた。それはグライダアを視察に來て此處に滯在してゐる航空官だつた！

★

ヒュッテの前を流れる水、その强淸水の廣い低地一帶を、夏こそ彩る百花の絢爛。每日愛と讃嘆との眼をもつて眺め暮らしたそのアラベスクの、妙なる紋樣の一々を私は描寫すべきだらうか。

朝な夕なに汀へ下りては水を浴び、やがて近くの落葉松や垣根の杭に飛移つて、そこで淸明な夏の幾節を歌つた頰赤、びんづい、小葦切。私として彼等を閑却できるだらうか。

だが植物にせよ、鳥にせよ、叉雲や霧の美觀にせよ、莊麗な夜空にせよ、將叉霧ケ峯の廣袤自體にせよ、それらは今なほ有りもするし、今後と雖も更に有ることをやめないだらう。然し吾々の心の中のあのヒュッテ、そこで吾々の夏の幾日、冬の幾日が、最も充實して美しく、か

つは好意と歌とに滿たされて潑剌と生きたあのヒュッテ、高い窓を持つその廣い涼しい食堂に、暗い廊下に、吾々の足音が深く反響した山の上のあのヒュッテ、相知るや誠に拙く急いで結ばれ、然し別れて後こそ徐ろに味ひ返されて一層鞏固になつた數々の友情の、その媒をつとめた遠い遠いあのヒュッテ。あのヒュッテ霧ケ峯は今はない。

とはいへ時あつて吾々をほゝえませ、また泣かしめる思ひ出こそは、時の彼方に横はつて、愈々淸く美しくなる思ひ出こそは、吾々のヒュッテを不朽にする。

やがて風も柔かな高原の春、雪の下から灰が現れ、黑焦げの柱が現れ、最後に礎の熔岩が現れてその滅亡を斷言しようとも、吾々の衷で彼の善意が、その歌が、もはや不滅の物となつてゐる以上決して泣くな！

神流川紀行

もう二十年以上も前になるが、或年の五月、その頃の文學上の親しい友人某君を前橋にたづねた事があつた。上野を出た汽車が深谷や本庄を過ぎて新町で停まつた時、さつきから左側の窓の往手に見えはじめて、今では風景の正面に一際大きく目立つてゐる二座の美しい乳房のやうな山がどうも氣になつて仕方がないので、ちやうど眼の前のプラットフォームに立つてゐた一人の若い驛員をつかまへて、その山の名を聞いたことがある。

「あれですか」と、その驛員はうしろを振向いて小手をかざしてゐたが、「あれは秩父です」と

答へた。

なるほど、秩父と云へば云はれない事もあるまいが、何だか戸山ケ原を武藏野だと教へられでもした時のやうな、變にそぐはない、齒がゆいやうな氣がして、汽車辨當の爪揚子をやけに嚙みつぶした事だつた。其頃の私には、まだ地圖を持つて旅行する習慣が無かつたのである。

そんな二十何年も前の塵にまみれた思ひ出を心になつかしく呼起しながら、昭和十三年一月の或朝、私は高崎線本庄驛のプラットフォームへ降り立つた。あの時秩父と教へられた山、そして今では名も知つてゐれば明日のチャンスでもある御荷鉾山は、青玉のやうに澄んだ冬の朝の天の下、玲瓏と鳴るかと思ふ雪の大淺間を遙か右手の上信國境の空に仰いで、武州兒玉郡の雜木林や桑畠のぽうつと暖い霞の果てに、その東西二峰の圓錐形を姉妹のやうにならべてゐた。

毎年元旦をむかへると、新らしい一年間の仕事を自分で祝福するつもりで、普段は欲しくても我慢してゐるやうな本を奮發して買ふのが例になつてゐる。今年もそのつもりで暮のうちから見當をつけて置いた本が二つ三つあつた。其の一つはアメリカの或る大きな農場に住んでゐる人の書いた日記體の自然觀察記で、豐富な內容を持つた、見るからに自分の物にしたくなる

やうな本だつた。それを手に入れるのを樂しみにしながら三ケ日の濟むのを待兼ねて書店へ行つたら、もう誰かに先を越されてしまつた。そこで私は考へた。この失望の穴埋めに、何處か近いところへ今年最初の小さい旅を試みようと。なるほど、他人のすぐれた體驗記錄を讀むのは善い事だ。だがどんなに貧しくても、自分の體力と叡智とをはたらかせて野外で獲得した知識が、富が、必ずしも机上で讀む某々の書物以下の價値しか持たないだらうとは信じられないと。

それで私は此處彼處と物色した揚句、神流川の谷を見る事と、出來たら御荷鉾へ登る事とを考へてゐた。さうすると忽ち、もう其の山頂からの廣々した眺めや、神流川や三波川の溪谷に沿つて露出する美しい岩石や、蜿蜒二十里に近い十石峠街道や、その街道を點綴する未知の部落や、暖い南面の山腹に遊ぶさまざまな冬の小鳥や、およそ此の旅から酬ゐられさうなあらゆる看物が後から後からと想像の眼の前に展開するのだつた。

私は先づ四五本のフィルムを仕入れ、一本の鐵槌を用意した。それから岩石や地質の參考書を調べて地圖へ書入れをしたり、大急ぎで景觀地理學の本をおさらひして頭へ詰込んだりした。さうしていよいよ出發も明日の早朝といふ時、遠足の前夜の子供のやうに、膨れたルックザッ

クを大事さうに枕もとへ安置して私は寢た。

午前九時少し過ぎに停車場前の廣場を出たバスは、四十分ばかりで終點鬼石町へ着いた。初めのうちは、本庄から眞西へ藤岡町へ通じる平野の中の坦々とした大道を行くので、うしろに砂塵を卷いて疾走するバスからの眺めも單調だつたが、途中から左へ切れて此の平野の袋の底へ神流川が開口してゐる邊りまで來ると、流石に風景の面目もあらたまつて、がたがたのフォードが乘込んで行く世界は、もう金と綠靑と胡粉とで彩色された新年のめでたい山水畫だつた。

バスを降りて、打水の氷つた午前十時の鬼石町の本通りを五六歩行くか行かないうちに、ところどころで起つてゐる小さい旋風に氣がついた。から／＼に乾いた往來を摺鉢大の塵の渦がいくつもいくつも、まるで生き物のやうに右往左往してゐるのである。これは多分、周圍を丘陵と山地とで圍まれた小規模の地溝とも考へられる凹地の中央に、しかも北と西には直ちに山を背負ひ、南東に神流川のやゝ幅の廣い曲流點を持つ河岸段丘上の町鬼石附近の地形と、其處

で衝突し混合する氣流の複雜な變化とに由來するのではないかと思はれた。其夜万場で此のつむじ風の話をしたら、宿の女が「鬼石の氣違ひ風つて有名でございます」と云つてゐた。

序でに、此の町では正月の門松を東京のやうに地面へは立てないで、大抵軒下の柱の中程へ枝のまゝ打ちつけてあるのが私には珍らしかつた。もつとも或る銀行と、もう一軒大きな問屋のやうな家だけは東京と同じ遣り方だつた。

私は名高い三波石(さんばせき)は神流川の支流三波川の谷で見られるものとばかり思ひ込んでゐた。ところが町なかに立つてゐる道標によるとどうもさうでは無いらしいので、町を西へ出外れた鬼石橋といふ橋の上で、ちやうど通りすがつた豆腐屋のお爺さんをつかまへて訊くと、「此の街道を一里ばかり上(かみ)へおいでなさると左手に釣橋が架かつてゐます。其の橋の下が三波石です。三波川の方へお入りになつては、却つてあんな石は見られません」といふ至極親切な、物の分つた返事だつた。それで私は三波川を溯つて途中から石神峠越えに神流川流域へ出ようといふ最初の計畫を變更して、此の長い街道をすつかり万場まで歩いて行くことにした。

神流川に沿つて其の左岸を奥へ奥へと行く十石峠街道は、終始美しい溪谷の眺めに惠まれた道であると同時に、旱りの續いた後では時々トラックやバスの砂塵に惱まされる道でもあつ

た。バスが鬼石から坂原や万場を中繼ぎにして十一・二里奥の新羽まで通つてゐるのだから、此の谷唯一の物資運輸機關でもあるトラックが、木材や木炭や雜貨の類を山のやうに積上げて疾驅するのも當然かも知れない。せめて道幅がもう少し廣いとか、或は自動車道路がもう少し上を通つてゐるとかすればいゝのだが、何にせよ名だゝる堅い岩石の斷崖を削つてつけた一本道の街道だから、ゆつくり景色を見ながら歩かうとすれば、少しは自動車の埃を浴びるのも止むを得ない。

　讓原といふ部落の中を抜けた時、其處だけは自動車の利かない脇道を通ることが出來たので埃も無く、谷や道路に面した村の家々の石垣が、まるで三波川層の岩石標本を積上げたやうな美觀を呈してゐた。私は未だ先へ行つても見られるだらうと思つて、其の半透明の白、黑、桃色、肉色、綠、青その他の縞模様や斑紋から成るモザイクのやうな多彩な石垣を、とう〳〵寫生も撮影もしずにしまつたが、其後これほど綴つた場所を遂に見る事が出來なかつたのを今でもひどく殘念に思つてゐる。

いはゆる三波石の溪谷は、鬼石から約一里のあひだ南北の方向をとつてゐた神流川がぐるりと東西に向きを變へる地點の、今里といふ部落の附近から始まつてゐた。其のあたりは一帶の急傾斜の山脚が兩岸から迫つた暗い感じのする谷間で、高い道路から見下ろすと、美しい色や模樣をした大小さまざまの岩石が、水量の減じた冬の溪流に磊々と横はつてゐる。

水は谷底の岩や砂礫のあひだを一筋の靑い糸のやうに流れてゐるが、その水に腰を濡らした岩石のまはりには一様に眞白な氷の緣縫がレイスのやうに附いてゐる。此の美しい岩と水との間から時々「ヴィッ！ ヴィッ！」といふカハガラスの鋭い聲が聞えて來た。谷が全く靜かたので、垂直距離にしてもかなり有る此の道路の上まであの鳥の早春の第一聲が屆いて來たものとみえる。

やがて豆腐屋のお爺さんの敎へてくれた釣橋といふのが、街道の左下へ現れた。これは谷の右岸の埼玉縣側へ通じてゐる橋で、登仙橋と書いてあつた。後で見たのだが此の橋から尙三四町ほど先にもう一つ叢石橋といふ簡單な釣橋があつて、此の二つの橋の間の谷が有名な三波石の勝地になつてゐるらしい。岩石の露出では叢石橋附近の方が優れてゐると思はれたが、橋畔に一軒安つぽい料理屋のやうな旅館のやうな家があつて、折柄白粉を塗つた女が若い男とキャー



夕日を浴びて歸る

キャーいつて街道狹しと羽根をついてゐた。こんな樣子だと此處もやがて相當俗化するのではなからうかと、場所が日本地質學の搖籃の地と呼ばれてゐるだけに惜しまれた。よく調べた譯ではないから果してどうかは斷言出來ないが、歩きながら覗いたところでは、前に言つた今里の部落附近から登仙橋あたりまでの間に、却つて一層多種類の岩石の露出と、谷そのものゝ美しさが見られるのではないだらうかといふ氣がした。

兎に角私としては登仙橋口から谷へ降りた。釣橋を埼玉縣側へ渡りきつた所で、小さい發電所の前から右手の崖へ刻みつけられた小徑を傳はつて降りて行くのである。此の小徑の中ほどに現れてゐて、それを吾々が踏まなければならないつるつる滑る暗綠色の大きな岩盤は、絹雲母綠泥片岩らしかつた。

谷の方向が東西へ向いてゐるので、太陽が南中する時刻にも拘らず河原は寒い日影だつた。しかし下流を扼してゐる山の腹へは麗らかな日が當つて、あんな高い山頂近くに住居野らしい平和な部落が見え、上流は此の深いV字谷を形作る狹間の奥に、御荷鉾のつゞきの雨降山が眞青な空の下で褐色にかゞやく圓い頭をもたげてゐた。

さすがに此の谷の岩石は見事だつた。あらゆる植物が冬枯れた今の季節では、其處は全く石

ばかりの世界、天然の石の庭だつた。しかも其の岩石といふ岩石にはそれ〴〵箇有の色彩がまつて、向うの方、下流の日の當つたところでは、斷崖の岩と云はず水中から突出た石と云はず、すべてが谷の走向のまにまに大きな弧を描いて、花やかな虹色を噴いてゐた。

私は此處で紅簾片岩、角閃綠泥片岩、絹雲母綠泥片岩、綠簾綠泥片岩、石墨絹雲母片岩、石墨石英千枚岩のやうな片岩類と、各種のチャートを少しづゝ採集した。岩石學の充分な知識があつて、尙時間に餘裕があるならば、此處での一日は確かに豐富な收獲をもたらすものに違ひないと思はれた。

谷底の寒い河原で辨當をつかつたり、岩から岩と傳はつて撮影をしたり採集したりしてゐると、若しも出來るならば日の暮まで此處で遊んでゐたいなといふ氣がした。そのうちには西へ廻る太陽が此の谷間へ洪水のやうな光を注ぎ入れるだらう。さうすれば只さへ美しい此の岩石の世界が、どんなに素晴らしい靜寂と華麗とで私を圍んでしまふか分らない。だが今日ぢうに万場まで尙五里近くを歩かなければならない私は、五六月頃の再遊を心に期して三十分ばかりで其處を去ると、崖を攀ぢ釣橋を渡つて、ふたゝび十石峠街道上の孤獨の旅人となつた。

下久保、保美濃山、前野、稲村、矢納などといふ部落が、或は南面の暖かさうな山腹に、或は水に臨んだ兩岸に、約一里のあひだ其の繪のやうな聚落風景を見せてゐるあたりでは、神流川も至極のんびりした谷形をとつて、兩岸の山々は寢ころび、廣々した青空に白い雲は浮んだり消えたりし、其の街道をぶらぶら行く心は、さながら春の日永を物も思はず責任も無しに、うつゝに睡つてゐる時のそれだつた。ときどき路傍の家の屋根で黃鶺鴒が鳴く。鷄が眞晝の閑をつくる。水邊からミソサザイの囀りが聽こえる。もう御荷鉾層の地帶に入つたと見えて、眼にとまる岩石の色なども大分變つて來たやうな氣がする。

やがて此の牧歌のやうな風景も終つて再び兩岸が山になり始めた所で、私は今來た道と其のあたりの部落とを、返つて撮影した。其處は出淵といふ地名のところで、路傍の或る岩から缺いて採つた標本は、後で調べたら赤鐵硅岩だつた。

明朗な保美濃山から一里ばかりで、暗い日影の部落坂原へ着いた。此處は鬼石から出る乘合バスの終點で、又別に万場との間に第二のバスの定時往復がある。道をはさんで兩側に古い家並を持つ小さい部落ではあるが、神流川筋では万場に次ぐ物資の集散地らしかつた。正月の盛裝をした女や男が道ばたの僅かな日當りにたゝずんで、靜かに鬼石行のバスを待ちながら、其

處を通る私のルックザック姿を默つて見てゐた。
坂原を後にすると道は次第に登りになつて、左手の溪谷が深くなつた。對岸からほそぼそと合して來たのは、城峯山からの山道であつたらう。やがて山鼻の堅い巨岩をくりぬいたトンネルが現れた。道はうねうねと曲りくねつて、自動車に注意を與へる建札が行く先々に立つてゐる。神流川の谷は鬼石から万場までの間、此のトンネルを中心に前後二三町の間が最も幽邃な趣を呈してゐるやうに思はれた。
扇屋といふ小さな部落を過ぎ、太田部橋といふ新らしい釣橋を左に見、對岸三〇〇米の高みに人煙を上げる相見部落の白壁を小手をかざして仰ぎながら、漸く傾いて來た冬の日ざしを正面から浴びて道行く私は、そろそろ旅の哀愁と、その甘美さとほろにがさとを味ひはじめた。往手にはのけぞつたやうな東御荷鉾が、空の青と夕日の金とにまみれてゐる。見下ろす谷には赤、白、青の無數の岩が累々と横はつて。その寒い沈默の底から時々カハガラスの聲がひゞく。私は路傍の石に腰をかけて、水筒から注いだ二杯の葡萄酒にほんのり醉つた。
こんな風にいゝ氣持になつてぶらぶら歩いて行くと、ちやうど坂原から二里、もう柏木にも程近いといふ所で、うしろから万場行のバスが走つて來た。之れを見て不圖乘つてみようかな

と思つた瞬間にはもう手の方が自働的に上つてしまつて、急停車したバスから降りた少年車掌に、私はルックザックを渡さなければならない仕儀になつてしまつた。もう大體此の谷筋の樣子も見てしまつたといふ言譯を、微醉と疲勞とが甘やかせて、勝手に採用してしまつたのである。目的地の万場まではあと僅かに一里ちよつとだつた。

こけら葺の屋根へ一樣に石をならべた農家の群が、まるで野趣汪溢する民藝品のやうだつた柏木や其の對岸の大寄を、バスの窓から感心しながら眺めて行くと、街道のまんなかに一臺の大型トラックが停車して材木を積込んでゐる。道幅が狹いので、其のトラックが動き出して何處かで躱してくれるまでは此方が通れないのである。それがいつまで經つても悠々閑々と積込みをやつてゐる。東京ならば忽ち運轉手が怒り出して、ブーブーと喇叭で催促するか怒鳴りつけるかする所だが、此處ではそんな事もなく、御無理御尤もとばかり、おとなしく、辛抱强く、永遠のやうに待つてゐる。お蔭で二十分も遲れて万場へ着いたが、其の橫暴なトラックのうしろに「理研」と書いた札の下がつてゐるのが皮肉だつた。「雨の上高地」といふ故寺田寅彦氏の紀行隨筆に、博士の乘つたバスが内務省のトラックに往手をふさがれて立往生を餘儀なくされたので、仕方無しに車を降りて、梓川の小雨の中で煙草を吸ひながら其邊に轉つてゐる岩

塊を検査したといふ條（くだり）を其時思ひ出したからである。

友達や其他の人の書いたものを讀んで、もうかなり前から其の名だけとは馴染になつてゐた万場の町も、いざバスから降ろされて其處の土を踏み、其の場所を見、其處に漂つてゐる空氣を嗅いでみると、やつぱり昨日までの自分には何の繋がりも無かつた見知らぬ土地へ來たといふ感じがするのだつた。北に御荷鉾、南に父不見（ててみえず）山と山との谷あひに細長い町並をなしてゐる此の万場といふ所。それが今夜の泊かと思ふと、警察があり、町役場があり、小學校があり、ギャレイジもあれば子供も遊んでゐるといふ、格別變つた眺めでもない世界に居ながら、旅の心は何とは無しに淋しかつた。

その淋しさをもう少し味はうと、正月も七草前の夕方らしく相應に賑はつてゐる町中の往來を誰にも訊かずに私は山屋といふ旅館を物色して歩いた。探し當てた山屋は町の西の外れで雜貨屋を兼業にしてゐる家だつた。ところが入つて行つて今夜の宿を頼むと生憎去年の暮から旅館營業を止めたといふ事だつた。仕方なしに何處かほかに宿屋は無いかと訊くと、親切にも若

者を一人つけて町の中程にある今井屋といふ古い宿屋へ案内して呉れた。此の家も氣持のいゝ家だつた。往來に面した二階の座敷へ通されて早速兩脚を投出すと、流石に一日の疲勞は感じられた。ちやうど沸いた風呂へ一番先に入れてもらつて、すつかり汗と疲勞を流して歸つて來る途中、廊下の窓から外を眺めるともう日はとつぷり暮れて、眞黑な山の上には去年の夏の思ひ出の木星がきら〳〵輝き、沈んでゆく白鳥の星座が巨大な十字架のやうに谷奥の空に突立つて、夜風の運んで來る神流川の水音が微かに聽こえた。

其夜一本の銚子を傾けた後で、宿の女の持つて來た紙へ、私はこんな腰折れを一首書いた。

父不見御荷鉾も見えず神流川

星ばかりなる万場の泊

今日も空はからりと晴れて、冬の朝の新鮮な日光が万場の町へ横ざまに流れてゐる。宿の女達が寒い寒いと云ふので今朝の氣溫をたづねると、「零下五度で御座いました。こんなに凍みる事はめつたに御座いません」と云ふ。

私の住んでゐる東京西郊の井荻では此頃午前六時の氣溫が平均マイナス七度ぐらゐだから、此處の方が暖いわけである。

石を採集した爲に却つて重くなつたルックザックを擔いで八時半出發、玄關前へ並んで優しい事どもを云ひながら見送つてくれる宿の人達と別れる時、振返つて不圖軒下を見ると、表札の隣りに「出征軍人」といふ木札が懸つてゐる。「御出征ですね」と云つたら、「今のところ未だ高崎で待機中ださうです」と、妻君らしい若い女の人が活潑に答へた。女中達は朗らかに笑ひ、姑らしい人は手を揉みながら微笑してゐる。時變下の正月の朝の、山の町での一場景だつた。

西御荷鉾への私の登路は、万場の町の東外れで橋をわたつて、隣りの生利の部落の直ぐ取付きから左へ桑の段畠の間をジグザグに登つて行くものだつた。生れて初めて一夜を宿つた其の町がだんだん眼の下になつて行く。しかし今朝は昨日の夕方と違つて全くの異郷のやうな感じがないのは、たとひ僅かの間でも其の土地を見られるだけは見、味へるだけは味つたせゐかも知れない。かうして吾々の體驗をとほして、幾多の土地が何時か國土の詩の類になるのだ。

もう澤を隔てゝ西の方には朝日をいつぱい浴びた桐ノ城やおどけ山が美しい書割のやうにす

らりと並んでゐる。未だ霧の立つてゐる神流川の奥からは叶山や二子山が次々と要塞のやうな山容をせり上げ、左手、川の右岸には、父不見が朝の大きな陰をまとつて横はつてゐる。段畠を登りつくすと岩盤を切りあけた路になり、それを抜けると愈々澤沿ひの登りになつて、往手には門ざす西御荷鉾が悠然と萱戸の胸をひろげてゐた。頂上近い其の斜面の萱を刈つて現した、あの有名な丸に大文字の模樣も見える。

徑は飯山の中腹、氣奈澤の左岸二〇〇米ばかりの高みを、仄暗い杉の植林地へ入つたり明るい雜木林の斜面に沿つたりしながら、緩い勾配と樂しい靜寂との中を登つて行く。振返ると二子山の上には何時の間にか兩神の岩峰群が鋸の齒のやうにせり出してゐる。望遠鏡で眺めると其の岩峰一面に飛白のやうに雪がついてゐる。やがて兩神の右手奥に秩父十文字峠の北の三國山も見えて來た。曾遊の山々が、愛しつゝ描く別れた昔の人達の顏のやうに、一人の私を遠くから幾らか悲しげに見守つてゐる。

うしろから山へ木を伐りに行くといふ下の部落の百姓が追付いて來たので、暫く話しながら一緒に歩いた。西御荷鉾の大文字は毎年四月七日に万場と生利の人達の手で刈つて作られるのだといふ事を其人から聽いた。頂上には不動明王の像が二つあつて、一體は南を向いてゐて神

流川筋の信徒が建てた物であり、もう一體は北向きで三波川筋の人達の建てた物だといふ事も聽いた。何となく秋川沿ひの山でも歩いてゐるやうなのんびりした道での、至極のんびりした道連れだつた。何處かで鷽が笛を鳴らしてゐた。みそさゞいも二羽見かけた。

　百姓と別れて暫くすると、路は氣奈澤の右の枝澤の詰を越えて山腹の小平地である池ノ平へ出た。茫々と枯れた山薊や大蓬の間に、半ば風化した綠泥片岩らしい岩石が美しい暗綠色をして所々に現れてゐる原である。西御荷鉾の枯草の大斜面を背にし、前は神流川の谷に臨んでゐるので、此の斜面のテラスは一見荒涼としてゐながら、今日のやうな無風快晴の日には春のやうに溫かい。其處の岩へ腰をかけて西から南へと次第に視線を漂はせれば、正面にどつしり橫はつた赤久繩山の左に、八ケ嶽が其の赤嶽、橫嶽、硫黃嶽の白熱した峰頭をならべ、遙か三國山の右のはづれには夢のやうな金峰がその水晶の稜角を光らせてゐた。

　原の東の隅には無數の鶫が餌をあさつてゐた。下の方の一ところこんもりした杉林で何か頻りに鳴いてゐるので望遠鏡を向けると、私としては初めて見るいすかの群だつた。二十羽ぐらゐは居たらうか、杉の葉の黑ずんだ綠と其の鳥の眼も覺めるやうな赤とが素晴しい對照をなしてゐた。私は胸をわく／＼させながら此の思ひもかけない看物に心を奪はれた。其處ではまた

薊の去年の實を啄んでゐる一羽のべにましこを見る事も出來た。

池ノ平を後にして尚も暫く登つて行くと一つの小さい鞍部へ着いた。小徑が二本に岐れてゐる。少し降りになる澤の詰の路を眞直ぐ奥へ入つて行けば投石峠へ、左へ切れゝば西御荷鉾の頂上から西へ出てゐる主稜へ取りつくらしい。それで後者をとつた。初めのうちはさくさくと厚い落葉を踏んで登つた。やがて周圍がからりと開けて、御荷鉾の廣い胸板を形作つてゐる枯草の大斜面へ出た。一本の細徑は此の斜面をかなり急な勾配で登つてゐる。下から見ると顯著なあの大文字と其れを取卷く輪の傍を通つてゐるのだが、餘り大きいので自分は其場にゐる癖に判らない。此の急斜面を三〇〇米近く登りきつて主稜へ出ると頂上まではほんの一投足で、露岩の上には不動尊の像が立ち、三角點の標石があり、そして全く新しい廣大な視野が私の前に展開した。

標高一三〇〇米にも滿たない芝生の山頂、その感じから云ふと御坂山塊縦走路中の或る瘤か、桂川の左岸の扇山でも思はせるやうな此の西御荷鉾の山頂は、しかし其の位置が位置だけ

に、眞冬の雪に輝く關東平野北方の山々に對して優れた展望臺をなしてゐる。

先づ忽ち眼につくのは、程近い稲含(いなふくみ)の右手奥、荒船、物見、矢ケ崎とつゞいて一段低くなつた碓氷峠の上に、まるで巨大な銀の兜を伏せたやうな淺間山だつた。妙義などは其の下で眞黒にごたごたと犇いてゐる。淺間と鼻曲山との間には遠く四阿山が見え、淺間隱しから榛名山へかけては白根、岩菅、更に信越國境の白砂、佐武流、苗場あたりが純白な翼を收めてそれと指摘され、榛名の上には大源太、萬太郎、谷川などの上越の雄峰が莫大な雪を擔つてどつしりと構へてゐる。

北から東寄りの眺めでは、群馬の野にあの優美な裾野を曳く赤城が忽ち眼につくが、雪は榛名同様その幾つかの峰頭だけにしか附いてゐない。しかし赤城の左の裾の盡きるところ、利根の谷奥を壓して横はる武尊(ほたか)は如何にも印象的である。其の右の奥に一つ眞白にぽつりと見えてゐるのは、尾瀬沼の北の燧嶽だらうと思はれた。赤城の黒檜と殆ど重なつて一層高く日光白根、その右に皇海(すかい)山、更に右手へ男體山のドームとなつて、此の九十度の視界に浮かぶ白銀の地平線は終つてゐた。

赤久縄の左、神流川の奥の空には八ケ嶽がプラチナのやうに輝いてゐる。距離がほゞ淺間山

ぐらゐなので、望遠鏡に映るその細部の彫刻が實に見事だ。それからずつと左寄りに金峰山は遠く去つて行く船のやうに見えるが、雪を塗りこめた山頂は此の二つだけで、あとは兩神の上へ出てゐる甲武信ケ嶽も、破風、雁坂、和名倉、さては父不見の左に覗く三峰も、その山體を被ふてゐる秩父特有の針葉樹や南からの逆光のために、濃淡の黒い影繪を重ねたやうに見える。

かうして一時間ばかり、遠い眺めを樂みながら辨當をつかつたり、腹這になつて煙草を吸つたりして、やがて東の山稜を投石峠の方へ私は下りた。此の降りはかなり急で、正面に同じやうな山容をして立つてゐる東御荷鉾が忽ち見上げるやうに高くなる。暫く冬枯の萱戸の尾根を急降下して行くと樹林がはじまつて、狹い尾根の左側がゑぐれるやうに崩れ落ちた所謂「青崩」の地點へ出た。これは綠泥質の片岩と思はれる岩石のかなり大規模な崩壞地で、幅は一〇米もあつたらうか、高さは見える限りでも優に一〇〇米は算せられるが、見えない下の方でも未だ續いてゐるらしかつた。其色が沈んだ暗綠色をしてゐるところから「靑崩」の名は起つたのであらう。

東西御荷鉾の鞍部をなす投石峠は其のすぐ下だつた。北甘樂郡日野村から多野郡柏木へ越え

る峠で、あまり利用されないと見えて寂しい間道の趣を呈してゐた。峠の名の由來と謂はれてゐる石の破片は、狹い鞍部のあたりに無數に散亂してゐた。これも薄く割れた綠泥片岩らしく、手に取つて見れば蠟色光澤のある暗綠色で、爪で掻くと容易に白い傷がついた。人つ子一人通らない此の峠には、日雀が群れて盛んに「ツヽピン、ツヽピン」をやつてゐた。

峠からは南へ少しのあひだ西御荷鉾を捲くやうにして、やがて入澤（ひつさは）の詰へ出て、今度は此の澤傳ひに一里を降つて十石峠街道上の柏木へ出るのである。私の經驗では入澤は柏木へ向けて下流半里ばかりの間が美しく幽邃のやうに思はれた。上流の半里は炭燒が入つてゐて盛んに伐採されてゐるのと、水量が少いからである。此の澤では各種のチャートを採集する事が出來た。從來角岩とか硅岩とか云はれてゐる種類の石が多かつた。小徑が絶えず淺い澤と並行したり交叉したりしてゐるので、到る處に花のやうに露出してゐる此等多彩の石を採ることは私のやうな初學者には寔に都合がよかつたのである。

かうして僅か一日半の旅も天氣に惠まれ、經驗に富まされて、手に入れ損ねた書物への鬱憤もどうやら晴らされたやうに思はれた。

休みの日

一日

冬の初、ぼんやりかすむ霧の朝。夜來の雲は未だ散らず、太陽の在りかも分らない。
屋根の切妻に沿つて立つ煙突から、まつすぐ上るストーヴの、太い、柔かな、蛋白青（ブルウ・オパリーヌ）の煙の柱、摺硝子のやうな味氣ない空へ混じりにゆく煤の微分子、形骸を轉じた石炭のたましひ。
古い家を、灰色の幹をした多くの樹々が圍んでゐる。十二月の空間を針のやうに刺す其の梢から、風も無いのに、散り遲れた最後の枯葉が舞落ちる。枝から落ちるその際を、「小さい手を放すやうに」と適切にも歌つた日本の詩人は誰であつたか。然しそれぞれ固有の「時」が滿

ちて、永くとどまつてゐた母なる樹から、轉瞬の間に身をひるがへして落ちる其の忘我の妙境は、事實、手を放すと言ふよりほかは無い氣がする。

朝の靜謐な家のなかに、或る柔かな音の輪がひろがる。それは單調な、高低も强弱もない一聯の音響であるが、一つは一つと互に輪廓をぼかすやうに後を追つて鳴りながら、壁や廊下や部屋への通路の屈曲のまにまに、卷きついたり縺れ合つたりして流れてゐる內に、やがて落着く場所へ落着いたかのやうに消えてしまふ。再び歸る沈默。掛時計が午前九時を報じたのである。

時計の音といふものは、節は知つてゐながら其の曲の名の咄嗟には思ひ出せない古い歌に似てゐる。往來を誰かゞ口笛吹いて通る。吾々は殆んど反射的に、心の內か鼻歌かでそれに合せる。歌つてから考へてみると、それが「アンニー・ロウリー」であつたり。「オ・ソレ・ミオ」であつたり、或は「アルルの女」の行進曲であつたりする。同樣に仕事に夢中になつてゐる時、何かに氣を取られてゐる時、人は時計の音を單に聽くだけである。そして其の音の數と、それに關聯する意味とを、彼が常に必ずしも努めて理解しないことは、人間にとつて却つて一つの惠みであるとさへ云へるであらう。悲しみにせよ、喜びにせよ、仕事にせよ、すべての恍

惚や夢中は「時」を超越する。

窓の外、しだいに晴れてゆく空の下では、楢や櫟の無心の落葉。窓の內部、白い壁を飾る額縁にはヘルマン・ヘッセの詩と水彩。其の何れにも「無常迅速（フエアゲンゲリッヒカイト）」の題が與へられてゐる。

そして昨夜遲くまで讀み耽られた「ナルチスとゴルトムント」の物語が机の上に。

★

十二月初めの晴れた日の、裸になつた樹々にも增してきつぱりした、純潔な、男らしく美しい物があるだらうか。まんまるな大空は龍膽（りんだう）の花の色、遠く南の天から流れて來る太陽の光は黃。樹木は此の反射光と透過光との二色（ふたいろ）の光を全身に浴びて、冬の自然の中、いよいよ其の輪廓を、その個々の存在をはつきりさせる。

彼等は何處にでもゐる。武藏野の田舍と、その縁邊をなす郊外のいたるところ。

昔の街道の豪勢な並木であり、部落の在りかの目じるしであり、古い農家の誇りであり、また大空に散りしく雲の幕であるあの櫸を私は愛する。

私は愛する。此の平野の雜木林と云はれる物の主力である櫟、小楢、栗の木を。私は路を埋める枯葉を見て、その元の木の名を云ふ事が出來る。また暗い夜の星の下、彼等の幹を撫でただけで、其の名を言ひあてる事も私は覺えた。そして若しも私が我家の前庭にうづ高い落葉を其儘にして置くとすれば、それは飢饉の冬に食物を漁りに來る小鳥達のためであり、また後庭の枯葉の山に火を放つとすれば、それはちら〳〵動く炎の踊りと、日光に滿ちた空間へ渦卷きのぼる煙とを、私の樂しい冬の祭と思ふからである。

樹木に對する私の愛の最初の記憶は遙かに遠い。それが何時から、何を機緣として初まつたかを云ふ事は今ではもう到底出來ない。それは丁度、生れて初めて「物のあはれ」を知りそめた動機や日附について、誰にせよはつきりした事が云へないのと同じである。只、十五年前に出した初めての詩集に、私は「空と樹木」といふ題を與へた。そして此の瞬間から樹木に對する私の愛は自覺的なものとなつた。それは宛も人が戀を自覺した瞬間と同じやうなもので、物のあはれを感じる情は、戀愛への目覺めの雰圍氣は、すでにそれ以前から知らず識らずのうちに釀されてゐたのである。

樹木は初冬の太陽の金にまみれ、大空の靑に塗られて今日も私の平野に立つてゐる。卓然と

群を拔く大木にせよ、巡禮の行列のやうな小川の緣の並木にせよ、又大家族の一かたまりのやうな雜木林にせよ、すべて私にとつて彼等は親しい。彼等は私の每日の友だ。

そして私は屢々斯う思ふ。私が此世に暇を告げる最後の瞬間に、どうか平和な樹々の姿が急の向ふに在るやうにと、どうか穩やかな田園の自然が、その佳き日の太陽や、悠久な青空や、白い行雲や、又實にその遠近の木立と共に、私のいまはのきはの眼を祝別して吳れるやうにと……

映畫で見るアフリカの、あの乾き切つた、目もくらむやうな、單調な自然、太陽の下の底無しの寂寞。私はあんな處で死にたくない。

★

私が北西の季節風にさからつて、此の十二月の田園を進む時、道の往手、森の外れや畠の大きな廣がりの果てに、ひどく曇つてさへゐなければ、何時も靑い秩父の武甲山が見える。そして其山を目あてにして行くかぎり、私はきつと田無の町か石神井か、或は其の間に微妙な緩い

起伏をもつて展開する、のんびりした田舍へ着く事が出來るだらう。武甲山は武藏野を歩く者にとつては、磁石に對する鐵のやうなものである。

又若しも私が暖かな太陽に鼻を向けて、睫毛をしばたゝきながら美しい逆光の中を進むとすれば、私の足は三鷹村から神代村へ、尙も伸びれば狛江あたりの、水邊に日照りさざめく多摩の河原へ出てしまふだらう。

樹木や草が友であるやうに、大小の道も亦實に私にとつての友である。知り盡してゐる道は親しくて、安心で、物を考へながら歩くのにふさはしく、初めて通る知らぬ道は事毎に珍らしくて、見る物に豊富で、新らしく手に入れた書物を開くやうに樂しみである。別に之といふ當てども無く、氣紛れと偶然とに足を任せて歩くのもよければ、不圖現れた何處かの村の入口で、最初に出遭つた人を捉へて道を聞くのも面白い。何れにもせよ我家から二里や三里の道のりならば、どんなに迷はふとも夜までに歸れる事は知れてゐる。それが知れてゐればこそその餘裕のある散歩である。

然し何々街道と銘打たれた、道幅の廣い、坦々たるアスファルトの鋪裝道路を私はもう餘り好まない。其處では今も尙兩側に欅や杉の立派な並木を見る事が出來るが、あの貨物や客用自

動車の絶間も無い疾走を見ては、到底以前抱いてゐた街道に對する信頼を維持する事は出來ないし、其處から掬んだ無限の、たつぷりした、甘美の泉のやうな味はひを、再び期待する氣にはもう成れない。

昔の村落の住民が、彼等の生活の必要のまゝに、しかも地勢に順應して作つた道、雜木林のふちを通り、用水の流れに沿ひ、或は田甫や畠の中を悠長に廻つて、部落と部落とを繋いだ道や又其の枝道。私は矢張りさういふ道を愛する。喜と信頼とを以て彼等を踏み、たどつて行く。

野良へ働きに行く百姓のほかには、一日ぢう人も通らないやうな小徑の傍らに腰を下ろして、平和な田園の廣がりを眺めたり、雲を見上げたり、風を除けて低い藪蔭の日溜りにひつそりと咲いてゐる、小さな青い瞳のやうなイヌノフグリや、縮れた裾をひるがへして踊る踊子のやうなカスミグサの紅い花を見つけたりする事は、冬の小徑の上での深い、靜かな喜びで無くて何であらう。

★

雲に捧げた一篇の文章を何時かは書きたいと思ひながら、いまだにそれが書けないのは、必ずしも私の怠慢からだとは云へないにしても、私の無力からだとは確かに云へる。

私にとつて、雲は植物と同様に、思ひ出す事の出來るかぎり遠い少年時代からの、自然の中なる二つの愛の對象であつた。夜になれば母と寢る程の幼い頃から、——尤も私は十二の年まで母と寢たが——、晝間物干臺や屋根へ上つて雲を見る事の樂しみをみづから學んだ。遥かな物、生々流轉して常に形を變へる物、此の世の物ならず美しく、人の憧れの思ひを誘つてしかも永久に手に取り難い天のまぼろし。あの雲への不斷の憧憬は、私の今迄の生涯の內面生活に深く交渉し、私の夢見勝ちな傾向を助長し、過去と同樣、未來にも尙其の魅惑の力を振ふであらう。それで私には未だ決して易々とは雲が書けないし、急いで書く氣持にもなれないのである。私が之を書く時には、眞に「私の雲」でなくてはならない。

暑い、力强い、壯んな夏、つやつや光る青空と、晴れた日の西風にけぶる薄紫の林との冬、遠い地平の空に浮ぶ積雲こそ、私にとつては「永遠に女性なるもの」の姿である。又幾日か續いた快晴の日のいや果てに、天候の變化を告げるやうに其の千筋の絲を繰り出したり、解かれた髮の毛のやうに、或は長い釣針のやうに、大虛の奧を白々と流れる卷雲。私はこれを見て倦

きる事を知らない。

たとひ雲について何程かの學問的智識を私が持つてゐたとしても、私は其の爲めに自分の言ひ難い感情を少しでも歪めようとは思はない。氣象學上の雲と、私の詩情の中の雲との、其の何れかを選ばなくてはならないとしたら、私は喜んで前者を捨てるだらう。然しそんな事が無いとすれば、やがて書かれる「私の雲」は、此の兩者を調和させた未前の雲の詩であるべきである。

★

杉の植林と田甫の用水との境、狹い藪の中で消え勝ちな小徑を私は歩いてゐる。若い灌木の枝に、未だしつかり獅嚙みついてゐる枯葉。それが歩くたびにがさがさ鳴る。ムラサキシキブの藤紫の實、マユミ、ノイバラ、ガマズミの赤い實、スヒカヅラの黑い實。さういふ可憐な色々の實が、斜めになつた日を受けて冬の珠玉のやうに光つてゐる。

突然、一羽の鳥が一聲「ツー」と鳴きながら私の眼の前から飛び立つと、細長い田甫を低く

横切つて向ふの林へ飛び込んだ。私はその聲と羽の色とで、それがアカハラだつた事を知つた。脊や翼の鶯色と胸の狐色とが、瞬間、美しく日光に照りはえた。きつとガマズミかノイバラの實を食べてゐたのである。

私は小鳥にめぐり合はふとする時に何時もするやうに、足音を忍ばせて、出來るだけ靜かにゆつくりと進んだ。すると今度いきなり出遭つたのはジャウビタキだつた。これは眼の前に現れた低い榛(はん)の木の枝に棲まつてゐたもので、灰色がかつた羽毛と、翼にある白い紋と、赤銅色に輝く見事な尾羽とで、ジャウビタキの雌である事が分つた。私と彼女とは顔を見合せた。頓には身動きも出來ず、人間と小鳥と双方が立ちすくんだ形だつた。眞黒な玉のやうな眼がびつくりして私を見つめた。そして次の瞬間には聲も立てずに飛び去つた。

「住むべきは田舍!」　私はつくづくさう思つて獨り言を云つた。

田園の牧歌をぶちこはすやう、高壓線の鐵柱が無遠慮に林をまたぎ、其の太い電線が野末の山脈の美しい限空線を揶揄するやうに、厚かましい直線で北から南へ走つてゐる。然し何にでも多少の取柄は有るやうに、此の電線も秋や初冬の渡り鳥にとつての、翼を休める棲まり場にはなる。

私は畠道を歩いてゐる。もう午後四時を過ぎて、太陽は富士の左の裾へ沈むために最後の行程を急いでゐる。其の光が秩父連山や大菩薩の連嶺を横から照らして、山々の重なりを浮き上らせてゐる。或る銘酊のやうなものが、其の山々をほんのりと紅く上氣させてゐる。畠の中に干場(はしば)を作つて、其處に吊るされた大根が夕日の光で珊瑚色に染まつてゐる。平和だつた一日の清冽な、すこし寒いほどの夕暮である。

私は高壓線の電線に二羽の鳥の影を認めた。鵯よりは小さく、椋鳥よりは大きい鳥である。私は双眼鏡を擬してそれを六分の一の距離に引寄せる。鶫(つぐみ)であつた。

鳥類學者は云ふ、彼等はその繁殖地である西比利亞東部やカムチャツカ等から海を渡つて、遠く我國まで冬を過ごしに來るのだと。私は眼鏡をとほして凝視する。なるほど二羽の鳥は何れも痩せて長途の旅の疲れをあらはし、翼の端も尾の端も、擦り切れて箒のやうになつてゐる。しかも其の顏よ！　其の顏は眞面目で愛くるしく、少しびつくりしたやうに眼を見張つて、此の見知らぬ土地の夕暮の廣袤を眺めてゐる。

途端に、何かプスッといふやうな音がした。それと同時に二羽の鳥は初めて鶫獨特の「クェイ・クェイ」といふ聲を聽かせながら、打連れて東の方へ飛び去つた。濃い紫の煤煙が、地平

にどんより澱んでゐる東京の方へと。

私は畑中に苦笑ひして立つてゐる空氣銃の持主に對して密かに快哉を叫ぶと共に、助かつた二羽の遠來の鳥のために今後の安全を祈るのだつた。

★

西の空に一抹の夕映を殘して日が暮れる。机の上には散歩の折のアキグミの一枝が美しい實ごと置かれてゐる。電燈が柔らかに書齋を照らす。暖爐からは荒磯のやうな音が起こる。私は煙草に火をつける。一日の思ひ出が繪卷のやうに繰りひろげられる。心は詩に滿たされ、誰へとも無い愛に滿たされる。それが何かの形で書かれるのは何日だらうか。

羽族の思ひ出

ひとたび自然の中の「野禽」といふ世界へ想ひをひそめると、私の記憶の映寫幕の上を、彼等の無數の姿がぞろぞろぞろと通るのである。書面の奥を、鉛色の空にまぎれて、淋しく通過する爲めにぼんやり薄く見える群もあれば、自己の存在の意義と特色とを强調するかのやうに、鮮かに、大きく浮出して、堂々と前景を横ぎる個體もある。小さい嘴を思ひきり開けたシルウエット、晩春の旋律に膨らんだ咽喉、片脚上げて頬や後頭部を掻く時のひどく人間染みた動勢、或時の突然の遭遇にびつくりして此方を見つめた眞黒な眼。さういふものが陸續と眼前をよこぎ

るのである。

そして其のどんな場合、如何なる種類の野禽でも、思ひ出すかぎり皆とりどりに美しく、それぞれが私の幸福の理由だつた。ぽうつと上氣した樹木と汗ばむ程の陽のぬくみ、自分の歩いて行く道の上で、春の泥(ひぢ)ついばむ一羽の燕の顔を見たといふ事が、どうして其日の私のつゝましやかな幸福に關係しない謂はれがあらう。また青肌蜻蛉や川蜻蛉がしきりに羽化する郊外の初夏、或朝の思ひがけない郭公の點呼に、どうして私の詩的精神が活潑な「出席(プレザン)！」を答へずにゐられたらう。「忘れ得ぬおもかげ」のアルバム。今、雪にたそがれる冬の宵、爐邊に記憶を繰りながら、在りし日の彼等を呼覺まして、其の折々の自分をもう一度生きる事がなんと樂しいか！

凡そ十五年前、當時は今よりももつと田舍だつた豊多摩郡上高井戸の、雨にけむり夕日に染まる野の片隅、其處に二段歩の土地を借り、一棟の小屋を建てゝ、私達夫婦は住んでゐた。近所と云つては僅か二軒の農家ばかり、あとは畠の廣がりと雜木林といふ寂しさだつた。春は其

畠から雲雀が揚り、冬は其畠へ鶫が降りた。
家の裏手を走る小徑を北東へ辿ると大木ばかりの松林、それを拔けると地勢はだらだらと下つて、井ノ頭の水に灌漑される水田になる。其のだらだらの緩斜面に、杉や檜の植林と、櫟を主とした雜木林とがあつた。そして此のあたりが小鳥のよく訪れる場所だつた。

雪になりさうな冬の或日の曇つた午後、私達夫婦は田圃の方へぶらぶら歩いてゐた。家の近くを歩きさへすれば、必ず何かしら小鳥に出會ふのが常だつたから、其日もそれを期待しての散歩だつた。果して途中先づ一隊の四十雀に逢ひ、續いて雀と一緒になつてゐるあとりを見た。此田舍ではあとりの事を山すずめと云つてゐた。私達は檜林の中の小徑へかゝつた。すると林の中から、ついぞ聽き馴れない、極めて低い、それでゐて耳の底へ沁み込むやうな聲が聽こえる。私は妻の袖を引いて佇んだ。二人とも息を殺して耳を欹てた。

幻聽だと云へば云へるやうな不思議な聲、或種の昆蟲の翅の摩擦音を想はせる音、それが段々近づいて來る。私達は木蔭に身を寄せて窺つた。と、次の瞬間に、直ぐ眼の前の檜の枝へ移つて來た聲の主、それは一羽の菊戴(きくいただき)だつた。續いて又一羽、即かず離れず枝移りして行く二羽の小鳥は、私達人間が尚もよく見ようとして、足音を忍ばせて後をつけてゐるのを知つてか

知らないでか、金盞花の頭と苔色の羽毛、珠玉のやうに靈妙な小さい體軀を輕々と動かして、絕えずあの聲で鳴きつれながら、幾らか霜に焼けた檜の葉の綠のなかを、次第々々に遠ざかつて行く。

私達は物の十分間も感歎の息を呑んで此の菊戴を見守つてゐた。そして遂に全く彼等の姿が消えた時には、丁度、西の山の端に沈む明星の腐たい光を、最後まで見送つた者のやうな心地がした。

繪に描いたのでない、剝製でない、籠の中のものでもない、本物の、生きてゐる、自然の中の野駒を初めて見た日の喜びよ、私は其喜びを今後も永く忘れはしまい！

友と二人の山旅だつた。それも二日掛けの最初の日の、しかも歩き出して未だ半道と行かない地點だつた。武州御嶽の北東山麓、多摩の溪谷の崖の上、中野部落の眞中で野駒を見た。

道連れは詩人井上康文、時は新綠の山々に三葉躑躅がほのぼの燃える五月の初め、青梅電車を御嶽驛で乘捨てると足も輕く、シューマンの「春のさすらひ」なんぞを口笛で吹きながら、



村の並木路

溪谷を右岸へ渡つて、爪先上りの坦道をすた〳〵と中野部落へ入つて行つた。朝日の光が下流の山あひから一杯に射して、梨の花の咲く此村はすがすがしくも落着いてゐた。

私達が村の中程で御嶽參道を左へ曲つた時だつた。いきなり頭の上で朗らかな鳥の歌が流れた。思はず顏を上げると目も覺めるやうな咽喉の日の丸、一目でそれは野駒と知れた。小鳥は往來へ張り出した或家の銀杏の樹の枝にゐたのである。三聲、四聲、野駒は立て續けに歌つた。今ではもう其の歌の節は忘れてしまつたが、其の音色が山間の朝の空氣を顫はせ、靜かな四邊に木魂して、惚々とするやうなものだつたといふ事だけは覺えてゐる。私達は茫然として立ちつくしてゐた。野駒はサッと身を飜して程近い水楢の大木へ移つた。咽喉の緋色が流れた。彼は又早口に歌つた。そして私達が眼瞼を熱くして見詰めてゐる中を、忽然と谷の方へ飛び去つて再び姿を現さなかつた。

喜びの感情が油然として私達の衷に湧上り、それがはつきりと意識されたのは、實に彼が全く聲も姿も消してからの事だつた。

今から凡そ十二、三年前、長尾宏也も未だ青年で、私も亦それに準じて若かつた。或年の八月、私達は連れ立つて八ヶ嶽へ登り、歸途は茅野へ出るといふので行者小屋へ降つた。

私としては山らしい山への初めての登行だつた。一日半の疲勞と二晩の寢不足とへ、山を終つた安心も手傳つて、行者小屋へ着いた時にはがつかりしてゐた。友は小屋へ入り込んでコヽアを沸かしてゐる。私は外で腰をかけて飲物の出來るのを待つてゐる。その私の前で五、六羽の鷽が遊んでゐる。

鷽はそれより前から飼つてゐた。今の新交響樂團のトロンボーン大津三郎が、以前は大井の谷垂で副業に小鳥商をやつてゐて、或時「私は此鳥が大好きです。まるでフルートのやうな聲で歌ひます。これを是非お飼ひなさい」と云つて、わざわざ籠と餌まで添へて持つて來て吳れて以來、實際に私も好きになつた鳥だつた。だが之も亦、自然の中で飛廻つたり鳴いたりしてゐるのに接したのは此時が初めてだつた。

唐檜であつたか大白檜であつたか、小屋の前まで迫つてゐる原始林の巨木の枝へ棲まつたり、地面へ降りたりして平氣で遊んでゐる鷽の群。其のほかにも未だ森の中で「フェン・フェン」と綿を打つ音のやうな聲で鳴いてゐるところを見ると、もつと澤山の仲間が其處には住ん

でゐるらしかつた。だが私は夢のやうにそれを眺めてゐるだけだつた。疲れてぼんやりした瞳に映る其の鳥の、ほんのり紅い胸の色と上尾筒の著しい白。しかも其等の鳥の姿と二重寫しに、燃えさかる炎のやうな赤嶽や、恐ろしかつた横嶽の嶮岩の列が眼前を搖曳する。そんな風にして、私は友の作つて吳れる一碗のコヽアをひたすら待つてゐるのだつた。

高知へ歸省する友片山敏彦に誘はれて、高知へ行つたのも夏だつた。私は初めて名物の夕凪の暑さを知り、炎天下の市（いち）を見、吸江（ぎうこう）のちぬ釣を樂しみ、仁淀川の鮎釣を味ひ、そして海角に太平洋の波の碎けるところ、室戸崎の巨岩に群れて飛び鳴く磯鵯を見た。

室津の宿を出て岬まで、あの木蔭も無い大道は、照り下ろす眞夏の太陽に眞白に燃えてゐた。だが右手太平洋から吹いて來る南の海風は涼しかつた。あゝ南の水平線！　昨夜は其の星屑けむる水平線に、横倒しになる壯劇的な巨大な蝎座を、宿の緣側から眺めたのだつた！

左手の山へ登つて燈臺を訪ね、又降つていよいよ岬へ近付くと、波の怒號にまじつて勇ましい鳥の聲が聽こえ初めた。眼で探すと怒濤の碎ける花崗岩の巨塊の上、二十羽を下らない磯鵯

の群だつた。それが眼前に湧立つ太平洋の水をのぞんで、或は飛び、或は岩に下り立ちながら、澄んだ笛の音のやうな、又鈴の響のやうな聲で鳴いてゐる。それまで私の知つてゐた磯鴨と云へば、皆籠に飼はれた者ばかりだつた。今、其の本來の自由の世界で、しかも此の最も豪壯な海角で、水と空との靑にまぎれ、怒濤と和して聲をかぎりに歌つてゐる。實に淺學の私の知る範圍で、こんなにも雄渾な鳥と其の環境との看物は曾て無い。

私は友の肩へ手を置いて室戸崎への案内の好意を謝し、彼の故郷を賞讃する言葉を述べた。

「いゝだらう！」と友は誇らし氣に云つた。「僕の詩にある高知の空と太平洋の水の廣がりね、それが、今度君に解つて貰へて僕も本當に嬉しいよ！」

それが少しも自負や誇張と響かないほど友の言葉は正當で且つ自然だつたし、私の感激も亦それを悉く肯定するほど深かつた。

鴉とつばな

去年の五月九日の朝早く、裏の雜木林の縁へ立つて眼の前を流れる善福寺川の葦や針藺の簇生した低濕地を見渡してゐると、其中の或一箇所へ嘴細鴉らしいのが二羽下りて頻りに何かを啄んでゐるのに氣がついた、一體何がそんなに有るのだらう。鴉は何を食つてゐるのだらう。そこで一旦家まで雙眼鏡を取りに戻つて、さて改めてもう一度目的の鳥とその餌物とを見直した。

休耕中の水田とも只の濕地ともつかない場所へ下りてゐるのは、やはり嘴細鴉だつた。新綠

の朝の薔薇いろにそゝぐ太陽の光をうけていきいきした紫黑色に濡れたその羽毛を、レンズの視野に浮上らせて見てゐると、生來あまり好意を持てなかつた鴉といふ鳥に對して新しい見地をとらない譯にはいかなくなつた。然し彼等の盛んに啄んでゐる餌物の正體に至つては、私の六倍のプリズム望遠鏡の能力を以てしては依然これを明瞭にすることは出來なかつた。

何か知らぬが白く光る、柔かさうな、いくらか紡錘狀をした、長さ一寸餘りの蠕蟲のやうな物だといふ所までは判つたが、それが一體何であるかははつきりしない。なめくぢだらうか。それとも此頃盛んに羽化する蜻蜓（やんま）か蜻蛉の、まだ成蟲になつたばかりのぶよぶよした奴だらうか。然しそれにしては啄まれる餌物の數が多すぎるやうだ。殆ど鴉の一歩ごとに餌物は發見されるのである。そして暫くすると其處から二町ばかり離れた東京女子大學の構内の方へ飛んで行つて、又歸つて來ては同じ事を續けるのである。つまり鴉が其の餌物を自分で食つてしまふのでは無く、ほかに何か目的があつて何處かへ持つて行くのである。そしてもう一つ氣のついた事は、彼が啄みとつた餌物をあの太い嘴いつぱいになるまで銜へ溜めて、それから運び去るといふ事である。これだけの事實を見てしまふと私は家へ朝飯に歸つた。

食後には、今度は下流の石橋を渡つて、先刻鴉のゐた濕地を調べに行つた。もう鳥は居なか

づたが、行つてみれば謎の半分は直ぐ解けた。あの白く光つた。柔かい、蠕蟲のやうに見えたものは白茅の稚い花穗で、俗に言ふつばなだつた。それは蛙のころ／＼鳴く五月の水邊に近く、大地が點じた無數の可愛い白い焔のやうに見えた。

自分がまだ小さい時、八つか九つの頃、深川の越中島の原へ此のつばなを摘みに行つた事が思ひ出される。ちやうど今高等商船學校の建つてゐるあたりで、洲崎の方の海岸までつゞく廣い／＼原のうちで、其の附近に殊に此の草が多かつた。白い練絹のやうなぬめ／＼した柔かな穗の觸感、それを摘まんできゆつと拔く時の一種の手應へ、噛んでゐるうちに青臭い匂にまじつて滲み出して來る或種の甘味。さうした事が折柄の雲雀の囀りや、春の潮風や、「つうばな、つばな」と歌つた幼い自分の歌などゝ一緒に、三十幾年を隔てゝいちどきに私の回想の中へ蘇つて來た。あすこでは又よく兵隊が演習をしてゐたものだ。

しかし、一體鵲鴿につばなを嗜む習性があるものだらうか。どうもさうでは無いらしい。事によつたら彼等のごつ／＼した巢の底に幾らかの柔かみを添へ、卵を産み落すべき産褥をもつと具合よくするために、あゝしてつばなを集めてゐるのかも知れない。

若しも私に或種の勇氣があつて、其處に寄宿舍のある女子大學の構内へ、あの「禁男の家」

へ侵入して行けるとしたら、或は其巣を檢査する事が出來たかも知れない。だが私には知りたい情熱はあつても必要な勇氣が無く、意氣地なく尻込みして空しく今日に及んでゐる。
誰かあの赤松の幹を攀ぢて、百尺の梢頭更に一歩を進める人は居ないだらうか。

初心時代

今まで話に聽いたり繪や寫眞で見たりしてはゐても、それが實地に野生してゐるところを一度も見た事の無かつた花に、或日初めて出遭つた時の悦び。又見ても其の名の判らないのを、植物志を檢索したり圖鑑を繰つたりしてやつと調べ當てた時の嬉しさ。さういふ悦びの瞬間は、ほんたうに植物の好きな人にして初めて味ふことの出來るものだと思ふ。

今日植物について多くの事柄を知つてゐる人々も、一度は矢張り今云つたやうな經驗をした人達なのであらう。

山野をさまよひながら今ではすつかり親しくなつてゐる共等の花の前にたゝずんで、此の花達の名を何時どうして覺えてしまつたのだらうと思ふと、全く不思議な氣がするのである。更に又何百といふ紛らはしい植物の名を整然と分類して、實物を見れば直ぐに名の出て來るやうになつてゐる頭の中の靈妙な機構を考へると、いよ〳〵造物主の仕事の限りない偉大さに驚くのである。

私の場合で彼等の名を知つた時の二三の例を玆に書いて置くのも、或は無駄では無いかも知れない。

もう隨分前になるが、或年の春、五月の初めだつたと思ふ、私は小佛峠から景信山へ登つて、あの武相國境の尾根を陣場山の方へむかつて歩いてゐた。週間日でもあつたが、未だハイキングなどゝいふ言葉も無く、今のやうにさう盛んには人の歩かない頃の山路だつたから、一人でぽつねんと行くのは春とはいへ少し寂しい位だつた。空はきれいに晴れて、朝からの溫氣にぼうつと懸つた青い霞。その霞の奥に雲取も大菩薩も三頭も柔かに顫へてゐた。

ちやうど景信からの長尾根が一旦南へぐつと曲つて又西へ向いて行く、所謂堂所山の中程だつた。私は今まで途中でちよい〳〵見掛けて來ながら格別氣にも留めなかつたスミレの一本を、上着のボタン穴へ挿さうと思つて摘んだ。さうして匂をかいだ。これはスミレを手にした人が大抵誰でも習慣のやうにする事で、別に芳香の有無を確かめるといふ程のしつかりした理由があつてやる譯ではあるまい。ところが、匂がする。何とも云へず優しい、遙かな處からのやうな、佳い匂がする。

私は急に本氣になつた。割合に花のすくないあの尾根通りで、今までは碌によく見もしないで、タチツボスミレだけは多いな位に思つてゐたのだが、よく見れば花の形も色もかなり違ふ。花冠もタチツボスミレよりは幾分大きいし、色も彼とは違つて紅みが掛かつてゐる。私はいつもポケットへ入れてゐる圖鑑を繰つた。どうやらニホヒタチツボスミレといふのが當つてゐるらしかつた。そこで二三本根をつけたまゝ掘取つて、歸宅してからもつと詳しく調べてみたら正しくニホヒタチツボスミレだつた。

少しでも植物をやつてゐる人に訊けば直ぐに教へて貰へる程の名ではあつたが、初心だけに、自分で調べ當てただけに、何だか自分を祝ひたいやうな滿足が其處にはあつた。其後郊外へ住

むやうになると、此のニホヒタチツボスミレは近所の雜木林で幾らでも眼についた。

五六年前の夏、淺間山麓の追分へ初めて避暑に行つた。日盛りの午後一時ごろ、乘物が無いので親子三人めい〳〵可成な荷物を提げながら、停車場から追分の宿まであの長い道を汗を垂らして歩いて行くと、先づ眼についたのはあの土地に多い蝶ウラギンスヂヘウモンと、太陽の照り下ろす乾いた路傍に咲いてゐるレンゲサウみたいな花だつた。何だらう、ついぞ見た事もない花だがと思つたが、何しろ荷物は多いし暑さは暑し、一刻も早く宿へ着きたいので其のまゝ調べもしないで通り過ぎた。

さて宿へ落着いて夕方散歩に出ると、往來にも小徑にも先刻の疑問の花が澤山ある。今度はゆつくり調べることが出來たから、これも植物を好きな妻と二人で芝草の上へ坐り込んで圖鑑を開いた。花の特徵は荳科のものに違ひないので荳科のところを見て行くと、やがてシヤヂクサウだといふ事が判つた。莖の節の處に五枚づゝ葉が着いてゐて、それがちよつと車軸を想はせるところから來た名らしい。直ぐそばにはタチフウロやクサフヂが、又向うの荒地にはオホ

マツヨヒグサやユフスゲが、都を遠い信濃の國の夕風に咲いてゐた。
「いろんな植物があるね。明日からが樂しみだ」と私は妻を顧みて云つた。
高原の夕日、身にしみわたる清涼。追分ケ原の廣袤のなかで一羽のホトトギスが鳴いてゐた。

クサレダマ(草連玉)といふのを初めて見て、初めて名を知つたのは二度目の追分行の時であつた。そして初心者の悲しさには、これがよもや櫻草科の草だとは思ひもつかなかつたので正式の順序を蹈んで植物志を調べたが、その何物であるかゞ分つた時は、手數を掛けただけ餘計に嬉しかつた。

例によつて日盛りの時刻を胴亂かついで追分ケ原の片隅を歩き廻つてゐると、少し濕地になつた藪蔭に硫黃のやうな黃色味を持つた小さい五瓣花を圓錐狀に群らせた、高さ約一尺ばかりの軟弱な草が眼についた。初めて見る花である。何だらう、何科のものだらう。さつぱり見當がつかない。兎に角採集して途々圖鑑をはぐりながら歩いたが、遂に宿へ着くまで判らず仕舞

だつた。おまけに何時の間にか道をまちがへて借宿の方へ出てしまつた。

今ならば何だかトラノヲ臭いぞぐらゐはピンと來るところだが、當時は未だそれだけの器量さへ無かつたのである。

それで、歸ると直ぐに座敷の眞中へ胴亂を持込んで、問題の草を机の上へ、ルウペ、解剖刀、ピンセット、更に小型の植物志と道具立て宜しく、早速檢索に取りかゝつた。これが又初學者にとつては實に魅力のある樂しみなのである。

先づ合瓣花だといふ事は分つてゐる。次に「子房上位か子房下位か」。これも直ぐ分る。上位である。「花冠は乾膜質か、否か」。乾膜質ならばオホバコ群だとある。どうして、どうして、オホバコなんぞとはたちが違ふ。それでは「雄蕊は花冠裂片の倍數であるか、或は更に多數であるか」。否。然らば「雄蕊は花冠裂片と同數にして之と對生してゐるか」。そこでルウペを覗いて對生かどうかをレンズで檢査する。對生であつた。「子房は一室か」。今度は雄蕊の根元の子房を解剖刀で切りにかゝる。ところが何しろ相手が微小な物なので容易な事では輪切りに出來ない。花をいくつも無駄にした揚句、やつと「然り」の答が出來た。「花柱は一個か」。一個。それならサクラサウ群に屬すると書いてある。

私は思はず苦笑した。こゝに到つて初めてトラノヲを思ひ出したからである。もう此處まで判れば後は略して、急いで圖鑑で櫻草科を見る。直ぐ出て來る。畫も先づはそれらしく描いてある。

其後氣をつけてゐるが、所謂武藏野では未だ一度も見掛けた事がない。多摩丘陵や下總丘陵あたりではどんなものであらうか。

雀の一種のキバナノコマノツメ。あの可憐な金色の花を初めて見たのは甲州金峰山からの歸途だつた。

友と私、二人は昔ごろ金峰の頂上を辭して今宵の泊である上黑平をさしてどしどし降つてゐた。御室ノ小屋前で休んでゐると雷雨があつた。其處から水晶峠へかけては只さへ暗い濕つた針葉樹林なのに、折柄の雨であたりはすつかり黃昏のやうな氣分だつた。二人は朝からの行軍で相當參つて來た足を上黑平での麥酒を樂しみに鞭韃しながら、水晶峠の暗闇を越えてやがて楢峠に近い濶葉樹林帶へさしかゝつた。其頃になるともう先刻の雷雨はすつかり通り過ぎて、

西へ廻つた日の光が雨後の木の間へ千百の金の箭のやうに射注いだ。二人の心もそれと一緒に晴やかになつたが、未だ山は高く道は遠かつた。と、突然、

「おい、見給へ、キバナノコマノツメだよ！」と友が云つた。

「どれ？ これかい。これがさうか」と、私は友の敎へてくれた其花をつくづく見た。熊笹の中を縷々として續く小徑のへりに、それは點々と金色の菫形花をかゞやかせてゐた。

全山灰白色の花崗岩から成る金峰山と、眞黑な其の針葉樹林。私の眼からは終日黃色が奪はれてゐた。黃といふ色は文明人の嗜む色ださうだが、それは兎に角、鮮麗な色彩に知らず〳〵飢えてゐた私の眼に生れて初めて映つた此のキバナノコマノツメの、しかも小指の先ほどの金黃色の花冠は正に一箇の驚異だつた。

その夏、東京の私の庭には金峰山を記念する此の草がたつた一つ貴い蕾をほころばせた。その姿、その色は、私達夫婦を此上もなく喜ばせた。然し翌年の夏には只葉をつけただけで花を見せなかつた。そして三年目には、優しい草の魂が遠く金峰の山へ飛去つたかのやうに、跡形もなく消えてしまつた。

顯花植物記載用紙

No. 386 (尾崎喜八專用)

植物名	カラスノゴマ	
	カラスノゴマ 屬	シナノキ 科
學名	*Corchoropsis tomentosa, Makino.*	
全相	一年生草本。稍木本状。高サ1-2尺。全株有毛。	
根	地生。直根，側根。	
莖	直立。中實。略円壔形。分枝。呈毛。帯紫紅色。	
葉	互生。有柄。卵形又ハ楕円形。鈍鋸歯縁。葉縁紅染。下面帯白。線形托葉2。	
花	頂出及ビ腋出。側向或ハ點頭。有梗。梗上ニ線形小苞2,3。	
花ノ部分	萼	離片萼。萼片5。鍼形。鋭尖頭。下面有毛。宿存性。花後反捲。
	花冠	離瓣。薔薇形。緋回旋状。瓣片5。各片楔形。黄色。
	雄蕊	20，内假雄蕊5，鍼形，雌蕊ト略同長。葯ハ淡黄，内向。
	雌蕊	子房上位，三室，中軸胎座。花柱直立，有毛。柱頭膝曲。
果實・種子	蒴。長円壔形。長サ約1寸。有毛。帯紫紅染。種子多數。	
産地	東京市世田ヶ谷區成城，林縁	
採集年月日	昭和12年9月26日	
備考	黒田雪子孃採集ノ生品ニ依ル。	

植物の名を覺えたり其の生活を知つたりするには、矢張り植物と馴染になるのが一番いゝやうである。それには先づ自分の家のまはりに生えてゐて日常容易に目に觸れる雜草相手にゆつくり始めるのが確かなやうだ。よく大勢で出掛ける採集會などで手當り次第にちよんぎつたり引つこ拔いたりしては、先生や先輩に敎へて貰つた名を書いた紙テープで括つて、さうして片つ端から胴亂へ詰め込んで行く人を見受けるが、あれでは如何にも蒐集慾が滿足させられるだけで、植物そのものを本當に知つたり味つたりする事は出來ないのではないかといふ氣がする。標本の數はどし／＼殖えるだらうが、集めただけの物が果して其人の肉となり血となつてゐるかどうかは甚だ疑はしい事のやうに思はれる。

趣味にせよ學問にせよ、徐ろに沁込む水のやうな愛や觀察無しに、どうして自然の殿堂深く進み入つて其の美だの眞だのを窮めることが出來るだらうか。

一種でも二種でもいゝから其の全體と部分とを叮寧に觀察して、それを寫生するなり文字で表現するなりする事は非常に有益なやうに思はれる。私は友人武田理學博士の案に少しばかり自分の工夫を加へて、別掲のやうな記載用紙を作つて是へ觀察の次第を記入する事をやつてゐるが、これなども惡くないやうである。これに寫生畫がつけば錦上更に花を添へたとも云へる

かも知れない。兎に角本當に植物が好きならば、かうして急がずゆつくり觀察研究を續けてゐるうちには、一層深くなる興味と共に期せずして意外な發見をする事も有りさうに思はれるのである。

先づ自分の家の庭の植物相から始めて、次第に近所の路傍や野原などの物に及ぼして行つたら、それだけでもなかなか面白い觀察は出來さうである。更にさうした記錄には色々の方面から見て貴重な價値がある。たとへば今では絶滅してしまつたが、以前は此處にも斯々の植物が自生してゐたといふしつかりした記錄が殘つてゐれば、其處で植物の分布と土地の變遷との關係が考へられるやうなものである。一例を擧げれば、私の家の近所に濕地に臨んだ崖があつて、其の斜面に武藏野では珍らしいワダサウが自生してゐる。それが年々數を減らして行く。なぜさうかと云ふと、今迄雜木林や畠であつた所にだんだん住宅が建つて、其處に住む人達が塵埃の捨場が無いので此の崖の上から下へ投げ捨てる。それが崖錐のやうに積もつて元の斜面に生へてゐたワダサウを生埋めにしてしまふからである。

さうかと思へば二三年前まで雜木のひこばえと薄が主の荒地であつたのが、其處の地主が開墾して分讓地にしようといふ氣を起した爲めに、今ではヒメジヨヲン、デシバリ、ノゲシ、ハ

、コグサの類が取つて代つて寄生してゐるといふ風に、すつかり植物相が變つてしまふのである。かうした事も觀察して記錄して置けば、何ぞの時には役に立つかも知れないと思ふのである。

初心時代には自分の一寸した觀察や發見にも深甚な喜びを經驗するものである。さういふ時、あれやこれやと慾張らずに一つの物を眞面目にゆつくりと味はつて本當に其の旨さが分れば、健康な食慾は無理をしなくても自然に機會を摑んで次々と其の版圖を擴げて行くものゝやうに思はれる。

蝶の標本とヘルマン・ヘッセ

うちの者達に讀ませてやらうと思つて或晩ヘッセの短篇「赤星薄羽白蝶（アポルロー）」を譯してゐたら、私も急に自分の蒐集が見たくなつた。

ボーデン湖畔ガイエンホーフ時代のあの詩人と同樣に、田舍に家庭を持つて子供が出來、それが小學校へ行つて理科を習ふやうなると、私にも植物や昆虫、殊に蝶の採集に對する昔の熱情が再燃した。私はほとんど三十年ぶりに再び必要な道具を揃へた。子供の頃には無かつたやうな、又有つても中々買つて貰へなかつたやうな專門的な道具や便利な參考書が自由に手に入

ると同時に、採集地の範圍も遙かに廣くなつた。それで三四年後には忽ち幾つかの箱を飾る美しい蝶の標本を持つやうになつた。時たま出してそれを眺める私にとつて、彼等は晴やかな暑い日光や、睡くなるやうなそよかぜや、花に彩られた地の廣がりの歌であつた。

今私はさうした箱の一つを戸棚から持出し、硝子蓋の曇りをぬぐつて机の上のランプ型のスタンドの前へ置いた。關東や中部地方の山地や草原で自分で捕り、自分で丹念に標本に仕上げた蝶たちが、ランプの笠に圓く描き出された光の下で、その多彩な、重たい高貴な天鵞絨のやうな翼を柔かく內から輝かせて、そとは暗い二月の夜の果てしもなく降りそぼつ雨なのに、過ぎ去つた幾年の春や夏の思ひ出を茲にいき〱と蘇らせた。

私は先づたつた一羽しか持つてゐない自分の薄羽白蝶を見た。ヘッセのアポルローは後翅に血のやうな色の美しい球狀紋を持つてゐるが、それは日本では朝鮮の北部だけに見られる種類で、私のは紋の無いたゞの薄羽白蝶だ。それでも僅かに黃味を帶びた此の翼の、半透明な厚いパラフィン紙のやうな感じや、前翅と後翅の靈妙な輪郭や、翅脈と斑紋とをあらはす墨や薄墨の色などには、實に何とも言はれない氣品と端麗さとがある。

私は此の蝶を捕つた時の事を今でも忘れない。

それはもうかれこれ五年ばかり前になる或年の五月の末の事で、當時自分の入つてゐた或小さい山の會の仲間の幾人と、武州日ノ出山から御嶽、それから五日市へ出ようといふ遠足をやつた時だつた。雨の翌日の晴れわたつた暖い日で、日向和田の下の碧い多摩川の溪谷では、もう黃鶺鴒が家庭生活をはじめてゐた。對岸の段丘の上の農家の庭では、巢箱を出たり入つたりする蜜蜂が、陽炎のふるへる空間に澄んだ羽音をたてゝゐた。

日曜だつた。みんな今より五つだけ若かつたし、時世ももう少し寬容だつた。靜かな村里や山路を行きながら何かを夢想した者にも、生きる喜びを聲高らかに歌つた者にも、其後しばらくは思ひ出さずにゐられなかつた程、惠まれた樂しい晚春の一日だつた。

その御嶽を南へ降りて澤沿ひの小徑を辿つてゐた時、私は不圖此の蝶を見つけたのだつた。生れて初めて本物を見て夢中にさせられた薄羽白蝶は、それこそヘッセが巧みに書いてゐるとほり、「空中に優雅な弓形をゑがきながら音もなく靜かに下りて來て、陽に輝いた岩の面へつかまつてぶらさがつた」そして私としては、親切な仲間に聲援されながら、此の緩漫な動作をもつ蝶を難なく手捕りにすることが出來た。

薄羽白蝶のすぐ下に、小さい揚羽のやうな形をして、然しそれよりも遙かに敏捷らしく裁ら

れた翼と、其の翼の目も覺めるやうな黑と黃との虎斑模樣と、殊に後翅に美しい青藍色と赤色の紋をならべた、此の今にも飛立ちさうな蝶は姬岐阜蝶だ。私はこれを矢張り或年の五月に信州美ヶ原の百曲りの下で捕つた。

これも快晴の日の晝頃の事で、途中で道連れになつた松本の若い家具屋さんと一緒に三城牧場を奧へ奧へと登つて行くと、やがて百曲りと陣ヶ坂との分れ路へ出た。其處は小さい美しい綠の草原で、岩の上へ立つて振返ると、新芽の綠玉つけた落葉松の枝ごしに、殘雪の常念や槍や穗高を見ることが出來た。其時、その草原へ寢轉んで話をしてゐる二人の眼の前を、火花のやうに飛違つてゐたのが此の蝶だつた。私はすぐさまステッキへ捕虫網をつけて、さんざん追廻した揚句、やつと掬ひ上げるやうにしてこれを捕つた。

其他甲斐駒の裏銀蜆（うらぎんしじみ）、念場ヶ原のC立羽（シーたては）、八ヶ嶽の黃緣（きべり）立羽、信州望月の無紋赤蜆、梓山戰場ヶ原の孔雀蝶などが、この貧しげな世界の寒い二月の雨の夜に、曾ての豐かな大らかな自然や、詩と幸福とに滿たされた其の折々の自分を思ひ出させて吳れるのだつた。

「ヘルマン・ラウシェル」の抑もから最近の「新詩集」にいたるまで、私の知るかぎりでもヘッセは蝶について澤山書いてゐる。蝶はヘッセに於て最も深く靈的な詩人を見出したと同時

に、ヘッセにとつて、蝶は

あらゆる美しい者や果敢ない者の。
又餘りにかよわい者や有り餘つた者の象徴、
老いたる夏の王の宴に招かれた、
憂欝な、黄金をもつて飾られた客

であつた。

この夏の老王の賓客への襲撃を、私も亦いつかは止めるだらう。そして其時こそ自然の中の彼等の姿に、又此世に於ける一切の美しいものゝ無常の運命に、今よりももつと深く、もつと切實な愛情を抱くことが出來るだらう。

雲を見る

一

此の開亞米利加の或る素人向の氣象學の本を見つけて面白さうだから買つてみたら、其の中に南阿のケイプ・タウンに近いテイブル山での、有名なテイブル掛といふ雲の寫眞が出てゐた。卓狀の山を水平に被うた厚い雲の層が山の緣邊の切落しになつた長い斷崖に沿うて湊々と落下してゐる目覺ましい光景で、ちやうどナイアガラの瀧の水を雲にしたやうな具合である。著者の說明によると、此の雲は特に夏季に於て濕氣をふくんだ暖い風が山の急峻な斜面を押上

がる時に出來るもので、それが屢々山の突端から巨大な瀧のやうになつて這下りる事がある。しかし其の風は山を下るにつれて温められるので、從つて下の方では雲も消えてからうしたテイブル掛のやうな形を呈するに到るのださうである。

書いてある說明が簡單過ぎるので之だけでは別に珍らしくもない、よく知れわたつた現象のやうに思はれるが、何しろ場所が場所である上に規模が大きく、山の形にも特徴があるだけ、實地について詳細に觀察記錄した物を讀んでみたら色々興味ある報告や問題に觸れる事が出來るに違ひあるまいと思はれる。

私達の馴染の山では美ケ原などが此種の雲の觀察の最も恰好な舞臺になりさうに考へられるが、寡聞にして未だ聞いた事がない。

それと之とは違ふかも知れないが、似たやうな現象のうちでいちばん私の印象に殘つてゐるのは、昭和八年十月三十一日の夕方近くに大菩薩峠で見たものである

其日は前日來の雨が夜明け頃にはすつかり上つて、晩秋のすがすがしい太陽が山々谷々の晩いもみぢの紅や紫を一日ぢう照らしてゐた　私は唐松尾根の急坂から金峰、八ケ嶽、甲斐駒、白峯三山などの廣大な展望を撮影することが出來た。上日川峠附近で五六羽のヤマドリを見掛

けながら、明日からの狩獵解禁を知らぬげに遊んでゐる彼等を哀れに思つた。

久しぶりで大菩薩頂上の三角點標石を見舞つてから草原の斜面をまつしぐらに勝緣莊へ降りて行つた。其日は此のヒュッテへ一泊するつもりだつたので、主人の益田君に會つて暫らく話をしながら一休みすると、今度は寫眞機だけの身輕になつて、途々撮影をしたり植物を物色したりしてぶらぶら峠まで登つて行つた。

當時の手帖には午後四時と書いてあるからもう日沒にも間の無い頃であつたらう。さつき三角點へ行つた時には霧のキの字も無かつたのに、いま峠へ立つとちやうど山稜の分水線を境に東の半面だけ、即ち小菅側だけ、濛々と湧立つ霧に包まれてゐる。風はその小菅の谷から吹上げて來て、空氣はかなり濕つぽい。じつと立ちつくして霧の運動を見てゐると、どうかして此の分水嶺を乘越えようとするのだがどうしても乘越えられないと云つた樣子である。恰も岸に捲返す磯波のやうに水平軸のまはりに巨大な渦を卷いて倒れながら、如何に努力しても此の山稜の西の斜面を蠶食するにはもう一息といふ所で力が不足してゐるやうに見えるのである。私は此の光景のために殘つてゐる最後の乾板を使用した。ところが之がいけなかつた。纔く僅かの時間後にはもつと寫して置きたい光景が其處に出現したのだつた。

峠を辭して姫ノ井澤の方へ降りながら未だ幾らも行かない時だつた。何の氣なしに振返ると、峠の南の熊澤山（一般の稱呼に從ふ）に音の無い大混亂が始まつてゐる。厚い濃密な霧の大軍がとうとう分水界を突破して西の斜面へどうどうとなだれ落ちてゐるのである。其の霧は先づ斜面の凹みの冷えて來た個所から攻撃して行くらしく、水滴から成る長大な舌が幾筋かの熔岩流のやうに谷間を目がけて降りて行く。尾根の方はいくらか後に取殘されたが、それも次第に蠶食されてやがて一面の霧になつた。それが折柄の夕映の空の光を反射して、一種悲劇的な美觀を呈した。そして私の周圍もだんだん寒く濕めつて來た。

恐らくあの二三十分の間に、長い〳〵大菩薩の連嶺を通じて同じやうな霧の戯曲(ドラマ)が演ぜられた事であらうが、其の一部分を目のあたり見ながら撮影する事が出來なかつたのは返す〳〵も殘念である。

因みに、其夜は更けてから微かに小雨の音を聽いたが、翌日もまた美しい晴天で、大菩薩の錦繡の上には秋晴の空が青々とひろがつてゐた。

二

昭和十三年五月二十四日朝は前夜半からの快晴で、着物を着更へながら二階の寢室の窓からいつものやうに視程觀測をやると、女子大學の建物の間に上半身へ雪を殘した富士が此頃には珍らしく眞白にはつきりと見え、南の空には恐らく三〇粁以上もあらうと思はれる遠方に、夜が置忘れでもしたやうな卷積雲らしい雲の帶が一筋低く横はつてゐた。階下の茶の間へ降りて行つて揚子を使ひながら新聞をめくると、「今日・今晩、西の風晴れたり曇つたり、事によると俄雨がある」といふ豫報が出てゐる。序でに其の豫報の下に出てゐる昨夕六時の天氣圖を見ると、臺灣附近の低壓部から北東へ伸びた不連續線が房總半島あたりで北々西へ轉向して東京附近を通過してゐた。

午前十時少し前、遣りかけてゐた仕事に一區切りついたので、私はツァイスの小型カメラを持つて二階の窓から屋根へ出た。其處は私がいつも雲を撮影する所であるが、こんなに佳い晴天が豫報にあるやうな天氣惡變の前兆を少しでも見せてゐるなら、それを寫して置かうと思つて登つて行つたのである。

屋根瓦の上へ突立つてぐるりと天を見廻すと、なるほど富士の少し右手、西南西の地平を輻射點にして、其處から卷雲よりも寧ろ卷積雲に近い雲が帶狀に伸びて南と北との兩方面に横は

つてゐる。それを除けば全天の大部分は未だ眞青に澄みわたつた五月の空であつた。南の雲と北の雲とを較べてみると、前者が波浪狀とならぶ魚鱗狀といふ稍複雜な雲形を呈してゐるのに引換へて、後者は微かに陰影のついた單純な薄い布狀を呈してゐた。しかし東北東へ向つての彼等の上層での速度はかなり大きいやうに思はれた。

それで先づ私は扇の要のやうな輻射點の模樣と、南の方の稍複雜な卷雲とにシャッターを切つた。そして續いて平凡ではあるが北の方のも寫して置かうと思つて向きを變へた刹那、私は其の雲に不思議な物を見た。

雲は正しく云へば北々西の空の、仰角約二十度のところに横はつてゐる。其の方角は私の家からだと大體川越、寄居、前橋をつらねる線に當るのである。ところで私の見た不思議な物といふのは、其の狹い帶狀の卷積雲から別に一本長い紐のやうな眞白な雲が噴き出して、まるで飛行機の張つて行く煙幕のやうに見事な流線を描きながら西へ靡いてゐるのだつた。

實は私もそれを見た咄嗟には、本當に立川か所澤の飛行機が煙幕を張つてゐるのではないかと思つたが、何せよ七・八千メートルもあるあんな高空でそんな事の有りやうも無いと思つたから、これは矢張り雲に相違ないと極めて時を移さず一枚寫した。それから妻を呼んで見せて

やる序でに望遠鏡を持つて來させて覗いて見ると、電路へ挿入するヒューズのやうに軟かに見える其の雲の紐が最初見た時よりも幾分太くなつて、霧のやうな組織から成つてゐるらしいのが觀察された。私は念のためこれも一枚寫した。

其時には氣がつかなかつたが、フイルムを現像・燒付してみると、面白い事にはあの鯰の髭のやうな雲の噴出個所で、母體をなしてゐる卷積雲が三つばかり波の畝を作つてゐた。

不思議な觀物は二度目の撮影後十分間程で跡方もなく消えてしまつたが、それから一時間後には頭上一面に魚の鱗のやうな雲が出て、全天七分ぐらゐの雲量になつた。そして其日の午後十一時には雨が降りはじめた。

別に珍らしい現象ではないかも知れないが、私は此の二枚の寫眞を中央氣象臺へ送つて置いた。

其日の夕刊で同日午前六時の天氣圖を見ると、北海道の南東洋上に七四四ミリ以下の低氣壓があり、それから二本の不連續線が南西へ伸びて、そのうちの一本はほゞ關東平野の北西の緣邊あたりを通過してゐる。あの雲の下を前橋あたりだとすると、どうやら上層にも或る擾亂があつたのではないかと云ふ臆測が素人には浮ぶのであるが、或は全然そんな事は無いのかも知



雪の信州峠

れない。

三

若い友人S君が此頃私にかぶれて雲を見る事に非常な興味を持ちはじめた。そのS君が一週間ばかり横濱の實家へ行つて來ると云ふ。それでは丁度いいから此の間から考へてゐた「雲の同時觀測」をやつてみようと云ふ事になつて、私の所からケイヴの雲の本を一冊持つて同君は横濱へ歸つて行つた。昭和十三年五月二十六日の事である。

S君の家は横濱でも本牧に近い山手で、雲を見るには絶好の場所にある。私は東京市杉並區も西の外れの井荻に住んでゐる。同時觀測と云ふのだから時刻は午前九時と午後一時の二回に極めた。雙方にとつて都合のいい時間を選んだだけで、ほかに大して理由はない。觀測事項は其の時刻の雲量と雲形と、雲の動いて來る方角と其の大體の速度と、それに地上の風向といふ事に約束が出來た。

S君はなか〳〵熱心で、歸つて來てからその記錄を見せて貰ふと、必要な記事の中にも色々文學的な描寫や詩的な感慨などが織込まれてゐて、横濱といふ開港都市に於ける其の時々の天

氣と人生との釀し出す雰圍氣が鮮明なヴィジョンとなつて現れて來るやうであつた。九日間を通じて實行された雙方の觀測記事を照らし合せて、天氣や雲形には横濱でも東京でも殆んど變りのない事が判つた。五月三十日の午後晩く富士山に現れた綿帽子と其の上の見事な笠雲も番外ではあるが兩方で記録されてゐる。三十一日夕刻の殆ど全天にひろがつた高積雲の波浪も同樣であつた。たゞ東京西郊で風が南のとき横濱山手で幾分西寄りから吹いてゐる傾向のあるのは、雙方の地形の相違のためだらうと思はれた。

さて六月三日午前九時は胸もすくやうな快晴の朝だつた。例によつて二階の窓から眺めると、もう大分雪の痩せた富士や、黒ずんだ紺いろの丹澤山塊の一部が夏も近い姿を見せてゐた。その一碧の天の眞中をやゝ南よりに、一本の實に美しい帶狀の卷積雲が北東へ向けて長々と横はつてゐる。早速屋根へ出て撮影しようとしたが太陽がレンズへ入つて駄目なので、二階の窓から日光をよけて頭の部分と尾の部分とをそれぞれ一枚づゝ寫した。こんなに長い雲をそつくり寫さうとするには、特別廣角度のレンズでも使はなければなるまいと思はれた。

兎に角おそろしく長い風雲(かざぐも)狀の帶で、假に其の高さを八〇〇〇米とすると尾は二子玉川か喜多見附近の上空にあつて、頭の先は習志野から印旛沼あたりまで屆いてゐるらしく考へられ

た。門柱に頭をつけてじつと見てゐると上層にはかなり速い氣流が動いてゐるとみえて、尾の部分が少しづゝ形を變へる。ちやうど張りつめた氷が割れるやうに薄い雲の層に龜裂が出來て、それが溶けるやうに消えて行く。そして頭の方は徐々に先へ先へと伸びて行くやうに見える。

同じ種類の雲がもう一つ、これは遙か南の方に少し錆びたやうな色をして横はつてゐた。これも簡單な測角器を使つて仰角と方位角とから計算してみると、大體厚木か平塚邊から横濱上空を通過、東京灣を横斷して千葉附近まで達してゐるもののやうであつた。

此の同じ時刻の事を書いたS君の記錄を見ると、

「淸らかに澄みわたつた空、天涯には一片の雲もない。たゞ中天にひろがつた卷積雲の斑ら帶、南西から東へ横はつたのが言ひ難く美しい」とある。そして此の雲は並行した上下二層から成つてゐて何れも波狀を呈し、しかもその二層の波がほゞ直角に切り合つて十字の縞模樣を現してゐる狀態が詳細に記錄されてゐる。

此の雲は私が東京から遙か南方に見たものと恐らく同一の雲であつたらう。そして東へ東へと進みながら數時間後には遂に姿を消したとあるから、其日の上層には相當强い南西風が吹き

渡つてゐた事であらう。天氣は中一日を置いて下り坂に向ひ、交ぜ雲の多い空模樣になつた。

天氣圖の頒布が一時中止された爲に、天氣圖の有難味が身に沁みてわかつたのは其頃である。單なる素人としてゞいいから、又銘々の家庭内だけでもいいから、空模樣を見て大體の天氣の豫測がつけられるやうになつたらばどんなに面白く又愉快だらうと思つたのも、やつぱり其頃の事である。

寫眞と歌と

此頃の新聞のニユース寫眞で、「日毎に明朗化する北支」と云つたやうなイデエに纏められたいろいろのスナップを見てゐると、實際その畫面から或る解放の感じが、淡いながらも或る希望のやうなもの、遠い春の明るみのやうなものがほのぼのと立昇つて、そのために一瞬間、所謂銃後の氣構への表面に張りつめた氷が幾らかでもゆるみ、氣持の上の堅い縛めがわづかでもほどけて、心の奥の奥の方からおのづと歌ひ出すものが有るやうな氣がする。然しそれが一陽來復したあかつきに果して豫期されたやうな春であるか、或は直ぐには親みにくい、アクリ

マタイズするには多少時間のかゝる厳めしい春であるか、それは吾々にはわからない。だがほんの一と朝の幻影にせよ、とにかく吾々の内心に或る救ひにも似た反射運動を起させた點で、此等の現地報告寫眞がほゞ其の所期の成果の一端を收めたとは云へるかも知れない。

一體今度の事變で、各新聞社や通信社の現地寫眞班の決死的な活躍には寔に驚くべきものがあるが。それだけ、虎口に入つてはじめて獲ることの出來た虎兒のやうな貴重な資料や逸品が少くないやうである。それは勿論その人達の日頃練達した伎倆にもよる事であらうが、同時に此の運命的な大規模な戰爭によつて、あらゆる形で展開される無限の被寫體の深刻な啓示や刺戟から、彼等の眼が寫眞的にもまた道義的にも、その視野をいちじるしく深められ擴大されたであらうといふ事も考へずにはゐられない。レンズといふ光學的の眼を支配する斯うした心の眼は、これを「詩人の眼」と云つてもいいかも知れない。なぜならば、戰爭や悲慘も亦それ自身の詩を拒むものではなく、其の內面の詩を方寸の裡にとらへ來つて、人々の心のうちに同樣な感動をいきいきと生起させる事が出來たとしたら、寫眞家もまた廣義の「詩人」たるに恥ぢないからである。

數多いさうした作品から今便宜上二三の例として捜し出した中に、十一月二十七日の東京朝

日で見た山西省大同の子供達の寫眞と、十二月一日の同紙に出てゐた天津支那小學校の生徒達の寫眞がある。これには大分同感の人も多かつたから、敢て傑作の部類へ入れても私一人の好みとばかりは云へないやうである。

大同の子供達を寫した一組のなかで「少年研ぎ屋」といふ註釋のついてゐる小さい北支將領のやうな毬栗頭の頑童や、「ボロボロなれども毛皮の外套を着た飴賣りの子」といふ、甚だ溫かいリマークをつけられて味噌つ齒出して笑つてゐる子などは、見てゐるこつちまでがつい釣込まれて頬笑まずにはゐられないから妙である。「堂々店を張つて皇軍將士に煙草を賣る子供達」となると、頬笑ましいと同時に正に一幅の優雅の繪である。支那服を着、耳覆ひをぴんと上げた毛皮の帽子をかぶり　腰掛けて自然に開いた膝の上へ兩手を置いて、悠然と小さな賣臺へ向つてゐる少年の態度は、その王侯貴人のやうな容貌と共に、一體どんな親達の子かと知りたくなる程である。また此の賣臺の低いために身をかがめて一箱の煙草のお客になつてゐる日本の將校らしい軍人の姿が如何にも氣持がいい。そして此の微笑をたゝへた日支兩國の大人と子供との向うに、もう一人商賣の籠を下げて立てゐる大同の子供の姿。その三人で釀し出してゐる雰圍氣たり構圖なりが、折柄の北支の冬の朝の日光を浴びて、まことに「明朗風景」の代表的

なものになつてゐる。それに此の少年と云ひ、飴賣の子や研屋の子供と云ひ、どの子もみんな中々立派で鷹揚で、へんに小生意氣な處などは微塵も無く、未來の大政治家や大實業家や、智勇兼備の將軍の卵のやうに見えるから益々愉快である。

十二月八日の矢張り東京朝日へ出てゐた「北支淸朗」のモンタージュの中で、或る部隊長が窮民の眼へ眼藥をさしてやつてゐる繪もよかつた。愚直らしい田舍老爺（おやぢ）が、椅子の、それも端の方へ遠慮がちに腰をかけて、不器用に顏を仰向けてゐる。其の顏を丸腰の部隊長殿が腕時計の光る左手でおさへて、スポイトをつまんだ方の手の小指をおやぢの顳顬（こめかみ）の上へ輕く當てゝ安定を保ちながら、今や注入器の頭のゴムを押さうとしてゐる。これなどは實に玩味すべき內容を持つてゐる寫眞のやうに思はれる。德縣の街路でのゴウ・ストップの風景も別の意味で愉快であつた。交通整理係の印らしい白い腕章を左腕へ卷いた日本の兵隊が、往來の正面を切つて、指揮棒のやうな細い棒を水平に構へて通行人を停めてゐる。此の兵隊さんと、通行人中の主要人物である手押車を押す二人の支那人とで作つてゐる構圖が實にいい。三人の人物は畫面一杯に大きく眞直ぐに立つてゐる。兵隊さんの外套の革帶と指揮棒と二臺の手押車の臺とは、人物の垂直線に對する水平線になつてゐる。しかも此の直角に交る線の單調を破るかのやうに

支那人の帽子の耳覆ひと兵士の指揮棒を持つた腕とがほゞ四十五度の角度で垂れてゐる。つまり直線の組合せから成る整然とした美であつて、如何にも交通整理らしい感じがとらへてある。三人三樣の表情も自然である。中味の程は分らないが、さも大事な品物のやうに鹿爪らしく手押車へくゝりつけられた細長い包の餘り小さいのも、車の押し手の威儀を正した樣子との對照から、此のどことなくユーモラスな畫に一層のユーモアを漂はせてゐるやうである。

すべて斯うした作品を見てゐると、我國の寫眞藝術といふものが、特に新聞の報道寫眞の分野で非常な進步を遂げつつある氣がする。他の分野と此れとの比較論證は別の機會に讓るが、彼等が物の眞を把握するために、其の「眞」のひらめきを形象の一瞬の動きの上にとらへる眼と技術とには確かに讚嘆を惜ませないものがある。しかも其處では在來の寫眞家の獵奇的態度や、卑俗な野心のやうなものが最早や悉く止揚されて、深い含蓄のある、紙背に生きるところの物のある、何等かの意味で吾々に訴へ、吾々を說得し、吾々の肩へ手を置いて共に行かうと云つてゐるやうな、日本的にユニックな詩的感覺をもつた世界人の步みが見られるのである。

天津の支那小學校の敎室內の寫眞五枚は、何となく好ましい映畫のスティルを想はせる。子供にまじつて日本人の女の敎師から日本語を習つてゐる一人の中年の支那人の、あの五分刈の

頭へ眼鏡をかけた眞率な顔には、なぜか知らぬが身につまされる思ひがした事であつた。洋裝の女の先生が黑板へカミ、スミ、スズリ、イス、と順々に漢字の日本讀みを片假名で書いて來て、さてツクエも卒業したので白墨を置きながら、「それでは次の字は？」とでも質問した瞬間らしく、支那の子供達が一齊に手を擧げてゐるところも美しい場面である。頰笑ましいとか、和やかだとか云ふ以上に、此の北支の少年達や日本の女の先生のために。彼等のそれぞれの善き希望の達せられる事を心から祈念したい氣持で此の見事な寫眞を眺めたのであつた。同時に映畫「未完成交響樂」の學校のシーンが不圖私の腦裏をかすめたのも考へてみれば自然な廻り合せであらう。

春の陽光の明るく射しこむ小さな教室での算術の時間、きらきらと眼鏡を光らせた若い貧しい小學敎師シューベルトが、腕白小僧共を前に黑板へ 1×2＝2と書く。そしてあの綺麗な聲で「ツヴァ イマール・アインス・イスト・ツヴァイ」と言ふ。すると生徒達が神妙に口を揃へて、「ツヴァ イマール・アインス・イスト・ツヴァ イ」と鸚鵡返しに復誦する。續いて先生は其の下へ 2×2＝4と書いて、「ツヴァ イマール・ツヴァ イ・イスト・フィーア」と言ふ。生徒達が又口を揃へてそれを復誦する。シューベルトは次を書くつもりで黑板へ向ふ。不圖見れば今書いた

「二二が四」の四が、其の上の「一二が二」の二と重なつて、$\frac{2}{4}$になつてゐる。シューベルトの眼が夢見るやうになる。親切な質屋の娘が窓から投げて自分に呉れた賓流れのゲーテといふ詩人の詩集の中の、あの氣に入りの「野薔薇(ハイデンレースライン)」へ附けかけたメロディーの續きが泉のやうに流れ出して來る。天來の創造の鳥はうるはしい翼を波打たせて頭の中を飛びまはる。時を失して逃げられたら二度と再び同じ鳥にめぐり合へるかどうかは分らない。シューベルトは白墨を持ち直して、2×3=6の6の頭をくるくると返して高音部記號(クレフ・ソル)を書く。それから調號を書き、音譜を並べ、詩句を添へる。黒板半分が樂譜になる。然し次の瞬間、此の二重人格者の中の算術の教師の方が漸く意識を取りもどして、さつきから呆氣にとられて氣の變になつた先生をじつと見てゐた生徒達に、「ヴィーダーホーレン」と云ふ。すると持構へてゐたやうに一齊に生徒の聲が迸る。然しそれは「ドライマール・ツヴァイ・イスト・ゼックス」の復誦(ウイーダーホールング)ではなくて、淸らかな少年のソプラノではじまる花の歌、五月の丘の風のやうな、野川にせゝらぐ水のやうな、あの不朽の「野薔薇」の歌の世にも美しい齊唱である。若い貧しい無名の音樂家フランツ・シューベルトの眼がやわらかく亮る。少年達の天使のやうな聲は、まるで世界を此の歌の調べで浸してしまはうとでもするかのやうに、教室に滿ち、窓から洩れ、櫻桃の咲き亂

れた庭へ溶漾と流れ出す。其の庭を校長が通りかかる。算術の時間であるべき教室からの一齊の歌が耳に入る。彼は立止り、兩手を握り合せ、それから手を差上げて教室めがけて突進する……

事變とニュース寫眞、それから筆がすべつて繪空事のやうな映畫のシューベルトの事まで書きながら、必然に私の眞劍な考への向ふのは、現下の時局に最もよく乘つてゐると思つてゐるらしい有名無名の作曲家や作詞者の上である。私は自分の食はず嫌ひを避けたいから、他人の理由を出來るだけ知りたいから、そして、それにはラヂオに據るのを一番便宜と考へるので、努めてラヂオをとほして新作の歌を聽いてゐる。そして悲しいかな殆どいつも、私の心は慰まない。私は歌から「歌」を聽かず、心を打たれる事もない。すべてが餘りに上つ面ではないか。此の難局に默々として各自の任務を盡くす萬人にくらべて、彼等が餘り皮相に輕薄ではないか。信念や操志の事はしばらく措いても、餘りに低劣に厚顏ではないか。

戰場に命を捨てる將卒の事は云はないとしても、歌作りの彼等の何處にあの寫眞班だけの眞

劍さや世界眼があるだらう。何處に彼等に較べられる程の仕事の痕があるだらう。また何處にあのシューベルトの藝術家魂があるだらう。戰地寫眞班はジャーナリズムの一翼でありながら既に其處から一歩を進めてゐる。シューベルトの歌は永らく作者不明の儘で人から人、心から心へと傳はつた。電波に乘り、圓盤と擴聲器とをとほして廣く日本國中を驅けめぐりながら、時流の最上層に浮游する彼等が、却つていちばん泡沫のやうに見えるではないか。

　多くの人々は夜を日に繼いで製造される彼等の歌に、今や殆ど關心を示してゐない。それよりも遙かに切實な關心なり興味なりは、彼等を驅つてニュース映畫へと走らせる。其處では世界が否應なしに息づいてゐる。直接間接吾々の心や生活に働きかけて來る諸々の要素が、速いテンポで廻轉してゐる。其處から急いで取る事が出來さへすれば取る物はいくらでもある。後で思ひ出してゆつくり味へば、吾々の眼界を擴げるもの、心を喜ばせるもの、問題を提起するもの、其他樣々の性質を具へたものが、穫物のやうに、糧のやうに吾々を養ふのである。

　かうは云ひながらも　實は歌謠の作者達もそんな事は疾うの昔に知つてゐるかも知れないと思ふ。たゞ「時の顧客」の註文に從つたり、或は流行を作つたりするだけの心算で、案外吞氣に惰性的に遣つてゐるのかも知れない。それなら最早や何をか謂はんやであるが、内に疼(うづ)き、

盛り上がり、すでに頭角を現して來た次代の若々しい日本が、輕蔑無くして彼等を見、寛容にも彼等を問題にしてゐるかどうかを、私は頗る疑問とせずにはゐられない。（昭和十二年十二月）

行人の歌

初めに驚ありき

「さあ、お茶が濟んだらひとつ滑つてみませう」と、長尾宏也君がやをら腰を上げる。パスの聲である。カメリア・ドゥ・リュクスの太いパイプである。何かの毛皮の胴着である。「山の隣人」の、あのぎろりとした目つきである。一種の雰圍氣が、故鄕の山にゐる時のペールギュントのやうな長尾君と一緒に動き出す。そして僕から見れば、美しいかな、それは英雄的行爲を鼻唄でやるスキー・ヒュッテの雰圍氣である。

彼の書齋や茶房の卓に向ひあつて、二人きりで居る時ならば解る。然しそれぞれの人のそれ

ぞれのスキーが栖のやうにならび、ヴェテランの重たい靴がグランディオーゾに歩き廻つてゐる乾燥室へ入つてさへ、長尾君は僕を一人前の人間として取扱ふ。ところで、スキー地へ來てスキーの心得の無い一個のムッシュウと云ふものは、やつぱり人間としては幾らか肩身の狹い、客觀的にはどうも貧しい存在である。

綺麗な雪の緣縫をつけたスキーをかゝへてふうふう言ひながら外から入つて來る者もある。盛に燃えるストーヴで臀をあぶつてゐる者もある。さうかと思へば、スキーの腹をかへして、それへじゆうじゆうアイロンをかけてゐる者もあれば、低い椅子へ腰を下して、瞑想的に煙草を吸つてゐる者もある。ワクスを塗る者、折れたスキーを銅の板で接ぎ合せる者。いくばくかの手工が要求される時、スポーツにも賴もしい生活的な空氣があるものだなと感心しながら僕は見てゐる。

其の人々に立ちまじつて長尾君もワクスを塗つてゐる。あんなに酷くやつて折れやしないかと、手持無沙汰で見てゐる素人のこつちがはらはらする位、指の短い、肉の厚い手の平で叩きつけるやうに塗つてゐる。すると突然、その長尾君が野太い聲で「おゝい！」と怒鳴つて、群集の中からヒュッテの若者を呼び出す。

「先生に。もう一つの分のスキー靴を持つて來て上げろ」

綸言汗の如くにして、忽ち一足の靴が僕の前へならんだ。僕は小聲で云ふ、

「先生はいかんよ、長尾君……」

「えへ？」と云つて、彼はにやりとする。長尾君は昔から、犬齒と眼とに口ほど物を言はせる人であつた。

ワクスも塗れた。靴も穿きかへた。ストックも二本揃へて渡された。不器用にスキーをかゝへて外へ出ると、これもまた借物の雪眼鏡をとほして、三月正午の霧ケ峰の積雪風景は金と綠、さながらグリムの童話の世界であつた。

ふだん眼鏡を掛けない者にとつて、眼鏡を透して見る此世の風景は數分間の驚異と佇立とに價する。僕は今までの自分の不可能を可能とする此のスポーツのきらきら光る門に立つて、これからは新らしい童話の發見が、詩の發見が出來るなといふ、熱い希望の中に佇んでゐた。

「さあ、穿きませう」と長尾君が傍から云ふ。

「あゝ、穿きませう……」

雲をやぶつて現れた太陽の光に燦然と輝く雪の高原を前にして、嬉々として悅ぶ心は一あゝ

穿きませう」としぜんな返事をしたものの、それは實地や映畫の中で人が穿くのを見ただけの話で、何も自分に體驗があつたり、腕に覺えがあつたからでは無い。結局、棟上げの時の柱のやうにひよろひよろ不器用に立つてゐる僕を、雪の上へ身をかゞめた長尾君が其の肩か頭かで支へながら、手早くスキーと靴とを接着して呉れたのである。

父よ、此樣にしてあなたは、七歳の時の僕に遠足の草鞋を穿かせ、母よ、此樣にしてあなたは、僕の附紐を結んで呉れたのでした！

そして今や四十になり、生れて甫めてスキーを穿き、先づはその上に乘つてゐる僕である。今後そもそも何年生きて、どんなにスキーがうまく成るかは知らないが、此の最初の樂しい經驗だけは、"Im Anfang war das Wunder" の一句を冐頭として書殘して置きたいと僕は思ふ。

あゝ自由の雪のひろがり、其處にあらゆる理想を描くべき二本のスキー。其の上に僕は立つた。腰も膝も、臆病らしく凹ました腹もみんな伸ばして、本來の身長だけ立つた。然し餘り生意氣らしく突立つて動き出されては大事だから、スキーの機嫌に逆らはないやうに、なるべくスキーに感づかれないやうに、息を殺してそうつと立つた。それから僕は足もとを見た。頭を

引いて下眼使ひに見なければならなかつた。二本のスキーは靴の先からほとばしつてゐた。僕の視線とスキーとで作る角はせいぜい四十度ぐらゐなのに、それが二十度にも思はれる程長く見えた。今度は恐る恐る頸をひねつて後をのぞいた。勿論踵からもスキーは後へ伸びてゐた。足の感じではひどく重いらしい。これをどうして動かすのかと、今更歎息の氣持でゐると、「ストックを遊ばせて置かないで、立つてゐる時は斯ういふ風に兩側へしつかり突いた方がいゝでせう」と長尾君が注意する。

なるほど僕のストックは遊んでゐた。別に故あつて遊ばせて置いたわけでは無いが、使ひつけない悲しさにはつい其の存在を忘れてしまつて、たゞ失くさないだけの話で、漫然と持つてゐたのである。さう云へば眼鏡も鼻の先へずり落ちてゐる。

僕は立つた。そして僕は立往生してゐる。もう全身が汗ばんで、あれほど書物で會得したバランスの理論も、あれほど映畫で自分の物にした智識も、此の瞬間ことごとく忘却され了つて、今や本來空の僕は、一個の全く氣心の知れないデエモンの背に心細い一身を托してゐるのだ。

兎に角、此の棚づけのやうに動かないでゐる足の始末をつけなければならない。そこで平地

行進といふ事になつた。先づ手本を見せるとあつて、コーチャー長尾がすうすう出る。鹽のやうな細かい雪の上を、遠くから眼に見えぬ絲でたぐり寄せられてゐるやうに氣持よく出て行く。なるほど、あの要領だつたな。兩杖をあゝ突いて、あゝいふ風に足を出して……

そこで思ひ切つて最初の一歩を踏み出さうとした。ところが、スキー術は滑るものだといふ事を何時の間にか忘れてしまつた僕は、歩く時の要領で左足を踏み出さうとして、重たいスキーをぶらりと爪先へ吊るし上げて其れを前へ投げ出さうとした瞬間、右足のスキーがするすると滑つて、見事うつぶせに倒れてしまつた。今度も兩杖が閑却されてゐた事は云ふまでも無い。

長尾君は天才教育の教師である。此の教師に附き從つて行くためには、弟子にも天才のひらめきが無くてはならない。僕にそれが有るか無いかは別問題として、少くとも彼が他人を自分と同一レヴェルの者として遇し、或は遇する事を愛し、其間決して啓蒙的な態度を示さない程特殊な禮讓の觀念を持つてゐる事は確かだつたから、長尾君をスキーの先生とするかぎり、結局僕は獨學以て志を遂げなければならなかつた。

それで充分汗を流した揚句、やつとの事で平地行進を自得した、ヒュッテの前には幾らかの平

坦な地面がある。其處が僕の得意の壇場だつた。僕は嬉々として歩き廻つた。わづかの努力で多くの廣袤を我物とする事が出來るとは抑も何たる愉快だらう！　往手を遮る地の高まりもなく、手を束ねて運命を托さねばならないやうな斜面もなく、平穩無事に、滿足して、スキーの下で得も云はれぬ音を出すあの雪の呟きを聽きながら、悠々と流して歩く樂しさよ！

もしも向うから滑つて來た長尾君が斯うした僕を見逃して、「それだけ出來たらもう少し上へ行つて直滑降をやつて見ませう」などと云はなかつたら、或は僕は一日其處で平地行進に沒頭してゐたかも知れない。

だが向うの方、鳶色の夢のやうに煙る二つの落葉松林の間では、眞白な地が緩やかに高まり、それが次第に急になつて蛙原の斜面を立てかけてゐる。此處から見ると其の原のスカイラインが實に優美だ。しかも其の美しい線の上を小鳥でもあらうかと思はれる黑い二三人が滑つてゐるではないか。長尾君は其處まで行つて直滑降をやらうと云ふのである。

二人は雁行して行く。やがてヒュッテが見えなくなる。長尾君は、

「其の調子ならア、あんな處何でもありやしませんよ、尾崎さん」と聲援する。ところが間もなく僕のスキーは後滑りをはじめて、どうやらどの調子でも無くなつて來た。

「後滑りするやうだつたらストックをうしろへ突いて」と先生は云ふのだが、下手に突けば横へ倒れるし、うまく突けば突くで、もう出るも引くも出來なくなる有様である。僕は又しても自分が不隨意筋の塊りになつたやうな氣がした。

さんざ苦心に苦心を重ねて、グライダー小屋のあたりまで辿りついたのが精々だつた。それから先は斷然傾斜が許さなかつた。開脚登りといふのを試みれば、スキーのテイルが重なり合つた。左のスキーが持上らないので變だなと思へば、右のが上へ載つかつてゐるのだつた。

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ

は正にカアル・ブッセの云ふ通りだが、

噫、われひとと尋めゆきて

涙さしぐみ歸つて來ようにも、初めから行けない塞では又別に或る日本の有名な詩人の文句でも持つて來る外は無いやうだ。仕方が無いから此處から歸らう、直滑降で。

今思ひ出しても愉快なのは此時の僕の直滑降である。

地の最大傾斜線に沿つて落とすつもりだから、先づ長尾君は其の方向へ僕を向ける。彼は僕

を玉轉がしの玉のやうにつかまへてゐる。放せば滑り出すのだから、滑り出したら止まるまで意志は働かないものと思はなければならないのだから、長尾君もよく前途を見定めて、姿勢を極めさせるのに肝膽を碎く。僕は僕で眼を据えて、乾坤一擲の大冒險の前で悲壯になる。ホッケ姿勢はきまつた。やがて、

「それッ」

矢頃をはかつて長尾君は掛聲と一緒に僕を押した。スキーはズズズッと滑り出した。僕はかあつとして全身の血が頭へ逆流した。

何時搗いたのかは知らないが、兎に角僕は臀餅を搗いてゐた。スキーと一緒に兩足を前へ投げ出して、臀とスキーとで滑つてゐた。長尾君はうしろから「あはゝ、あはゝ」と笑ひながら追つて來たが、忽ち追ひ拔いて先へ行く。僕はポケットから煙草を出し、電池ライタアで火をつけてそれを吸つた。

あゝ、煙草を吸ひながら、身體の一部とスキーとの協同作業で長い斜面を滑りながら、西に傾いた夕日の光を華やかに帽子の庇へ受けながら、古い親切な友の姿を紫にたそがれる雪の彼方に眺めながら、其時僕が見た霧ケ峰の自然の何といふ不思議な美、何といふ未前の光景であ

つたらう！　たそがれ近く、異常に神秘な光に包まれた雪の高原。やがて蓬々と流れ漂ふ夕靄の、それも消えれば、眼ざめる星は雪にも咲くか、霧ケ峰！

下では長尾君が腕を組み、パイプを啣へて待つてゐた。もう雪も氷りはじめたので吾々はスキーを外して肩へかついだ。ヒユツテに近く夕日の光が弱々しく流れて、二人の影を長々と雪面に横へた。それはちやうどヘンリー。ヘーク寫すところの「最後のスキー旅からの歸り」であつた。

そして僕の一生忘られないスキー第一日が平和に暮れた。

ノルウエイ・バンド

しんみりと暖い金色の日光、西風に染められた大きな青ぞら。快美な秋の數日が、飯綱、戸隠、黒姫、妙高と、旅の道すぢの進むにつれて、それら北方の山々を、黄に、赤に、紫に、燦然と照らしてゐた。

私はいつもの獨りだつた。背には嚢、手には杖、心には靜かに薫ゆる幸福と、子供のやうな生き〳〵した期待とを持ちながら。それに幾年着古した旅行服の、半ズボンの下で結んだ紐。その黒と銀鼠との絲のあひだに少しばかり落着いた紅を取合せた、ちやうど森の赤啄木鳥（あかげら）の羽

の色をおもはせる羊毛の組紐は、こんな美しい十月の他郷に對する私のさゝやかな儀禮でもあれば、歌でもあつた。それは自分で意匠して、妻に編んでもらつた物だつた。私は此の氣に入りの紐を膝頭の下に緩くむすんで、剩つた部分を房に垂らした。年齢がもう中年を過ぎると、おのれの見掛けの上の老に對して心の若さをほのめかす爲か、そこばくの青春を身に着ける事を思ひつく人間も世には有るものだ。

私の紐は信濃に枯れた岩菅や、越後路の霜の上で搖れた。それは路上で私の口ずさむシューベルトの歌の調子に合せて躍つた。それは一茶のふるさとで、私が立呑みした地酒に濡れた。旅よ！　旅をきらめかす太陽と風よ！　早くも新雪の笹べりとつた白馬、杓子、唐松あたりの北アルプス。その銀と靑との遠い華麗を手に取るやうに眺める飯綱の薄の原を行きながら、私は裾花の谷にのぞむ村々から上がる晝間の煙に、山國の秋の心をしみじみと味つた。私は戸隱の巉巖をよぢ、鬼女も眠るかと思ふ靜寂な炎の林を歩きまはり、美しく倒れかゝつた牧柵の向うに大きな黑姫山の姿を見まもり、又黄昏の中社の宿から、遙かにけぶる夕映の果てに影繪のやうな南信の山々をみとめて、何か歸らぬ幸福に似たものを追ふのだつた。

それから旅は大きく廻つて、信濃を過ぎれば越後の地、すでに早くも冬をきざした寥廓たる

北國の天の下、妙高山と其の高原のひろがりとが私を抱きしめた。私は安山岩のかたまりに腰をかけ、雪の香のする風に吹かれて榛を嚙みながら、黄ばみわたる頸城平野を薄青い大氣の底に見おろした。

かうして豐かに與へる自然からは元より、又行く先々の到るところ、人々からの歡待も私はうけた。勿論今ほどの年齡になつてみれば、人に待たれる垣のほとりで、脆くも散つて俤のみに泣かしめるロマンスの花を摘む事も無かつたが、その代りには使ひつくされた農具のやうな老人や、眞面目な律義な田舍の女房や、何處にでも居て何時でも好奇心で一杯な子供達から、結局は彼等と何の變るところもない人間仲間の一人として、氣の置けない客として　又色々な珍らしい事を知つてゐる大人として過された。さうして斯うした待遇が私には嬉しかつた。

五日にわたる旅の終、私は妙高山麓の燕溫泉から關を過ぎて、關山の驛へと急いでゐた。さしもに續いた秋晴もいよいよ今日を限りと見えて、振返りがちに行く妙高の山頂をかすめるやうに、西の方から幾筋もの卷雲が美しい青空に流れ出してゐた。茫々と波うつ薄の高原、その銀色の穗波の上に頭だけ見せた黑姬山。日光の金粉散らす秋の大氣に包まれたやうに、演習場の銃聲が柔かにロロン・ロロンと響いてゐた。

私は一軒茶屋と呼ばれてゐる古い茶店の前をすたすた通つて、行手に關山の宿の高い杉の防風林を見ながら進んだ。十月とはいへ、正午に近く、影も無い野の道は汗ばむ程に暑かつた。さつきから咽喉の渴きを覺えてゐた。私はあの茶店へ立寄らなかつた事を悔いてゐた。

すると私の先を二人連れの若い女が行く。關か燕の溫泉宿の女中らしかつた。その二人が熟した房の一杯ついた山葡萄を、眞赤な葉ごと、長い蔓ごと、幾本も手に卷いて下げてゐた。まるで焰を持つてゐるやうに。それがこんな燦々たる秋の陽の中で、彼女等を餘計に美しく健かに見せた。

私の步調はやがて彼等に追着いて、しばらくは其の女達と並んで步くやうな仕儀になつた。冬が來れば忽ち賑かなスキー地になる土地の事とて、宿屋の女中らしい彼等も愛想よく此の季節外れの客に會釋した。

「君達は何處」と私は訊いた。

「關の者です」と、如何にも越後生れらしい美しい一人が答へた。

「何處へ行くの」

「暇たものですから關山の家まで遊びに行つて來るんですの」

「その山葡萄を一二本分けて貰へないかね」

「これを？　どうぞ。今朝取つたんですの」

「綺麗だね」

私は感心してさう云ひながら二人から一本づゝ貰ふと、道端へルックザックを下ろして、其の外側へ卷いた蔓を結びつけた。其時彼等の一人が私の例の紐へ眼をつけたらしく、

「これも綺麗ねえ、好い柄じやないの」と連れの女に云つてゐるのが聞えた。

私はよく考へもせずに葡萄の禮心に幾らかの金を出した。女は「そんな物を」といふ顏をして斷然受取らなかつた。それは其筈だつた。彼等は私の所望に對して快く與へたのであつて、決して賣つたのではなかつたのだ。

私は少し赤面しながら、然し咄嗟の間に好意への返しを考へついて、手早く例の紐をほどくと其れを膝ではたいで彼等の前へ出しながら云つた。

「二本貰つたから二本御禮だ。これは事によると帶止にもなるし、失敬だが腰紐にもなるかな」

「でも、何だか御氣の毒ですわ。こんな綺麗なの」

「いゝんだ。手製だよ。スキーの時に東京の人達が來たら見せてやるといい」

「では折角ですから頂戴しますわ」

私はさういふ聲を後に聽きながら、汽車の時間に間に合ふやうに道を急いだ。赤啄木鳥の詩を模樣に出さうと苦心して作つて呉れた妻に、此のいきさつを儕どう話さうかと考へながら。然し又幾らかは、樂しかつた旅の終のコーダとしては適はしい、此の小さい挿話の甘美な後味を味ひながら。

こころ

山へ行くといふので、いざ我家を出ようとする時、又それに續くいくらかの時間のあひだ、私はきまつて或る輕快でない、胸につかへる物のあるやうな、重い、ぎごちない心持を經驗する。

言ひ置くべき事はすでに言つた。ルックザックの紐はこれを最後と結ばれた。ステッキを置き添へて、油のにじんだ靴は玄關にならんでゐる。

もう忘れた物も無ければ、果たすべき義務といふものも無い。もしも此の上なすべき何かが

あるとすれば、それは私が「出發する」其事である。さつぱりと、元氣よく。そしてもしも出來るならば、朗らかにさへ。

あゝ、それにも拘らず、此の何か引掛かるやうなものは……

私達はちつとも新婚の夫婦ではない。子供も十歳か十一であつてみれば、もう今が可愛い盛りだといふ程ではない。それに私が山へ行つたり旅行したりするのも、ひどく珍らしい事ではないのである。すべては十年の歳月相應に經驗され、頻度の大はすでに一種の習性を作り、家庭生活の諸場景に對してそれぞれ型のやうなものを作り上げてゐる。其の上、私の山は、およそ危險からは遠いのだ。

否、いつの出發に際しても、きまつて私の感じる此の氣持の上の「勝手の惡さ」は、樂しみの分け前の不公平に其の根源があるやうに思はれる。苦しみも喜びも共に分け合つてゐる生活の中で、又しても自分だけの樂しみのために行くといふ、謂はゞ良心の咎めと憐愍の情との混じり合つた氣持である。

自然の中へ行くことは、とりわけ山へ行くことは、少くとも私のところでは、喜びの最も大きなものゝ一つと信じられてゐる。私の家族は私のあらゆる熱情に參與してゐる。藝術や自然

に對する私の愛は、また彼等にも反映してゐる。その彼等を家に殘して、彼等の無二の憧れである山へ自分一人で行くといふ事に、（彼等が全く無私な、自發的な好意をもつて私の思ひ立ちに贊成し、私のために必要な一切の準備をし、そして最も氣持よく出發させて吳れるいつもいつも）、私は何かしら濟まない、どこか悔恨に似た心持を味ふのだと云つたならば、或は何人かの同感を得るであらうか。

かうして常に心を後に殘しながら、やがて一層廣大な世界が私に開いて見せる光景の中、その輝く日光やひらめく風の中で、全く一枚の木の葉の如き者としてひるがへりながら、やはり私は思ふのである。一般に命あるものの本來の孤獨と、その孤獨から花咲けばこそ貴く美しい愛や、友情や、憐愍に對する、共感、尊敬、感謝などの基調無くしては、私の「文學」から其の最善の物の生れるよすがは無いであらうと。

○

行くほどに、私の路の對岸へひとつの部落が現れる。自然の中の庭のやうな山村が。北には山を背負ひ、斜面には雛壇のやうなテラスを重ねて、其の一段一段に農家がならび。

南からの日光はあます處なく其處を照らし、ひとうねりする溪谷が、涼しい響を上げながら、遙か下のはうで岩壁の裾を洗つてゐる。

それは自然の地形の壕や城壁によつて理想的に守護された一角で、もしも其處の路の上か畑の隅に立つとすれば、まさしく南西の方角に殘雪の山々を望むことの出來る地點である。

强い勾配をもつたあの厚い大きな藁屋根、落着いた澁塗の梁や柱、若葉に映える淸楚な白壁、眞靑な絖のやうな空の下の牧歌の村。

私は一目で其處を愛した。私は本氣になつて其處へ住むことを考へた。

あすこへ私は家を建てよう。そして其家は村のすべての家と全く同じで、決して全體の調和を破るものであつてはならない。私は努めて速かに其の人々の生活や風習に同化し、一擧にして土着の者のやうに成らなければならない。

私は其處で小さな百姓の仕事をし、物を書き、今までよりも一層自然に親しまう。村の子供達を集めて美しい話を聽かせてやらう。植物や動物を愛することを敎へよう。出來たら自分の家の一間を彼等のための圖書室にしよう。その間には觀察や採集の仕事も勉强しよう。私は此の地方の植物志や動物志を編まう。望遠鏡を手に入れて、自分の小さい天文學も試みよう。風



我家の上を過ぎる雲

や雲を觀測し、氣溫の統計も取る事にしよう。それから、それから……

自分の底知れぬ空想に醉ひながら、私は其の山村を後にして尙も爪先あがりの路を進む。兩側に若葉の幕を張つた路は、揮發する樹液の香に噎せかへるやうである。やがて又視界がひらける。水量の減つた谷の上、暑い日光に曝された伐採地の下、目に痛く反射する眞白な石灰岩の岩壁に脅かされて、さつきの村よりも遙かに貧しい、もつと家數のすくない一つの部落が現れる。蒟蒻や三角黍の乾燥しきつた砂礫まじりの畠、重たく苔蒸して今にも崩れさうな藁屋根と、漂白した骨骼のやうな柱とを持つた哀れな家々。此の一握の部落、それは半ば立枯れした樹上に懸かる、鴉の巢か何かのやうに見える。

いや、私は此處へ住まはう。此の悲しく乾からびた、恩寵すくない自然の片隅でこそ、自分の一層積極的な、更に創意に富んだ生活は營まれるだらう。私は綠野と森林と湖水とのワーヅワースの詩のかはりに、嵐の中に絕えては續くオッシャンの歌を我物とする事が出來るだらう……

さうだ。そして、しかも之亦一箇の夢想に過ぎない。

してみれば、私が行く先々であらゆる場所に心ひかれて、其處に住むことを考へるのは、こ

れは單なる「浮氣」であらうか。

いや、私はさうは思はない。路傍一輪の花に眼をとめて、眞に愛と讃嘆とをもつて其れを見る者は、眞に其の美にあづかる者は、すでに其の花と共に生きたのである。彼にとつて、それは最早やひとつの經驗された世界である。全靈を傾けて愛した其の花を、彼はその恍惚の一瞬と共に我物としたであらう。

私の愛した多くの山村や平野の部落。その美しい姿は「夢想」の瞬間から忽ち私の版圖となり、其處からの路は悉く私にとゞき、千百の村々に通じる記憶の廣場のまんなかに今や私は立つてゐる。

橡の實

書齋のなかの或棚をほとんど一段埋めるやうにして、寺田さんの本がぎつしり並んでゐる。同じ裝釘で堵列してゐる全集は見たところ幾らか硬くて寒いやうな氣がするが、單行本のはうには著者の人柄や趣味の豐富なニューアンスが、色々と其の時々の表現をとり、風懷をまとつて、親しみ多く美しい一隅の世界を形づくつてゐる。

此段にこれからも未だ全集の殘りがとゞくために、そのうちには故人の著書で一杯になるのである。さうしたらば端のはうに同居してゐるジュリアン。ハックスリー氏に場所を明渡して

貰はなくてはなるまい。「一生物學者の隨想集」や「鳥の觀察と鳥の動作」などに、どこか別の處へ移轉して貰はなくてはなるまい。私はそれを、これも寺田さんとは滿更ゆかりの無くもないアンリ・ポアンカレの本と並べるやうにしようかと思つてゐる。だが今、そんな自分事はどうでもいい。

然しどうでもよくはないのは其棚にころがつてゐる二粒の橡の實だ。寺田さんがなくなられてから間もなく出た「橡の實」といふ本の前に、干からびてころがつてゐる本物の橡の實だ。これは去年（昭和十一年）の九月、秋雨にけむる中津川の谷奥で私が自分で拾つて來たものだ。

肉は落ち、皮はちゞみ、凝つて栗いろの枯淡と化した二顆の種子。これを手の平へ載せて見てゐると、あの雨と霧とに濛々ととざされた中津川の溪谷や、秩父の山奥の暗い佗びしい原生林や、切立つた岩壁へあやふく懸つた棧道や、そこに蒴果の皮が裂けてころ〳〵轉げてゐた此の橡の實や、それを濡れながら拾ひあつめた時の氣持などがいちどきに思ひ出される。

私たちは信州梓山から、信濃、上野、武藏の國境をなす三國山を東へ乘越して來たのだつた。一行は案內人の親子を加へて五人だつた。戰場ケ原の下あたりで昆虫や植物の採集と撮影

とに手間どつてゐる間に、天氣がだん〳〵惡化して、國境の峠へ立つた頃には雨になつた。金峰も朝日も亂雲の水びたしになつた。その雲は見るみるうちに國師と三寶とをむしばんで、やがて彼等をも塗りつぶした。黑々と連なつてゐた山々と自分たちとの間に雨雲の足が烟のやうに垂れ下つたので、空間は却つて明るくなつたやうな氣がした。然しその明るさは、登山者は誰でも知つてゐるとほり、摺硝子のやうに單調で失明したやうに味氣ないものだつた。

一行は三國山の頂上を北から東へ捲いて、中津川の上流を大ガマタ澤と信濃澤との二つに分ける黑木の大尾根を降つた。いよ〳〵本降りになつた雨と、往手をさへぎる無數の倒木と、たえず躓いたり滑つたりする惡路との、約八〇〇米の急降下だつた。尾根が瘦せて小徑が岩とつる〳〵した樹の根つこばかりの處では、或は左手信濃澤の空間をへだてゝ色づき初めた上武國境の連山が見えたり、或は右手漠々と霧をつめこんだ大ガマタ澤の馬蹄形の谷のむかうに、十文字の峠路が物悲しく墨繪のやうに仰がれた。しかしさうした眺めも僅かのあひだの慰めで、一行が此の一里の山稜をくだりつくして、二つの澤の落合ふ袋の底のやうな河原へおりたつた時には、周圍はたそがれのやうに暗澹としてゐた。たゞ見る兩岸の谷壁と雲の垂れ下がつたその横腹、淙々と流れる水の眞上だけわづかに一筋の空をのこして、あとは仄暗くおほひかぶさ

つた闊葉樹の原始林。一羽のカケスの聲もなく、一羽のカハガラスの姿もなく、聾になつたやうな厚ぼつたい沈默の、其處はまつたく奥秩父の心臓部だつた。

そして私が問題の橡の實を拾つたのも實に其處での事だつた。

いつ止むとも見えない雨と霧とが私たちの旅の心を暗くつめたくとざしてゐた。それに連れの一人が腰を痛めてびつこを曳き、捕虫網の柄を松葉杖のやうに突いてゐた。おまけに此の谷で最初に出會ふことの出來る部落、今宵の泊りの中津川は、未だ二里ばかりも下流にあつて、其の間は溪谷沿ひの登り降りが最も頻繁だとの事だつた。それならば足を機械的にうごかして、心に忍従を言ひきかせるの外は無い。それで私たちは戰場を知らせられない兵のやうに進み、慾望を捨てた者のやうに一すぢの小徑の意志にしたがつた、ところで、崖ぶちの其の小徑に、橡の實はころがつてゐた。其處にも、此處にも、雨に濡れて。其の栗色もつや〳〵と、卵のやうに愛らしく。

あらゆる不如意に取りまかれた者にも、自然だけは其の小さな創造物をもつて、どんなにでも大きくなるべき夢の喜びを與へてくれる。それが今の私には橡の實だつた。其の名は寺田さんの遺著の名と重なり合つて、深山の谷間の雨に濡れながら、幾顆の珠のすがすがしくも地に

委してゐる。

私は此の山旅の二三日前に全集の新聞廣告から切拔いて額へ入れた寺田さんの肖像の前に、此の實を供へることを思ひついた。私はなるべく形のいいのを拾つてポケットへ押込んだ。何か知らぬが心が輕く明るくなつた。歩きながら時々ポケットへ手を入れて握つてこすり合せると、一種樂しい手觸りと響とがあつた、其夜中津川の宿で私はそれを出して見た。翌日は鹽澤の泊りでも、食卓の端へならべて見た。そして秩父を後に東京へ近くなればなるほど、人知れずポケットの中の彼等の頭に觸つてみる事がいよ〳〵樂しい事に思はれた。

歸宅すると私は早速その橡の實を、お初穗として「寺田の棚」へみんな供へた。

其後幾つかは人に與へ、殘つた三粒のうち一粒は庭へ埋めて發芽を樂しんだがいまだに出ない。そして最後の二粒だけが、寺田さんと同じやうに、もう二度と苦んだり死んだりしなくなつてゐる。

信濃乙女

「ミサちやん、これ、わしさつぱり判らんが、言つてみて」
「どれどれ、これか。これは對頂角の問題ぢや」
「わし其の對頂角を忘れてしまつたぢや」
「忘れたのか、それではな、二直線が交つて出來る四つの角のうちで、隣り合はん二つの角をたがひに對頂角といふのぢや。いゝか。それで、角ＡＯＤと角ＣＯＢ、角ＡＯＣと角ＤＯＢは對頂角ぢや。な。それで此の問題の證明はぢや……」

「ミサちゃん、ミサちゃん。こゝの so that は何と譯すのかな、敎へて」

「これか。この so that はな、何々する爲にといふ意味ぢや。彼女は健康を恢復する爲に海岸へ行つたぢや。海岸へ行つたから健康を恢復したではないのぢや。いゝか。そら、お前こゝにも自分で書取つてあるな、彼は目的を達する爲には手段を選ばないと。これと同じぢや。わかつたな」

「わかつた、ありがと、ミサちゃん」

「ミサちゃん…… ミサちゃん……」

汽車は鹽尻峠を後にして五月の朝の松本平を走つてゐた。明けがた近く一雨ザッとあつたらしく、柔かい亂雲の名殘りが悠々と盆地の空を游いでゐる。左手の窓には未だうづたかい殘雪を朝日に染めた北アルプスの靑と薔薇いろとの雄渾な連峰、右手の窓には今日登らうとする美ケ原熔岩臺地。女學生でいつぱいの三等列車のまんなかで、新鮮な朝の太陽を顔の半面に浴びながら、僕はこの聰明なミサちゃんといふ子の横顔を、姉らしく、母らしく、しかも正に十五六の小娘である其の項（うなじ）を、饑えた眼に「新らしい糧」のやうに飛込んで來る風景と一緒に、むしろ信州全體への敬意をもつて眺めてゐた。

べにばないちご

けさ戸棚の奥から行李をひきだして捜し物をしてゐたら、圖らずも、むかし朝鮮の田舍で手に入れた一枚の古い李朝の白磁の皿が出て來た。この思ひがけない再會にすつかり喜ばされて、それを綺麗に洗つて梅雨晴れの窓に近い机の上へ置いて眺めてゐるうちに、遠い思ひ出の三韓の空の下の、をちこちの圓い藁家から窯の青い煙のたちのぼるあの永登浦の春の田舍が、我が二十代（ヴァン・タン）のあえかなエレジーを伴つて蘇つて來るやうな氣がした。

僕は此の皿に盛るべく今の氣持に最もふさはしい物を考へてみた。林檎やレモンでは月並だ

し、枇杷や桃では俗であらう。もつと非凡で清潔で、野生的に美しくて、現在の詩的意慾の熱い渇きをいやすに足るもの……

あゝ、べにばないちご！　さうだ、あれを措いて何がある！

槍ケ嶽の東鎌尾根、天上澤の目も綾な雪溪に近く、とある斷崖に臨んで、べにばないちごは生つてゐた。濛々と吹きつけるめくらのやうな白い霧、その晴れ間に陰顯する桔梗いろの盛夏の空と北鎌の無殘な齒形。やがてパアッと照つて來る太陽の身にしむやうな暖かさ。べにばないちごはあの毛むくじやらな、ぎざぎざな葉の重なり合つた枝先に、さはればほろりと取れて落ちる、舌に載せれば忽ち溶けて爽やかに散る、霧の雫と日光と甘美な樹液とが凝つて出來たやうな、涼しく甘い透明な、黄赤色の寶玉の實を戴いてゐた。

其のべにばないちごを枝ごと葉ごと、古い李朝の白磁の皿に盛りたいとは、常に心の渇きを訴へる詩人のこれも或朝の夢だらうか。

遠い國での話

谷のながれと果樹園とに圍まれた、南佛蘭西の山間の靜かな村落。若い小說家ジャン・ジオノが或る夕方其處の小さい宿屋へ泊る。自分の町のマノスクから、いつものやうに、彼は遠足して來たのである。

ジオノは最前から一冊の本を讀みふけつてゐる。するとさつき珈琲や果物を運んで來た宿の娘のデルフィーヌが、又何か用はないかと訊きに來る。ジオノは未だ讀みつゞけてゐる。

「讀書をお好きですの」と娘がたづねる。

「好きです」

「何を讀んでゐらつしやるの」

ジオノは氣の毒さうに云ふ、「英語ですよ。ホイットマンです」―

娘は重ねてたづねる、「面白いんですの」

「まあお聽きなさい」

さう云つて、彼はあの亞米利加の民衆的な大詩人ウォールト・ホイットマンの詩を即席に佛蘭西語に意譯して聽かせる。ジオノが顏を上げると娘の眼が大きく輝いて彼を見つめてゐる。往來の向う側で一人の男が果物を籠へ詰めてゐる。其男がジオノの讀んでゐる聲を聽きつけて、手を振りながら遣つて來る。

鍛冶屋がかん〳〵鐵砧を叩いてゐる。果物屋が怒鳴る、

「サンソンブル！　靜かにしろ！」

するとサンソンブルと云はれた鍛冶屋も金槌を置いて、革の前掛下げて聽手の仲間へ加はりに來る。

もう聽衆は六人になつた。ジオノが一寸でも止めると彼等は催促する、「次は」とか、「それ

から」とか。

娘が云ふ、「これで我慢しませうよ、もうくたびれてゐらつしやるから」

「さうだ」と溜息まじりの聲が答へる。

「これが英語なのが本當に殘念さ」さう誰かゞ如何にも殘念らしく云ふ。

そこでジオノは家へ歸つたら此の本の飜譯を送るといふ約束をする。「忘れないで下さいよ、之だけは」とか、「代はいくらですね」とか、「いや、私達は金を拂ひたいんです」とか、そんな言葉が矢つぎばやに發せられる。とうとう「あんなに親切に云つて下さるんだから頂戴する事にしよう」といふ話になる。ジオノは早速娘のデルフィーヌを代表にしてそのアドレスを書きとめる。

間もなく山村の彼等は一冊のホイットマンの譯詩集を受取つた。南佛蘭西バス・ザルプの山間、溪流と果樹園とに圍まれた小さな村落に住む此の連中が。

ジオノは想像する……　夜である。一人の讀手が多勢の聽手にとりまかれて、燭臺の明りをたよりに。送られた本を朗讀してゐる。蠟燭が暗くなる。「鹽を入れてくれ」と讀手が云ふ。誰

かゞ默々と一摑みの鹽を蠟燭へ加へる。又一しきり明るくなる。詩の心の美しさに皆の眼には涙がたまつて、それがヴェルドンの谷の水よりももつと光つて綠になる……

ジオノはサンソンブルから一通の美しい手紙を受取つた。鍛冶屋の書いた其の手紙をこそどんなにか知りたいと思ふのだが、ジオノは吾々に見せては吳れない。

「此世には、人が書物の中へ取入れる權利の無い物が幾つかある」とジオノは云ふのである。

みんな日本からは遠い國での話である。

或朝のおもひ

九段の小學校へかよふ小さい我子の後ろ姿を門の前で見送つたのち、そのまゝ池のはうへ朝の散歩の足をむける。風致區の林の周圍や濕地の白い枯蘆の上には、まだ薄い霧の縞がたなびいてゐる。然しその林からぬきんでた欅の大木の煙のやうな梢からは、そこで一夜を明かしたらしい眞鶸の群が、もうあの金屬的な爆鳴をそゝぎ出してゐる。

むかうに北多摩郡の森や畠をひろ〳〵と見わたす道を僕は行く。朝が未だひどく早いので、地平線のどの方角にも人の影はない。踏んでゆく土はしつとり濕つて、適度の彈力と深い信賴

とを感じさせる。僕は何といふ事なしに木靴を欲しいなと思ふ。ふたたび始まつた田舍の生活を、今度こそは前よりももつとしつかりと、もつと細かに、言ひかへればもつと踏みしめるやうに味ひたいからであらう。

近くの麥畠から二羽の雲雀が代るがはる空へ揚がつて、眞靑な虛空から光の急流のやうなきら〳〵した囀りを撒きちらしてゐる。眼を上げてじつと見てゐると、なんだか雲雀のゐる處だけ天の底が拔けて、ほかよりも餘計に明るくなつてゆくやうな氣がする。地平のはてには雪を象嵌した連山の波、そのいちばん南の最も大きな波濤の上に眼もさめるやうな眞白な富士。あの蜿蜒とつゞいた山々の頂や襞のあひだに此の足が殘して來たさまざまな思ひ出の痕のあるといふ事が、今朝の僕を何か誇らしく、男らしく。ゆつたりした氣持にさせる。

池への道はまつすぐだし、途中には障碍物も無いから、ポケットへ突込んで來た薄い本を讀みながら步く。メダンでのジュール・ロマンの講演「ゾラと彼の實例」を印刷に附した、佛蘭西の新刊の小册子である。

一人の作家が偉大な實行家であると同時に、偉大な先驅者でもあるといふ場合は非常に稀である。此の二つの機能は、普通には、たがひに排斥し合ふもののやうに見える。偉大な先驅者

といふ者は、どうしても不完全なもの、苦しみ歪んだもの、不安定なもの、不滿なものなこの間から選ばれて出て來る。かういふ事情の中で、たゞ少數の創造者だけが、何よりも先づ自分の欲するところをどし／＼實現しながら、同時に未來の野に種を播く仕事もやつてのけるほど超人的に多產な力を持つてゐる。此の矛盾した力の實例が、ジュール・ロマンに云はせると、シェイクスピアであり、ベートーフェンであり、バルザックであり、ユーゴーであり、まだゾラである。

史上いかなる時代にも、今日のやうに智識階級の勇氣を必要とする時代は無かつた。明らかに視、高所から視、遠方を見とほす事が、今日ほど死活に關する喫緊事であつた時は無い。あと僅かの盲目が、少しばかりの逆上が、怯懦が、たちまち最惡のカタストローフの中へ吾々を投込んでしまふだらう。然しこの無間奈落への戰慄すべき滑落から現世界を一擧に轉向させるには、理性の命令に對する吾々のエネルギーの突然の行使が、精神の英雄等の一齊の奮起があれば或は足りるかも知れない。それが爲には世界中の吾々のあひだに道德的組織が、普遍的な秩序が、確乎として結成されなければならない。吾々すべては此の悲劇的な時機にとるべき役割を持つてゐる。各人の義務は何かしらに登錄されてゐる。そして此のやうな意識を持つため

に、今や吾々が祝つてゐる「正義」の不滅のまなざしの下に今日斯うして集まつた事は愉快である。

大體以上のやうなのが歩きながら私の讀んだ最後の幾頁かである。

ジューール・ロマンの所謂「怯懦」が果してどういふものであるか此處では明らかにされてゐないが、然し彼の云ふ「各人の役割」の如何によつては、それが一時怯懦に見える事もあるであらうと思はれる。たとへば、地表を流れる水にくらべれば、地下水の仕事が或はひどくまだるこしく、或は怯懦に見えない事もない。しかし侵蝕、運搬、堆積といつたやうな眼に見えて派手な仕事をする地表水や、一擧にして桑海の變を演ずる洪水と比較して、地下水の眼に見えぬ仕事のはうがより根源的な、より永續的な、より涵養的な作用をしてゐるかも知れないやうに、人間の仕事にしても、其の時代のアクチュエルな側から見れば一見怯懦、迂遠ともとられるものが、案外根強い、實のある、建設的な、そして永く後代の糧たるに堪へる力を、或は靜かに醞釀してゐるかも知れないのである。

さう考へると、やはりジューール・ロマンは佛蘭西人だといふ氣がする。

そんな事を思つてゐるうちに、其の地下水が少し性急に地表へ飛び出した善福寺の池の緣へ

来た。私はいつものベンチへ行つて腰を下ろすと。すがすがしい朝の水面を見わたした。

雲の中で苅つた草（追悼）

種山ヶ原の、雲の中で苅つた草は、
どごさが置いだが、忘れだ、雨ア降る。

種山ヶ原の、背高(せだか)のすゝき、あざみ、
苅つてゞ置ぎわすれで、雨ア降る、雨ア降る。

種山ケ原の、置ぎわすれの草のたばは、
どごがの長嶺（ながね）で、濡れでる、濡れでる。

宮澤賢治作「牧歌」の一節

大にもあれ小にもあれ、彼が考案し又實行した多くの仕事、内外の衝動から彼自身のうちに繼起せざるを得なかつた諸々の課題に對する眞面目な着眼と、その個性的な獨自の取扱ひ方、彼の抱いてゐた雲の中のものであるあの柔軟な夢想、北上山地の古期の地層をつらぬいて露出した橄欖岩や蛇紋岩の岩脈のやうな、あの珍貴な爽かな藝術の構成・色彩、時には川沿ひの春の漠々たる憂鬱と渾沌との奥で、まだ幼いモティーヴでしか無かつた未來の歌、常に問題の自己提出と設計と解決とにこもごも多忙だつた若い生活開拓者の日々、總じて郷里岩手縣下に於ける彼宮澤賢治君の生き方といふものは、確かに今日のやうな偏心的な社會情勢の大渦巻（メイルストロウム）に捲きこまれながら僅かに一身を支へてゐる吾々が、出來ても出來なくても兎に角それをもつと大

道的な、もつと靑天白日下的に自由自在なものにしなければならぬと突張る推進力と、及びさういふ生活の、未來にかけてのひとつの有力な資料、ひとつの暗示豊かな雛形であつた事に間違ひはない。

彼の廣範圍の讀書とその非凡な解像力とには眞に驚くべきものがあるが、更に彼がその讀書から得たまゝの智識の岩漿を、彼自身の中心目的といふ硬い深成岩に接觸變質させて、そこから全く新奇の用途に使はれる貴重な材料や實地の用に供される壤土を產み出した創造力乃至實行力といふものは、彼が所謂「詩人」であるだけ、その着眼に高處的な點と共に一層大いに感嘆されなければならない。

彼は、出來れば此世のあらゆる學問を一身に修めたいと思つてゐる人間の一人だつたに違ひない。其の證據は彼の書いたもの、彼のした仕事の隨處にてきれきと光つてゐる。しかしそれは結局不可能な根數だ。そこで生活の中に瀰漫すべき平俗（ライック）の叡智、民衆の手に奪還されて其處から一齊に開花すべき百科全書編纂者（アンシクロペヂスト）的な廣汎な智識、つまりさういふ老ファウスト的乳糜が、未來の民衆生活のいきいきした新樣式を打建てるための缺くべからざる要素として改めて強く要求される事になる。此の要求はまさに當然であつて、少くとも其の限りに於いては格別ひど

く先見的なものではないが、それにしても、之を單に筆舌の上の御題目に終らせず、先づ出來るところから實地にはじめ、身を以て其の一部分たりとも實行し、現に角農藝家であり詩人である人間として眞にたつた一人、こんな背負ひきれない草案の試みだけでも遣つたところに彼の偉大さがある。

多分もう四五年になると思ふが、彼は上京中の或夜東京の某管絃樂團のトロンボーン手をその自宅へ訪問した。海軍軍樂隊出の此樂手は私の友人で、一方セロも弾き、詩が好きで、殊に宮澤君の詩集「春と修羅」のあの男らしい北歐的な、ノルマン的なリヽシズムを愛してゐた。其時の宮澤君の用といふのが、至急簡單にセロの奏法の手ほどきと作曲法の初歩とを教授してくれと云ふのだつた。併し之はひどくむづかしい註文で遂に實現出來ず、やがて一日か二日で宮澤君は郷里へ歸つたのだが、その熱心さには、ヴクナァのファンファールを吹きまくつて息一つ彈ませない流石のトロンボーン手さへ吐息をついて驚嘆してゐた。

獨學といふものには往々獨善の香がして、人間を貧寒な自尊の中へ曳擦りこむものだが、彼の場合にはそれが如何にも非密教的で野外的で、自給自足の意味が大きく且つ廣い。これは彼がその學問活用の目安を民衆の上に――彼の言葉に從へば「朋だち」の上に――置いてゐたから

である。彼はその精神の最も美しい高揚の中で叫んだ。「おゝ朋だちよ、いつしよに正しい力を併せわれらのすべての田園と、われらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の藝術に創りあげようではないか！」と。吾々の生活を第四次元の藝術にまで建築するといふ事は、畢竟社會生活の理想的完全未來型への夢である。そこで人間が彼のやうに生來の詩人だと、その眼が當然次の時代へ向けられる。彼の仕事に兒童教育的(ペダゴジック)な方面のあるのは其の爲である。かくてその周圍の大人と子供、彼等に及ぼした宮澤君の感化といふものはかなりに深く大きいものであつたに違ひない。私は彼の獨學に毫末も私有財産蓄積的臭味の無いのを見て喜ぶと共に、彼の後進の間に益々獨學の氣風の廣く行亘る事を祈つて止まない。

面積九百八十八方里、我國第一の大縣、奥羽中央分水山脈と北上山脈とが東西に盤桓し、其の間を北上川の本支流が縱谷橫谷の深い鑿の刄で刻んだ彼の郷土。それは私に日本での北歐(ノオル)を想はせる。宮澤賢治君はあくまでもその郷土と民衆との詩人だつた。「彼はその地理的要素と、その自然の生活と、その河川と、その湖沼とを體現した」(ホヰットマン) 種山ケ原の草に寄せた彼の「牧歌」には、奥羽地方の古代民謠の豪壯な哀調が流れてゐながら、其の上に夏の白雲の悠々と浮かぶ早池峰(はやちね)の殘丘(モナドノック)を思はせるものがある。私は花卷の町も猿ケ石川も知らない

が、彼の作詞作曲になる「イギリス海岸の歌」を口吟めば、北上地溝帶の荒寥たる河原を見る氣がする。詩人として彼は最もよくその鄕土の眞實を歌つた。「民衆は彼等の詩人を通して知られ、理解されたがつてゐる。諸々の眞實の階級の中で、詩的眞實こそは其點最も有効なものに思はれる」とジョルジュ・デュアメルが云ふ。そして宮澤君を通して既に十分馴染になつた土地を訪れて其處の人々に會ひ、その山地や段丘をさまよひ、雲の中に苅り忘れられた草を發見して彼の俤を偲びたいといふ事は、今や私の宿願となつてゐる。(昭和九年)

春

瑞西の春が先づ湖畔から始まるやうに、武藏野の春は小川の緣から笑ひはじめる。

二週間ばかり前に北西の風のペイジェントの中で遠く花粉を散らしてゐたネコヤナギは、穩かな日光を浴びて若葉の包をほどいてゐる。ハンノキに纏ひついたスヒカヅラも既に今年の葉を出して、冬を忍んで來た去年の葉と仲睦じく親子のやうに一緒にゐる。五月六月の水邊の歌であり、平野を訪れる郭公の伴侶であるノイバラの爲に春は未だ幼いが、その根元の濕つた土くれの上では、ほろほろと剝げて草の中へ落ちた莖の脆い箔かとばかり、淡靑いタチツボスミレ

が可愛い臆をあけてゐる。小徑と水との界にひしめいてゐる生き生きした綠の群衆は、生れたばかりのコモチマンネングサの子達である。その群衆の隣には一名カントリサウのカキドホシが、癇の強い子供はゐないかなと毛むくじやらの蔓の手をのばしてゐる。

タネツケバナの白い花の穗が顫へてゐるところ、水はぬるんで其處は又蟲や魚の世界である。柔かい透明な生着（うぶぎ）を脫いだオタマジャクシの群は、突然放たれた廣い世界で自由の使ひ途が分らないのか怖いのか、ちよろちよろ泳いでみては又兄弟達のそばへ歸つて、眞黑な「押しくら饅頭」をやつてゐる。しかしタガメやタイコウチはもつと獨天下が好きだと見えて、蛙の子やドヂヤウの息子などの幼稚な國際スポーツには眼もくれず、のそりのそりと泥の上を步きながら二本の大鎌で水中の狩を樂しんでゐる。蘆の芽が角ぐむところ、ミヅタガラシの絹絲のやうな白い根が水の流に搖れるところは、ゲンゴロウやミヅスマシのプールである。其處には又ヤンマの幼蟲やトンボのヤゴが、幾回目かの脫皮をしながら、來るべき光明と自由との初夏の日を、憂鬱な夢想の中で數へてゐる。そしていくらか流の速い、アカウキクサの屋根やアヲミドロの綿の止まらない水中には、武藏野に分布する用水の水源池近傍の、鄕士とも言へるトゲウオの一種トミヨが、さらさら動く砂の上を、刺股（さすまた）や袖搦み橫たへて精悍な眼つきでうろつ

いてゐる。

瑞西の春の笑顔が先づ氷河湖の星の瞳から始まるやうに、武藏野のよみがへりを告げる小川のほとりは一人の詩人にとつてその放縱な夢の天地であると同時に、冬ぢうを閉ぢ込められた子供達にとつても亦盡きる事ない樂しみの寶庫である。

その樂しみを忘れかねてか、或日親戚の男の子が今年も亦やつて來た。

子供は私の小さい娘と川狩に行く。向うの高い松林で今年の巣の事を色々議論してゐるヲナガが「ゲーイ・ゲーイ」と喧ましく鳴き立てやうが、護謨の長靴で踏んで行く足の下に、哀れなアカネスミレが潰されやうが、そんな事は氣にもとめず、心も空に水のほとりへ驅けて行つたが……

さて夕方、私達の閑居を一層閑居らしく半日留守にしてゐた子供達が、賑かに歸つて來る。獵の結果は豐富である。トミヨ、タナゴ、モエビ、ヤゴ、ゲンゴラウにミヅスマシ、豚らしいホトケドジヤウさへ幾匹かまじつて、二つの水槽（アクワリウム）は彼等の影繪や横顔で織るやうな盛況である。それを食卓の上へ有難さうに据ゑての晩餐。思ひ出、説明、議論、手柄話。食事も長いが子供達の話は尚長い。たうたうさんざ催促されてやつと湯に入り、沼くさい手足を私の妻にごしご

し洗つて貰つて、くたくたになつて寢てしまつた。

明日が來る。男の子は待兼ねて飛び起きると忽ち昨夜の水槽を見に行く。トミヨが二匹死んで一匹になつてゐる。ヤンマの幼蟲がカハトンボのヤゴを食つてゐる。子供はしよげる。水槽を見つめながら、眼を大きくして、片手の拳で鼻をこすつてゐる。それを一つ年下の私の娘が姉のやうに慰めてゐる。

男の子は何か幼い用事があつて今朝歸らなければならない事になつてゐた。自分の取つただけを叔母である私の妻に壜へ入れて貰つて、それを持つて歸るのを樂しみにしてゐた。それなのに魚が減り、たつた一匹のカハトンボの子が半分になりかけてゐる。

妻は云つてきかせてゐる。

「川へ行けばいくらだつて取れるんですからね。榮子でも叔母さんでも行つて取つて置いて上げますから、澤山取つて置いて上げますから、さあ、男の癖にめそめそ泣いたりしないで、これだけ持つて今日は元氣よくお歸りなさい。さうして又いらつしやい。ね、分つたでせう。叔母さんが取つて置いて上げるから」

私は洗面を濟ますと慰めに行つた。そして死んだ魚は丁度いいから小さい試驗官に入れて、

アルコールを滿たして、栓をして、トミヨの液浸標本を作るといい。カハトンボのヤゴは今日築子に取りにやつて、近い内に屆けて上げる。そんな事を云つてみた。

從兄弟の次男は私の妻の帶へ兩手を掛けて未だしくしく泣いてゐたが、やがて私には聽えない程細い聲で何か一言云つてゐた。その拍子に、子供の背の高さまで持つて行つた妻の顏が眞面目になり、眼が光つて、曇つた聲がこんな事を云つた。

「さうね、あなたの云ふ通りね。でもやつぱり諦めようとしなくつちや……」

これを聽くと小さい男の子はやつと泣く事をやめて、それからは機嫌を直し、風呂敷へ包んで貰つた壜を下げて、西荻窪から遠く目黑へ歸つて行つた。

娘を一緒に停車場まで送らせて遣つた私達夫婦は、顏を見合せて微笑した。そして私は思ひ出して妻に訊いた。

「さつき何かお前に云つてゐたね。なんと云つてゐたの」

「あゝ、あの時ですか。あれはね、斯う云つたんです。叔母さま、叔母さまは幾らでもゐるから取つて置いて上げるつて云ふけれど、僕が惜しいと思ふのはあれなの。別のじや無いの。あの死んだやつなの、ですつて」

さう云ひながら又泣蟲の妻の眼が光つた。

欲しいのと惜しいのとに正に違ふ。そして子供としては、況んや男子としては、大人や女のやうにさうたやすく「憐憫」を口にする事は出來なかつたであらう。

私達夫婦は二人きりで遲れた朝飯に向つた。窓のそとの棚ではアケビの蕾が紫に色づき、鳩がクウクウ鳴き、今日もまた生きてゐる身をしみじみと喜びたいやうに麗らかな、平和な、豐かな春の景色である。



朝の部屋にて

少女の日

自然研究。だが少くとも幼年期・少年期を通じて、私の育つた環境に、野外の光り。悦びの眞珠母であるところの斯ういふ言葉はたえて響かなかつた。

言葉の無いところには雰圍氣も無い。(何れが他の一方に先行するか私はよく知らないが。)

家は下町京橋の商家であつた。應接間や書齋のかはりに店と帳場があり、書生はゐないで若い衆と小僧がゐた。二棟の倉庫、二艘の持船。ルウベンスの繪から拔け出したやうな、眞赤な潮風くさい船長が、黑潮の新島や八丈島へ出て行つたり、雪もよひの小樽や函館から歸つて來た

りした。父は「旦那」で、母は「おかみさん」だつた。母は丸髷に結ひ、黒襟を掛け、店からは厳しく遮断された仄暗い奥の座敷や臺所で、女中達を相手に内助の仕事に忙しかつた。父は論語や實語教といふ本で薫陶され、殘りは自分で薫陶して、その處生の哲理は「實力」であり、ひどく排他的(エクスクルーシヴ)で、子供に臨むその態度にはいつも暴君の壓力があつた。そして私は其の眼に見えぬ輻射壓におびえてゐた。

七つの年の運動會に大森の八景園へ行くといふので、初めて新橋から汽車へ乘つて、汽車といふ物を初めて見た。私はその威風に心醉し、汽筒(シリンダー)や大動輪のあたりに立迷ふ「西洋」の精神に夢中になつた。それは淺草の觀音様や上野の動物園へ行く時の、赤や緑の扇形の方向板を屋根につけて、馬に曳かせるあの鐵道馬車とは違つてゐた。それは機械の英雄主義(ヘロウイズム)のやうなもので私を打つた。

中學の一年・二年、博物と作文との成績が優秀だつた時、父は褒めてくれるどころか、當の私を前に置いてにがにがしげに母に云つた、

「こいつは眞人間にはなるまい！」

それは科學智識普及のための月刊雜誌も、軍事智識普及のための少年科學雜誌も、子供の心

を惑はすやうな立派な寫眞も、自然科學列車（！）も、その美しいポスターも無かつた時代。言葉も物も事柄も、同時に年長者の温かい理解も、ひどく少ししか無い時代でもあれば周圍でもあつた。

文學にも學問にも全く縁の無かつた私の環境。その環境の重圍から一方の血路を開いて、落ちのびて、今在るところの私の世界」環境が人間を左右するか、人間が環境を打建てるか。私としては先づ此際、あの公算の使徒、あのきびしい社會學者達には半分だけ賛成を與へて置いて、さて、自分の主題に歸らなくてはならない。

今から三十年前の時代にくらべて、現代が特に寛容と理性との時代になつてゐるなどとは、併し私は思はない。むしろ今こそ意識的に寛容の徳を奬め、理性の力を擁護促進させなければならない時だと思つてゐる。

例を小さくして云へば、既に一箇の「人格」である子供のいゝ理由を遂に取り上げる事のなかつた自分の父の、あの不寛容、非理性的なスパルタ教育の弊害を肝に銘じてゐる私としては、今

度は自分が父親の番になつて、特に此事を感じるのである。

私もまた我子に壓力を加へる事はある。しかしこれは「私だけが特に好まざる事」を子供が爲すからではない。私の加へるのは普遍的倫理觀念からの壓力である。それが彼女を潰してしまはないで、いつも彼女から反省を壓し出せばいい。

子供が捕蟲網と毒壜とを持つて小川の縁へ蜻蛉の採集に行く。獵の結果は豊富である。カハトンボ、アオハダトンボ、トラフトンボ、ギンヤンマ……何れも完全な材料だ。又もや一つの箱を飾つて、今年の五月を記念すべき立派な標本が出來るだらう。

ところが午後になると三つになる小さい從妹が叔母さんに連れられて遊びに來る。八つ年上の彼女はすつかり喜んで、殘りの半日を夜までも遊びほゝける。壜の中の蜻蛉の事は全く忘れて。或は忘れたやうな顔をして。そして寢る。蜻蛉の死體には既に變化が始まつてゐる。

翌る日は學校がある。六時間を濟まして歸つて來ると習字の稽古に行く。夕方になる。夜は夜で宿題がある。算術、讀方、佛蘭西語の動詞變化 avoir と être……そして寢る。蜻蛉は腐敗する。彼等の腹節は極度に軟化して、直ぐに切れてしまふところまで進んでゐる。

私は默つて濟ますわけには行かない、

「お前は理科が好きだと云ふ。それで其の爲めにお前が欲しいと思ふ物は何でも買つて貰つてゐる。大人の持つやうな物さへ。それはいい。お前は標本を作るといふので蝶や蜻蛉や甲蟲を採る。殺す。それもいい。殺さなければ標本が出來ないから。しかし、ほかに面白い事が始まつたからと云つて、整理もせず、思ひ出さうともせず、毒罎へ入れつぱなしにして置いて腐らせてしまふのは惡い事だ。それは殺す事だけのために、生きてゐる者を、暑い野原や涼しい水の上でお前達子供と同じやうに樂しく、自由に飛び廻つたり遊んだりしてゐる者を、いきなりつかまへて締め殺したり毒で殺したりする事ではないか。さういふ子供は(大人だつて同じだが)蟲を採る事は出來ない。誰に向つても殺した事の言譯が立たない。それは行儀が惡いとか、顏や手足を不潔にしてゐるとか云ふよりも、もつと惡い、もつと恥かしい行ひだ」

子供は閉口する。すつかり弱つて、これからは屹度忘れずに始末すると云ふ。私は手傳つてやつて、どうにか蜻蛉を救濟する。しかし二三羽はもう手の施しやうが無い。小さい娘は駄目になつた哀れな蟲を手の上に載せて、悄然とそれを見てゐる。その眼に涙がたまる。宜しい！私が期待してゐたのは其の後悔と憐れみなのだ。たとひ睫毛のあひだの其の澄んだ美しい水滴ではないにしても……

私が野外雜記帳を持つてゐるので、子供も其れを持つ。私の帳面には「野生花」といふ題がついてゐる。子供はそれも眞似ようとする。いや、これはお父さんが考へた題だ。お前にはお前の考が、お前らしい旨い題があるわけだ。それで子供は色々思案した末に "Cahier de la Nature" といふのを思ひつく。ふん、なかなか善い題だ、それに極めるといい。そこで圓い鼻の頭へ玉の汗をかいて、學校でやかましく云はれてゐる通りの書體で表紙へ書く。

それ以來私は彼女の野外帳を時々見せてもらふ。頼んで。なぜならば。それもまた個人の日記と同じであつて。公表する目的で書かれたものでも無く、況んや他人が盜み見していゝ性質の物でも無いから。

幼稚な文章や繪で埋められた其の手帳は、たしかに野外帳の精神に叶つてゐる。それは、少くとも此の子供にとつては、金錢をもつて購ふ事の出來ない程の價値を具へてゐる。それで私は教理問答をそらんじて來た信徒に對する司祭のやうに云ふ、

「宜しい。お續け」

此種の帳面を年長者や教師が見る場合、それに批評を加へることは嚴重に愼まなければなら

ない。文章にせよ、繪にせよ、觀察態度にせよ、書體にせよ、ましてや假名遣ひにせよ、其場で直ぐに注意を與へるのは最もいけない。奬勵し、勇氣づけるために、特に褒めるべき點を指摘しての讃辭、これは又忘れても惜しんでもいけない事だと私は思ふ。

肝腎なのは子供に厭氣を起させない事、知らず識らずのうちに持續の習慣をつけさせる事、次の發展への自發的な興味を養はせ、刺戟してやる事である。文章をやかましく云つたり、繪を批難したりすると、子供は臆病になつていじけるか、惡くすれば密かに反抗するやうになるかする。叱られる事が又一つ殖えた。厭な義務を又一つ背負ひ込んだ。よせばよかつた。かういふ考を子供に起させたらもうお仕舞である。

しかし必要と考へた場合に、觀察すべき點なり要領なりを、豫め面白く暗示して置くことには贊成である。

お父さんは、小父さんは、或は先生は、何でも知つてゐると子供に信じ込ませる事は却つてよくないと私は思ふ。さうすると子供は彼等自身の觀察や、調査や、同定の勢力を飛ばして、

ちやうど今日の小學校で地理や歴史を暗記するやうに暗記してしまふから。勿論自然科學にも暗記を必ず必要とする部分はある。然し此際指導精神の眼目とするところは、飽くまで子供自身の探究である。そして吾々は彼等の水をこぼさないだけの容器、時には彼等の進歩の流をそれとなく導く兩岸でありさへすればいい。それに又實際吾々は何でも知つてはゐないのである。知らないで知つてゐる顏をするのは凡庸な教師であり、知らざるを知らずと云ふ者、これを眞の學者、或はソクラテスと云ふ。

「お父さん、柿は雌花にも雄花にも雌蘂と雄蘂が有るくせに、どうして雌花だけにしか實がならないんですか」

「雄花の雌蘂は小さくて實を結ぶ力が無いからだらう」

「雌花の雄蘂はどうしてあんなに乾いて小さくなつてしまつたんですか」

「雄蘂の役は雄花の方で引受けて呉れたからだらう」

「どうしてそんな風に定まつたんですか」

「知らないな」

私はすでに混亂してゐる。雄蘂雌花雌蘂雄花。それは詩人ポール・ヴァレリーとヴァレリー・

ラルボーよりもこんがらかる。それに役割の極まつた時期などは尙更知らない。

「神様がお定めになつたのか知ら」と子供は云ふ。私は科學の窮極に就ての英國の或新聞の質問に答へたアインシュタインの言葉を思ひ出す。しかし今、此の科學の入門者に、（彼女が如何にカトリックの學校に行つてゐるとは云へ）さう忽ち飛躍されては困るから、

「知らない。しかし考へたり調べたりして見よう。お前と二人で」と、極めて覺束ない返事をする。仕方が無い。自然界は廣大で、人間の知らない事に滿ち滿ちてゐるのだと云ふ事を、子供の奮發心のためにも强調するのである。

子供が遠足の朝、そして家では大掃除の朝、早朝の庭へ一羽の美しい小鳥が來る。子供が先づ見つける。家ぢうが興奮する。黑い鳥で眉が黃色、眼も覺めるやうな橙黃色が咽喉から腹へむかつて次第に淡くなつてゐる。鳥は庭の樹から樹へ、腹をかへして金の矢のやうに飛ぶ。

「お父さん、あれ何て鳥」

「ノゴマだ」

子供は心を殘して出かける。私達は大掃除に取掛る。しかし私の裏には何となくそぐはないものが、何だか物が間違つてゐるやうな感じがある。考へてみればそれは今でも尙庭に來てゐ

る鳥の事だつた。それで早速圖鑑を出して、疊を上げた座敷の床板の上で調べた。それはキビタキだつた。間違へて他人の帽子をかぶつてゐた時のやうな、氣持の上の適合の惡さの原因がこれで分つた。キビタキは夜まで庭で遊んでゐた。

夕方、子供が歸つて來たので早速其話をした。子供は自分で圖鑑を繰つた。折柄花盛りのライラックの大枝に棲まつて身動きもせずに此方を見てゐる美しい小鳥は、まさに圖鑑どほりのキビタキだつた。

其夜子供は色鉛筆を持つて彼女の野外帖に向つてゐた。

私は自分の「野生花」に、寧ろ今日の經驗の心理的經過をこまごまと書きつけた。

「お父さんはいろんな會へいらつしやるのね」と子供が云ふ、「叙子もたまには連れてつて頂戴よ」

たまには。私は苦笑しながら子供の顔を見る。それを、大人から聽き覺えた一つの副詞のいくらかコケットな愛嬌のある使用か、それとももう少し底意のある厭味（イロニー）か、どつちだらうかと

思つて此の十一になる娘の顏を私は見る。

だが、すべての兆候から推して、どうやら厭味の方では無いらしい。そこで私は答へる。

「連れて行つて上げるよ、そのうち子供に良い會があつたらね」

「えゝ、屹度ですよ」

わが子と、とりわけわが娘と、彼女の欲する何かを約束するといふ事は、父親にとつての一つの悅び、むしろ一つの熱情(パツション)である。

なるほど私は幾つかの會へ入つてゐる。自然科學や山の會へ。そして夏も近づくと、さういふ會が何れも活動を開始する。講演會がある。見學の小旅行がある。大小の集會がある。それに對して皆が皆出席しないとしても、別にまた文學の方の集りを加へれば、しぜん出席の度數も多くなる。時には意に反してさへ。

「連れて行つてやつたらいいぢやないか」と、私の友人で、いつも私の「批評の批評家(コントル・クリテイツク)」である○○君が云ふ、「君の科學は君の趣味か道樂に過ぎない。ところが子供にとつて、彼等の時代は、將來は、凡てこれ科學萬能の生活光景の時代だ。彼等と科學とは、君達のやうな親が氣の付かない間に、すでに互に默契し合つてゐる。だが安心するがいい。子供の批判や選擇とい

ふものは、親の考へてゐるよりも遙かに健全でもあれば實際的でもあるのだから。兎に角、君の信念の、或は頑固な考への如何に拘らず、（どつちでもそれは同じことだ！）科學は子供の、民衆の、即ち未來の魂を引摑む。それは善い事だ。それは自然な事だ。君の子供を、時代に置去られる君の道連れにしないがいい」

私は苦笑ひして答へる。

「君の云ふ事は半分尤もだ。僕はその半分の眞理に對しては君に敬意を表する。僕も又未來を愛し、子供等の未來を祝福する。しかしそれだからと云つて、僕は未來におもねつたり未來と現在とを混同したりはしたくない。現在は僕等のものだ。太陽は僕等のために南中してゐる。この正午に、この不安と希望とにギラギラ輝く暑い白晝に、汗水たらして孜々として働く者、又事實働かねばならない者は僕等だ。僕等に對して全身の力と勇氣とを要求する此の現在に、僕等が徒らに未來に心醉したり未來を謳歌してゐたら、一體誰が僕等に代つて仕事をし、誰が愛する未來のため　蜜や花粉を集めてやるのだ。

子供は幼い。彼等はその無垢の原型（プロトタイプ）によつて僕等大人を反省させたり、淸めたり、喜ばせたり、又そのため心痛させたりする。しかし彼等幼蟲のやはらかな額に、たとひどんな天才

の、どんな多望な民衆の星の極印が捺されてゐると知らされようとも、僕等はそれに心を奪はれて、僕等自身の責務や良識を捨てゝしまつてはいけないのだ。

よく未來・未來・子供・子供と云ふ。私共の家庭ではすべて子供を本位にしてゐますと云ふ。それは未來に對する或種のディレッタンティズムとは云へないだらうか。僕は僕等の時代の現實をもつと眞面目に考へたいのだ。未來を神樣のやうに思つたり、子供を何處かの國から預つた王子樣かなんぞのやうに幻想したくはないのだ。

僕は子供の魂の美しさを見ると同時に、その美の脆いこと、脆いが故に僅かな惡德にもたやすく感染する事を知つてゐる。その危險から身を以て彼等を護つてやるのは子供の親だ、僕等だ。そしてさういふ危險は、僕等の問題に立歸れば、見學の會とか、採集の會とかいふものにさへある。會そのものは惡くなくても、會の空氣の中に、しばしば親としては困るものがある。僕等大人は其等の會の社交的な一面からも貴重な知識や體驗を得る事が出來る。しかし子供はさうは行かない。少し注意すれば僕等親でも教へる事の出來るやうな事を學んで來ると同時に、學んで欲しくない事まで、換言すれば親の教育方針の根本に牴觸するやうな事まで、否さういふ事を特に子供らしい好奇心で學んで來る。それでは困るのだ。しかし會へ遣つた以

上、其點についてだけ子供の眼をふさぐ事は出來ない。だから容易には僕は子供を會へ出したり、連れて行つたりしないのだ」

ラヂオ。

「叡子、ラヂオつて事を佛蘭西語ではなんと云ふね」

「T・S・F」

「それは略して云ふ言葉だね。本當の言葉は？」

「知りません」

「習はなかつたのかい」

「習ひません」

「それでは燕號のやうに特別に速く走る汽車の事はなんと云ふね」

「特急と云ひます」

「それも略した言葉だね。略さないで正しく云ふと、なんと云ふね」

「知りません」
「しかしテエゼフも特急も、字を見るとちやんと譯の分る言葉の、その頭の字だけを取つて並べて作つた言葉だと云ふ事は知つてゐるだらうね」
「知りません」
時代の犧牲よ！　私は一々字を書いて敎へる。それにしても、すべてが餘りに簡略ではないか。すべてが餘りに淺薄ではないか。一歩一歩の吟味の精神が面倒臭がられて、手つ取りばやく要領を得るための速度だけが喜ばれる。一體、今の世の中はそれほどにも時間に貧困してゐるのだらうか。
だが、今、夜のラヂオで鳥が鳴いてゐる。遠い土地の夜の深山で鳴く、美しい、悲しい、ノクタアナルな鳥の聲が、家ぢうの者の集まつて悠々と聽いてゐる明るい茶の間の、小さな箱の孔から流れ出す。
「ブッポッポー！　ブッポッポー！……」
寢に行く前の寂子は、パジャマを着て、母親の膝にもたれて聽いてゐる。私は緣側の籐椅子で、庭の暗がりを見ながら聽いてゐる。知つてゐるかぎりの山や谷の中で、此聲にもつともふ

さはしい處を考へながら、四萬や法師、尾白川の谷奥などの夜を眼の前にゑがいてみる。急に山へ行きたくなる。

「ブッポッポー！　ブッポッポーー！……」

鳥は此夜一夜を鳴きあかすかとばかり、明るく暗く、樂しげに又悲しげに鳴いた。そして放送は終つた。あとは何かが拔け落ちたやうに空虛だつた。しかし其の沈默の深淵では、まだしばらくは幻聽が歌つてゐた。

子供は「お休みなさい」をして、女中に連れられて二階へ上つた。少しの間、今度は二階から「ブッ　ポッポー」といふ聲がきこえた。それがいつの間にか止むと女中が下りて來て云つた、

「お休みになりました」

或種の言葉への同情。

成功した放送以來、佛法僧は俄然街の人氣者になつた。深山の鳥の聲は、鳥に最も緣の薄い

人々の口にも喧傳された。しかし其姿は依然として疑問であつたし、一般の公衆も姿の事などは殆ど問題にしてゐなかつた。公衆といふものは、名よりも實を採る實際家であつた。

子供は私に連れられて會へ行つた。彼女は科學博物館で野鳥の生態寫眞を見、剝製を見、その映畫を見、そしてU農學博士の講演を聽いた。

其時博士が佛法僧に言及した中に、「姿の佛法僧と聲の佛法僧」といふ言葉があつた。それは或記者の創作にかゝる新らしい表現だつたさうだが、その言葉のどういふ點が氣に入つたのか、叔子は其後好んで此の言葉を口にした。それで或時私は訊いてみた。

「お前はよくさう云ふが、其の言葉の何處が氣に入つたの？」

「どこつて、お父さん、そりやあ叔子にはわからないわ。だけど本當に姿と聲とは違ふんでせう？　その佛法僧の」

要するに分つてゐるのである。そしてそれは子供に對するジャーナリズムの勝利とも云へる。

子供は私と新宿の雜踏の中を歩いてゐる。或る四ツ角まで來ると、其處に古い洗面器を前へ置いて、一人の老人がぼんやり箱に腰をかけてゐる。洗面器の中には七八匹のヤドカリが入つてゐる。老人は此のヤドカリを賣る人なのである。しかし何も云はない。立てた膝の上に皺だらけの兩手を組むやうに載せて、凹んだ空ろな眼をして、默然と自分の賣物を見てゐる。ヤドカリでは口上もあるまいし、云ふべき事は若い時皆云つてしまつたのであらう。

私の子供はそれを見るとつかつかと近づいて行く。そして其處へしやがみ込む。炎天の雜踏の中で、その老人と、琺瑯が剝がれて錆のついた洗面器と、乾燥したヤドカリと、私の娘の華やかな洋裝とが、餘りに苦しい對照ではないか。

ヤドカリを見てゐる子はもう一人ゐた。それは五つ位になる男の子で、これも父親が傍に附添つてゐた。男の子は、見馴れぬ氣味の惡い小さい生物を子供が見る時よくするやうに、兩手をぶらんと下げて、立つたまゝ、下眼使ひに、メランコリックな表情をしてそれを見てゐた。

私は其の子と其場の光景とに心を動かされた。今に買つて貰ふだらうか。買つたら老人はどういふ風にして賣るだらうか。又客はそれをどうして持つて行くだらうか。

「これ死まない？」と子供が父親を見上げて訊いた。

「駄目だよ、坊や。直ぐ死んぢまふよ」と父親は低い聲で答へた。

ヤドカリはがりがりやつてゐるのもあるが、もう殆んど動かないのが多かつた。日盛りの新宿街頭の、水も無い熱い洗面器の中で、それは甲殼類の悪夢であつた。

小さい男の子は、尚も眼を放さずぢつと蟹を見てゐた。その眼は寧ろ悲しげに嚴肅とも云ふべきであつた。

「行かう、坊や」

やゝあつて父親はさう云ふと、子供の手を引いて立去つた。私の娘もまた腰を上げた。私達は歩き出した。

「ねえお父さん、今の子供お悧巧ね」と歩きながら叡子が云ふ。

「どうしてさ」

「だつて、眞面目になつて、大きい人みたいに眞面目になつて、あのヤドカリを見てゐたわ。あんな小さい子であんなに眞面目な子、叡子見た事無いわ」

私は娘がヤドカリばかりでなく、あの男の子をも見てゐた事を喜んだ。

「さうだね、お父さんもさう思つたよ」

「あの子學校へ行くやうになつたら、きつと理科がよく出來てよ」

「うん」

私達は或る百貨店へ入る。彼女は新刊の鳥と植物とのガイド・ブックを一冊づゝ買つてもらふ。そして尚頻りに食堂をねだる。そこで私は云ふ。

「お前は欲しい本を二册も買つて貰つた。それで未だそんな贅澤な事を云ふのかい。さつきのヤドカリ賣のお爺さんを覺えてゐるかい？　それから、お前がお悧巧だと云つたあの小さい男の子を」

子供は反省する。素直に反省されてみると、今度は又食べさしても遣りたくなる親心を無理に殺して、私は娘の手を引きながら外へ出る。

往來には午後の陽が華やかに射して、眞靑な空では廣告氣球が風に吹かれてゐる。樂しい樂しい暑中休暇も、もう直き來る……

昭和十三年七月十五日印刷
昭和十三年七月二十日發行
昭和十五年八月五日再版發行

雲と草原

定價 金一圓六十錢

著者檢印

著作者 尾崎喜八

東京市神田區神保町一ノ三四番地
發行者 新島章男

東京市神田區美土代町二十二番地
印刷者 横山喜助

發行所 東京市神田區神保町二丁目三四番地
朋文堂
電話神田四五七七番
振替東京二五九八三番

印刷所 合名會社 活文舍

同じ著者による近業

詩集　旅と滯在（増補版）　朋文堂（既刊）

散文集　山の繪本　同（同）

飜譯　ヘルマン ヘッセ　ヴンデルング　同（同）

同　ヘルマン ヘッセ　旅のよろこび　同（準備中）

飜譯　エミール ジャヴェル　一登山家の思ひ出　龍星閣（既刊）

同　ジヨルジユ デユアメル　北方の歌　同（同）

同　ヘルマン ヘッセ　母に歸る　三笠書房（同）

逗子八郎氏著

こころの山

◎岳人待望の實踐登山家の文學的山行記、現はる！

定價　一圓六十錢
紙數　四六版　三〇〇頁
寫眞　八葉
裝幀　富田通雄氏

表紙六度刷
豪華版

著者は夙に『短歌と方法社』を主宰し新短歌壇現役の第一人者として縦横の活躍をなしつゝある人傍ら多年山に精進し　現に安川山岳會のチーフリーダーとして同會今日の隆盛を築き上げし功勞者の一人。本書はその不斷の實踐より生れたる山行記の第一集にして、氏の行文の特色の一は印象極めて明瞭なる點にあり、故に讀者は著者と共にさながらそのコースを共に歩む思ひあるべく、同時に歌人としての鋭く豐かなる感受性と實踐登山家としての體驗氣魄とは行間の隨所に漲り、一讀渾然たる山岳文學の新しき出現を思はしめるものがある。

加ふるに、著者十年の勞作になる山岳歌中よりその精髓を抜きたる百二十首は一首毎に雲煙飛動朗々高唱すべく、本書の立體感を深からしめてゐること甚大である。

實に本書一巻は山のこころを心となし、山への愛に生きる人々にとつて無二の伴侶たるのみならず、亦岳人山行に際しても、一本をザックの底深く携行し、以て心の糧となすに足る好著であらう

（内容の一斑）

第一部（長篇紀行）
高原のこころ
冬の草山
シュプールの言葉
秋川のみなかみ
アルプスの美酒

第二部（隨筆）
草山あるき
私の山と子供達
月の出と淺川
彌陀ケ原
番場島小屋
思ひ出の奥多摩

第三部（溪流遡行記）
日原川カロウ谷
奥多摩海澤
丹澤オバケノ澤
有馬谷白谷入
秩父東澤

第四部（山岳歌）
穗高岳
槍ケ岳
劍岳
北鮮金剛山
兩神山
上高地の秋

★牧水以來久方振りの歌人の紀行文集！
勇壯なるアルピニズムと低山逍遙の心との匂ひ高き交響樂！

振替貯金口座　東京二五九八三番

朋文堂

《過去二十年間に現れた山岳書中の逸品》と獨墺山岳會の會報で折り紙をつけられた山想集

――作者マイエルの裡に脈々として搏つ哀しい「山へのあこがれ」は、おのづから作品自體をして甘美な感慨に耽らしめてゐることは蔽ひ得ません。山が心底から好きになつたことが、その人間にとつては生涯の大きな轉回を意味するもであることを私たちは等しく味はつて來てゐますが、究極するところ、この「行爲と夢想」は、さうした人間のひとりがリリカルに山を哲學し、彼の内面生活の中に山の意味を打建てた、一の人性的な記錄であり、また、さうした試みを愛情を以つて企てたところに私はこの書物の珍重すべき價値を認めたいと思ひます。山と人間との、決して偶然でない結び付きを説いて私たちを快くほほゑませるマイエルの山登りには、魂の垢がつけられてをり、しかも、私たちの場合と同じやうに、その魂は色のない貧しい都會の生活に壓されては、みじめな喘ぎを繰りかへしてもゐるのでした。――譯者

山をめぐる 行爲と夢想

エーリヒ・マイエル著
荒井道太郎譯

新四六版一六〇頁
定價金一圓

朋文堂圖書目錄

東京市神田區神保町一ノ三四
振替口座東京二五九八三番
電話神田四五七七七番

紀行・隨筆

山を行く　高畑棟材著　四六判　五〇〇頁　定價一・〇〇
行雲とともに（特製版）　同　四六判　二四〇頁　定價二・〇〇
同（普及版）　同　四六判　二四〇頁　定價・八〇
山の繪本（特製版）　尾崎喜八著　四六判　三五〇頁　定價二・五〇
同（普及版）　同　四六判　三五〇頁　定價一・六〇
雲と草原　同　四六判　二八〇頁　定價一・八〇
こゝろの山　逗子八郎著　四六判　二九〇頁　定價一・八〇
山と丘陵　中村謙著　四六判　三五〇頁　定價一・六〇
泉を聽く　西岡一雄著　四六判　三一〇頁　定價一・五〇
雪の旅　松井幹雄著　四六判　四三〇頁　定價二・〇〇

藝術小品　山岳漫歩　春日俊吉著　新四六判　二七〇頁　定價・八〇
山と漂泊　朝史門著　四六判　二四〇頁　定價一・六〇
山村の人々　依田秋圃著　四六判　三二〇頁　定價一・六〇
スキー短篇集　最後の蠟燭　坂部護郎著　新四六判　二三〇頁　定價一・〇〇
雪と人生　高橋喜平著　新四六判　一八〇頁　定價・五〇

研究

秩父　原全教著　四六判　六五〇頁　定價二・五〇
同　續篇　同　四六判　六五〇頁　定價二・五〇
大峰山脈と其溪谷　中川秀次 富川淸太郎著　四六判　四五〇頁　定價二・五〇
六甲　竹中靖一著　菊判　四三〇頁　定價三・五〇
祖母嶽　百溪祿郎太著　四六判　一二〇頁　定價一・五〇
高山植物の培養　河野齡藏著　四六判　二五〇頁　定價二・五〇
原色日本高山植物圖說　同　菊判　二五〇頁　定價五・〇〇
同　續篇　同　近刊

書名	著者	判型	定價	頁數
キャンピングの指導	山口季次郎著	三五判	・五〇	二〇〇頁
改訂 ハイキングの手引	時田勇著	三五判	・四〇	一〇〇頁
積雪期登山	藤田信道著	四六判	一・〇〇	三一〇頁
登山技術	高須茂著	四六判	一・二〇	一七〇頁
豐後國志	唐橋世濟著	菊判	五・〇〇	三三二頁
豐前志	渡邊重春著	菊判	四・〇〇	二六八頁
大分縣方言の研究	三ケ尻浩著	菊判	二・二〇	二三〇頁
大分縣民話集	同	四六判	一・二〇	二〇〇頁

案内

書名	著者	判型	定價	頁數
山と高原の旅	中村謙著	四六判	二・〇〇	六〇〇頁
東京附近山の旅	分擔執筆	四六判	一・六〇	五四〇頁
同 續篇	同	四六判	一・六〇	四五〇頁
ハイキングの指導と案内	田中清夫著	三五判	一・八〇	七〇〇頁
東京中心 徒歩コース七百種	厚生省・奬健會編	四六判	一・二〇	三一〇頁

書名	著者	判型	定價	頁數
新訂 奥多摩溪谷	岩根常太郎著	三五判	・九〇	二五〇頁
改版 奥武藏の山と丘陵	春日俊吉著	三五判	・八〇	一八〇頁
上信境の山々	中村謙著	三五判	一・〇〇	三〇〇頁
京都北山と丹波高原	森本次男著	三五判	・九〇	二四〇頁
比良連嶺	角倉太郎著	三五判	・九〇	三三〇頁
上越の山と溪	中村謙著	三五判	一・二〇	三八〇頁
近畿の山と谷(改訂版)	住友山岳會著	四六判	一・八〇	五八〇頁
増訂 九州の山々(増訂版)	北田正三著	三六判	一・二〇	二八〇頁
餘暇善用 市民ハイキング	菊地隆之著	三六判	一・四〇	四五〇頁
改訂増補 東京附近温泉の旅	石村新吉著	三六判	一・五〇	四五〇頁

創作・詩歌

書名	著者	判型	定價	頁數
山の仲間	千坂正郎著	四六判	一・二〇	二五〇頁
マッターホーンの北壁を攀づ	山上雨鳥著	新四六	・五〇	一八〇頁
旅と滯在	尾崎喜八著	袖珍判	・五〇	九〇頁

朋 文 堂 版

¥ 1.60